高等小學裁縫教授書

第一二學年用

文部省

43386
教科書文庫
4
920
32-1916
20000
26534

教科書文庫
4
920
32-1916
2000026534

高等小學 裁縫教授書

第一二學年用

文部省

広島大学図書
2000026534

中央図書館
資料室
375.9
M014

慶應義塾大學圖書之印

佛教大學
26534
圖書

凡例

一、本書は、高等小學校裁縫科教師用教科書として編纂したるものなり。

一、本書は、第一篇を第一學年、第二篇を第二學年の兒童に課する豫定を以て編纂したるものなり。但し土地の狀況により又は兒童の發達の程度に應じて適宜に斟酌する所あるべし。

一、本書は尋常小學裁縫教授書に連絡して、更に程度を高め、教材の範圍を擴め、又應用問題を多くして運用の力を養はんことに勉めたり。

一、裁縫科の教授に於ては節約利用の方法を會得せしむること肝要なるを以て、本書に於ては特に此の點に意を用ひたり。

一、教材の選擇に就きては、つとめて實際生活に必要なるものを選びたれども、尙土地の狀況によりて適宜に斟酌する所あるべし。

一、教材の排列に就きては、兒童心身の發達、殊に手指の熟練の程度に從ふと共に、又つとめて他學科との連絡を保たしめんことを期せり。

一、寸法は鯨尺を標準とし、寸を單位とせり。又積り方に於ける算法は、つとめて簡明なる方法により、其の運用の簡捷ならんことを期せり。

一、各教材につきて教授法の大要を示したれども、強ひて之に拘泥するを要せざること勿論なり。

一、本書の備考に記したる事項を授くるに方りては、特に斟酌を加へて、其の宜しきを失はざらんことを期すべし。

高等小學

裁縫教授書

目錄

第一篇

第一學期

第一課　小裁・中裁物の練習……一

第二課　本裁單衣女物……一

第一　裁ち方……二

一　棒衽……二

1　裁ち切り寸法……二

2　積り方……三

二　鈎衽……三

1　裁ち切り寸法……三

2　積り方……四

三　裁ち方實習……六
第二　仕立方……九
一　仕立上げ寸法……九
二　標附け方……一〇
1　袖……一一
2　後身頃……一一
3　前身頃……一二
4　衽……一二
イ　棒衽……一三
ロ　鈎衽……一三
5　衿……一三
三　縫ひ方順序……一五
四　實習……一五
1　袖……一五
2　背縫及び肩當居敷當……一五

3　脇縫……一六
4　衽及び裾紬……一六
5　衿……一七
6　袖附……一七
第三課　既授裁ち方練習……一九
練習問題……一九
第四課　涎掛……二六
梅形涎掛……二六
一　裁ち方……二六
二　仕立方……二七
備考一　梅形涎掛型紙の裁ち方……二八
二　扇形涎掛……二九
第二學期
第五課　綿布繕ひ方練習……三一

第六課　本裁單衣男物……三一
第一　部分縫……三一
一　袖縫ひ方……三一
1　標附け方……三一
2　縫ひ方……三三
二　腰揚の仕方……三四
1　標附け方……三四
2　縫ひ方……三六
三　袖附け方……三六
第二　裁ち方……三八
一　裁ち切り寸法……三八
二　積り方……三九
三　裁ち方實習……三九
第三　仕立方……三九

一　仕立上げ寸法……三九
二　標附け方……四〇
三　縫ひ方順序……四二
四　實習……四二
1　袖……四二
2　背縫肩當居敷當揚……四二
3　脇縫……四二
4　衽及び裾新……四三
5　衿……四三
6　袖附……四三
第七課　袴の種類及び各部の名稱……四五
第一　種類……四五
第二　各部の名稱……四五
一　女袴各部の名稱……四六
二　男袴各部の名稱……四八

第八課　中裁女袴……四九
第一　裁ち方……五〇
一　裁ち切り寸法……五〇
二　積り方……五一
三　裁ち方實習……五二
第二　仕立方……五四
一　仕立上げ寸法……五四
二　標附け方……五五
三　縫ひ方順序……五五
四　襞取り方……五六
五　實習……五七
1　後前布の合せ方及び相引……五七
2　裾紮及び閂留……五八
3　後前襞の標附及び襞取り方……五八

4　後前筵襞の折り方……五八
5　紐の紮け方及び附け方……五九
附　疊み方……六〇
第九課　女腹合帶仕立方……六三
一　仕立方順序……六三
二　實習……六三
1　布の整理……六三
2　假綴及び標附……六三
3　縫ひ方……六四
4　心搘……六五
5　心附……六五
6　眞中の紮け方……六五
7　仕上げ及び飾糸……六五
第三學期
第十課　四つ身袷……六七

第一　部分縫……六七
一　袂袖縫ひ方……六八
1　標附け方……六八
2　縫ひ方……六九
二　筒袖縫ひ方……七一
1　標附け方……七一
2　縫ひ方……七二
三　元祿袖縫ひ方……七三
1　標附け方……七三
2　縫ひ方……七四
第二　裁ち方 胴裏並びに裾廻……七五
一　裁ち切り寸法……七五
二　積り方……七六
三　裁ち方實習……七八

第三　仕立方……八〇
一　仕立上げ寸法……八〇
二　標附け方……八二
1　袖……八二
2　表身頃及び衽……八二
3　裏身頃及び衽……八二
4　衿……八五
三　縫ひ方順序……八五
四　實習……八六
1　袖……八六
2　表身頃及び衽……八六
3　裏身頃衽及び裾合……八六
4　背脇の縫綴及び身八つ口……八六
5　袖附……八七
6　衽の縫綴及び衿下縫……八七

7　衿附並びに衿掛……八七
8　横綴……八八
第十一課　頭巾……九〇
大黒頭巾……九〇
一　裁ち方……九〇
二　仕立方……九一
備考一　雪帽子……九三
二　夏帽子……九五

第二篇

第一學期

第一課　本裁袷女物……九七
第一　裁ち方胴裏並びに裾廻……九七
一　裁ち切り寸法……九七

二　積り方……九八
三　裁ち方實習……一〇〇
第二　仕立方……一〇二
一　標附け方……一〇二
1　袖……一〇三
2　身頃……一〇三
3　衽……一〇四
4　衿……一〇五
二　縫ひ方順序……一〇六
三　實習……一〇七
1　袖……一〇七
2　身頃……一〇八
3　裾合……一〇八
4　縦綴……一〇八
5　身八つ口及び衿下縫……一〇八

6　袖附……一〇九
7　衿……一〇九
8　横綴……一一〇
第二課　本裁綿入女物……一一一
第一　部分縫……一一一
袖縫ひ方……一一一
1　標附け方……一一二
2　縫ひ方……一一三
イ　含み綿の作り方……一一三
ロ　綿の含ませ方……一一四
ハ　袖口の衍け方……一一四
ニ　入つ口の含み綿及び衍け方……一一五
第二　仕立方……一一六
一　標附け方……一一六
1　袖……一一七
2　表身頃……一一七
3　裏身頃……一一七
4　衽……一一七
5　衿……一一九
二　縫ひ方順序……一一九
三　實習……一二〇
1　袖……一二〇
2　身頃……一二〇
3　袖附……一二〇
4　褶合……一二一
5　綿の入れ方……一二一
6　衍け方……一二四
第二學期
第三課　本裁綿入男物……一二七
仕立方……一二七

一　標附け方……一二七
1　袖……一二八
2　身頃……一二八
3　衽……一二九
4　衿……一三〇
二　縫ひ方順序……一三一
三　實習……一三一
1　袖……一三一
2　表身頃及び裏身頃……一三一
3　袖附……一三二
4　裾合……一三二
5　綿の入れ方……一三三
6　紮け方……一三三
第四課　羽織の種類及び各部の名稱……一三五
第一　種類……一三五

第二　各部の名稱……一三八
第五課　本裁綿入羽織女物……一四一
第一　部分縫……一四一
一　前下り及び襠の附け方……一四一
1　標附け方……一四一
2　縫ひ方……一四三
二　衿の折り方、附け方……一四四
1　衿の折り方……一四四
2　衿の附け方……一四六
第二　裁ち方……一四七
一　裁ち切り寸法……一四七
二　積り方……一四九
三　裁ち方實習……一五一
第三　仕立方……一五四

一　仕立上げ寸法……一五四
二　標附け方……一五五
1　袖……一五五
2　身頃……一五五
3　襠……一五七
4　衿……一五七
三　縫ひ方順序……一五九
四　實習……一五九
1　袖……一五九
2　胴接……一六〇
3　背縫……一六〇
4　前下り……一六〇
5　襠……一六〇
6　袖附及び含み綿……一六〇
7　綿入……一六一

8　裾及び衿附の假綴……一六一
9　袖口及び八つ口縮け方……一六二
10　紐附……一六二
11　衿附及び衿縮……一六二
12　縫綴……一六三
附　疊み方……一六三
備考　袖無綿入羽織……一六四
一　裁ち切り寸法及び積り方……一六五
二　仕立上げ寸法……一六六
三　標附け方……一六六
1　身頃……一六六
2　襠……一六七
3　衿……一六七
四　縫ひ方……一六八
1　身頃及び襠……一六八

2 綿入れ方及び假綴……一六九
3 衿及び縫綴……一六九
第三學期
第六課 本裁袷羽織男物……一七〇
第一 部分縫……一七〇
襠及び衿附け方……一七〇
1 標附け方……一七一
イ 前身頃……一七一
ロ 襠……一七一
ハ 衿……一七二
2 縫ひ方……一七三
イ 前下り……一七三
ロ 衿附……一七三
ハ 襠附……一七四
第二 仕立方……一七五

一 仕立上げ寸法……一七五
二 標附け方……一七六
1 表袖……一七六
2 裏袖……一七六
3 身頃……一七六
4 襠……一七七
5 衿……一七八
三 縫ひ方順序……一八〇
四 實習……一八〇
1 袖口掛け方……一八〇
2 袖……一八〇
3 胴接……一八一
4 背縫……一八一
5 前下り……一八一
6 後襠……一八一

7　衿附……一八二
8　前襠……一八二
9　袖附……一八三
第七課　腹合帶仕立方練習……一八五
第八課　改良前掛……一八六
第一　各部の縫ひ方……一八七
一　ミシン縫……一八七
二　まとひ縫……一八八
第二　裁ち方……一八九
一　裁ち切り寸法……一八九
二　裁ち方實習……一九〇
第三　仕立方……一九二
1　袖……一九二
2　身頃……一九三
備考一　第一例……一九五
二　第二例……一九七

廣島大學圖書之印

高等小學 裁縫教授書

第一篇

第一課　小裁・中裁物の練習

本課の教授は尋常小學校に於て授けたる小裁・中裁物につき裁ち方、標附け方、縫ひ方の順序・方法等を復習問答して記憶を新にし置き、次ぎに兒童各自の任意の材料によりて何れか其の一を實地に練習せしむべし。

第二課　本裁單衣女物

要旨

本裁女物單衣の裁ち方、積り方、縫ひ方を授けて、是等に關する知識を與ふると共に、其の技能に熟達せしめ、且これが運用を自在ならしむ。

第一　裁ち方

一　棒衽

1、裁ち切り寸法

用布　並幅二丈八尺八寸

一、袖丈　一尺六寸　一、身丈　三尺九寸

一、衽下り　五寸　一、衿肩明　二寸五分

一、衽幅　四寸八分　一、衿丈　四尺七寸

圖　方ち裁(衽棒)衣單裁本

2、積り方

16×4+(39×6−5×2)=288……總丈

(288−16×4+5×2)÷6=39……身丈

{288−(39×6−5×2)}÷4=16……袖丈

之を公式にて示せば左の如し。

袖丈×4+(身丈×6−衽下り×2)=總丈

(總丈−袖丈×4+衽下り×2)÷6=身丈

{總丈−(身丈×6−衽下り×2)}÷4=袖丈

二　鈎衽

1、裁ち切り寸法

用布　並幅二丈八尺

一、袖丈　一尺六寸　一、身丈　三尺九寸六分

一、衽下り　四寸五分　一、鈎下　二尺二寸五分

一、衿肩明　二寸五分　一、衽幅　四寸八分

一、鈎の切り込み　七分　　一、衿丈　四尺八寸

圖方ち裁(衽鈎)裁本

2、積り方

16×4+(39.6×5−4.5)+22.5=280……總丈

{280−(16×4+22.5)+4.5}÷5=39.6……身丈

{280−(39.6×5−4.5+22.5)}÷4=16……袖丈

之を公式にて示せば左の如し。

袖丈×4+(身丈×5−衽下り)+鈎下=總丈

{總丈−(袖丈×4+鈎下)+衽下り}÷5=身丈

{總丈−(身丈×5−衽下り+鈎下)}÷4=袖丈

應用問題

一、並幅二丈九尺の用布にて女物を裁つに、袖丈一尺八寸、鈎下二尺三寸裁ち切りとせば、身丈何程なるか。

但し衽下りの寸法は普通とす。

答　三尺九寸九分

二、並幅一反の用布にて男物を裁つに、身丈三尺八寸、衽下り四寸の裁ち切りとして棒衽にせば、袖丈何程になるか。

答　一尺五寸

三、並幅の布にて女物單衣を裁つに袖丈一尺七寸、身丈四尺の出來上りとなるんとせば、總用布何程を要するか。

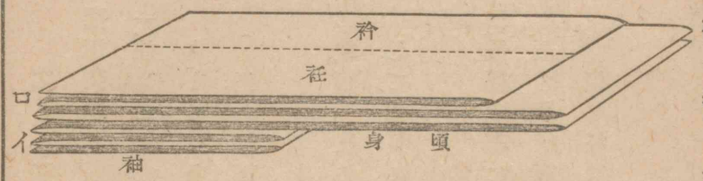
但し衽は鈎裁にて、衽下り六寸の仕上げとす。

答　二丈九尺二寸五分

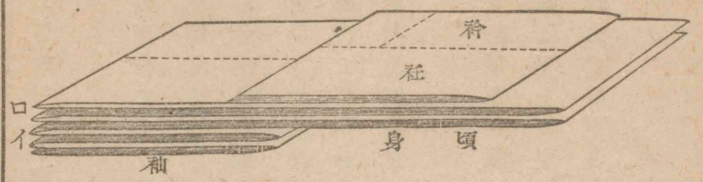
注意

布の折り方圖

第一圖



第二圖



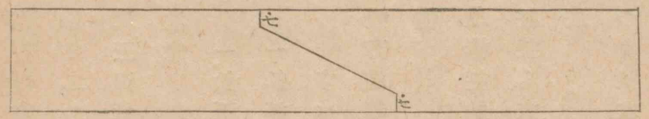
身丈は上下の縫代八分と、縫ひづまり一分とを加へて鈎下は普通の裁ち切りとして計算すべし。

三　裁ち方實習

實地の裁ち方をなすには、前に學びたる如く、先づ反物を解きて總丈をはかり、織斑・染斑・汚點等の有無を檢べ、表を中に織終りの方より卷きて、机上の右に置くべし。

次ぎに家庭より持參せる兒童各自の寸法書によりて、積り方の計算をなし、棒衽の時は第一圖の如く袖丈四枚、身丈四枚、衽丈二枚を折り、前の計算と全く一致せるや否やを確めたる後、(イ)「兩袖分」と、(ロ)「左右の身頃と衿・衽布」との部分を切り離すべし。

鈎衽の裁ち方



又鈎衽の時には第二圖の如く、身丈の處まで棒衽と同じやうに折り、次ぎに、衽丈一枚と、鈎下の長さだけの布一枚とを折りて、其の上に重ね、能く揃へたる後、(イ)と(ロ)との部分を裁ち切ること前の如くすべし。

それより袖を二つに裁ち切り、適宜に疊みて脇に置き、次ぎに身頃を取りて衿肩明の寸法を計り、待針をうちおき、其の處まで裁ち切り、後輪の方を切り離して兩身頃となし、疊みて前に裁ちたる袖の上に置くべし。

次ぎに衿・衽の布を取りて、寸法通り各〻の幅をはかり、縦に折りてこれを裁ち切り、棒衽の時には眞中より横に二つに裁ち切り、鈎衽の時には圖の如く、衽丈と鈎下との間の折目を七分づつ反對のむきに鋏を入れ、斜に線をひきて之を裁ち切るべし。

次ぎに衿布を取り織終りの方より丈をはかりてこれを裁ち切り、殘りを掛衿とし、何れも疊みて前の袖・身頃の上に重ね置くべし。

それより肩當・居敷當を裁ち、又三つ衿切をも揃へおくべし。

但し肩當は並幅一尺三寸位のもの二枚を取り、背につくべき方を一寸程長くして二つに折り、表に準じて衿肩明を裁ち切るべし。居敷當は並幅にて長さ一尺三四寸のものを普通とす。

注意

一、鈎下高きときは、鈎先の幅をなるべく廣く裁つべし。

一、鈎衽裁ち方の際は上前となるべき方に、布の裏の出でざるやう、よく注意すべし。

教授方法の大意

準備

本裁棒衽・鈎衽裁ち方及び折り方の圖

鈎衽裁ち方の説明用布

方法

四つ身單衣の裁ち方を問答して豫備とし、次ぎに本裁棒衽裁ち方の圖を示して、四つ身の裁ち方と異なる點を考へしめ、袖・身頃・衽・衿等につき、其の關係を説明し、それより本裁女物に要する用布の總丈、普通裁ち切り寸法及び積り方の算法を授け、十分了解せしめたる後、更に鈎衽裁ち方の圖を示して、棒衽裁ち方の圖と對照せしめ、鈎裁の方法及び其の注意すべき要點等を、説明用布につきて委しく説示し、後積り方の算法を授くること棒衽の時の如くすべし。次ぎに裁ち切り寸法、裁ち方の圖を寫さしめ積り方の算法を筆記せしめ、尚二三の應用問題を課して、其の運用を試み、後、前に記載せる順序によりて實地に裁ち方をなさしむ。

筆記の事項

裁ち切り寸法

裁ち方の圖

積り方の算法

第二　仕立方

一　仕立上げ寸法

一、袖丈　一尺五寸五分　一、袖口明　六寸乃至六寸五分

一、袖附　六寸五分　一、袖幅　八寸五分
一、身丈　いつぱい　一、身八つ口　三寸
一、衿肩明　二寸三分　一、肩幅　八寸
一、後幅　七寸五分　一、前幅　六寸
一、抱幅　五寸四分　一、衽下り　六寸
一、衿下　一尺九寸　一、衽幅　四寸
一、合褄幅　三寸五分　一、衿幅　一寸五分
一、裄　一尺六寸五分

備考

本裁女物は多くは袂を丸くし、衿裏を附けて廣衿とすれども、かくては仕立方困難にして、始めて本裁物を取扱ふ兒童には不適當なるを以て、なるべく簡易なる方法を取らんがため角袂・紵衿として仕立てしむる事とせり。

二　標附け方

標附をなすには先づ布の伸び縮み・歪み・皺・折目等を正しく直し、表を中にして左の順序によりてこれをつくべし。

一、袖　二、後身頃　三、前身頃　四、衽　五、衿

1、袖　表を中にして片袖づつ眞中より二つに折りて兩袖を重ね、圖の如く折目を左にして下に置き、前に示せる寸法によりて山・丈・口明・附・幅の標をなすべし。

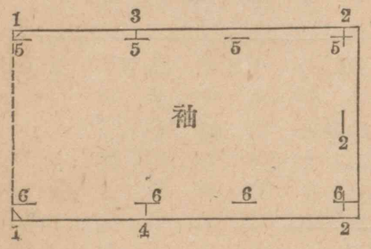
注意

一、篦標は何れの部分も成る可く小さく附け、且交叉するところは十の如くせずして丁の形とすべし。これ篦標の表に現れぬやうなさんがためなり。

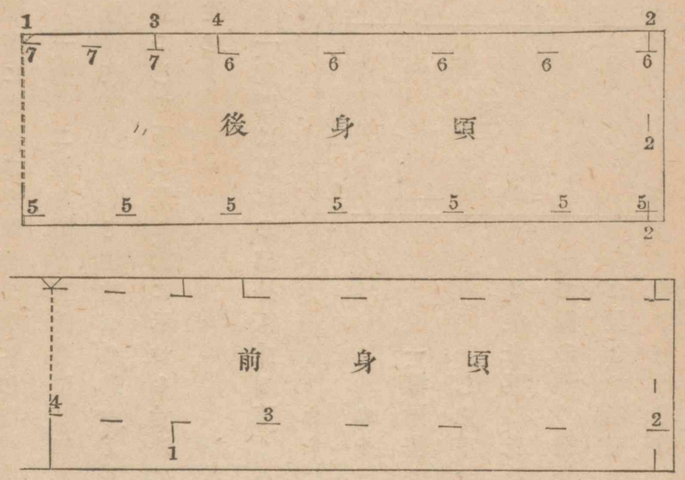
一、標附終らば肝要なるところに縫標をなさしむべし以下之に倣ふ。

2、後身頃　表を中にして二枚合せ、衿肩より二つに折りて圖の如く後身頃を上に、肩明を左に、背を手前にして下に置き、寸法通り山・丈・袖附・身八つ口・背縫代・後幅・肩幅及び其の中間處處に標をつくべし。

袖標附け方



身頃標附け方



3、前身頃　前身頃の上に重ねある後身頃をとりて左に開き、先づ後身頃より通したる袖附・身八つ口・後幅等の篦標を確めたる後、衽下り・前幅・抱幅等の標をつけ、裾口三四寸の間は眞直に標し、衿肩明より斜に定規を置きて圖の如く處處に標をつくべし。

4、衽　左右の衽を、表を中にして合せ、裁目を手前に、劍先を左にして下に置き、前に示せる寸法によりて丈・衿下・衽幅・合褄幅・衽附・衿附の標をなすべし。但し、衽丈は身丈より衽下りを減きたるものに一分を加へたるものとす。

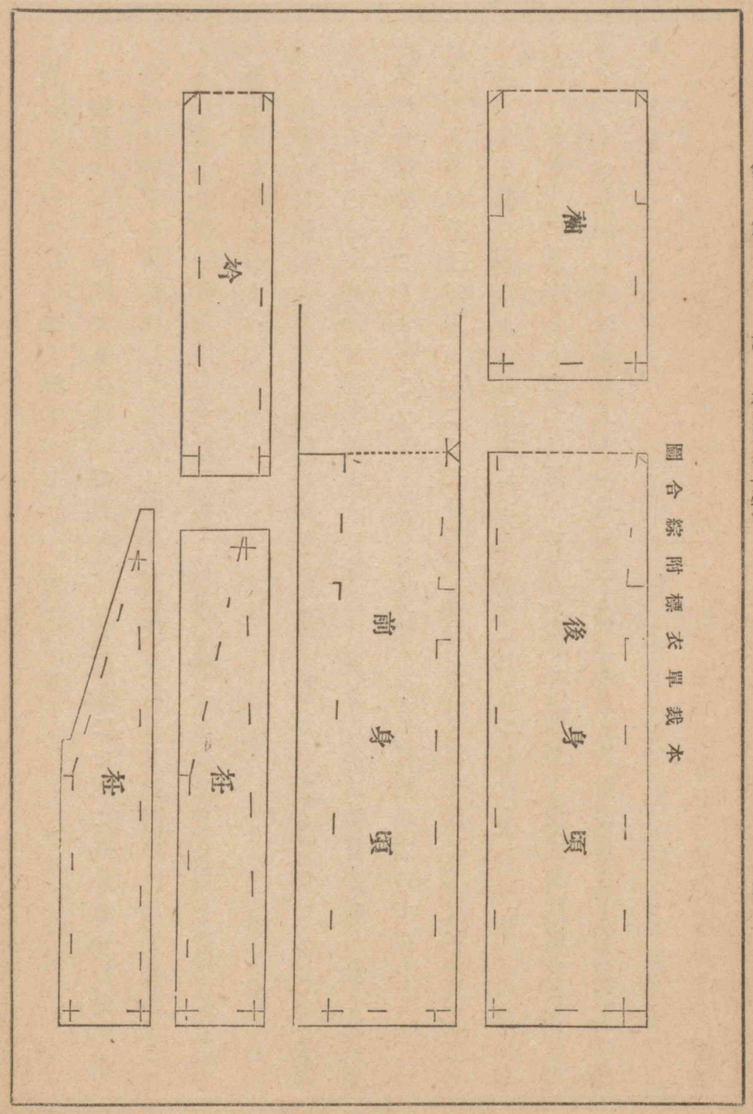
又衽附衿下の標は棒衽と鈎衽とにより

て、異なるを以て、左の如く標すべし。

イ、棒衽　下の幅標より合褄にて五分をつめ、劍先にて更に五分をつむ。此の場合には、衿下を眞直にして、全體に四分の縫代を取る。又衿附の標は、劍先のところに著の分、幅一分を殘して、此の標と衿下の標とをつなぎ、定規を置きて其の間處處に標をつくべし。

ロ、鈎衽　衽附の曲りは、衽先幅の廣狹によりて異なれども、普通いつぱいに裁ちたるものは劍先三寸程手前より二分曲げ、廣きものは棒衽の時の如く裾口又は合褄のところよりこれをまぐ。又合褄幅の標は、衽附の方にて少しも曲げざるときは衿下の方のみにて三分乃至五分をつめ、衽先廣くして衽附の方にても多少曲げ得るものは兩方にて適宜にこれをつむべし。

5、衿　表を中に眞中より二つに折りて下に置き、寸法通り山・丈・衿附縫代・衿幅の標をつくべし。但し丈は出來上りの衿肩明と、衽下りと衿附の長さとを加へたるものとす。



圖合縫附標衣單裁本

三　縫ひ方順序

一、袖　二、背縫
三、肩當・居敷當　四、脇縫
五、衿下　六、衽附
七、裾紵　八、衿附
九、袖附

四　實習

1、袖　表を出して袖下を縫ひ、更に裏を出して右袖は袖下より、左袖は袖口の方より縫ひ始め、口明の處は何れも抄ひ留をなして、留め際の糸のあらはれぬやう手際よく且丈夫に糸留をなし、手前に折り返して袂の角を綴ぢ、袖口を三つ折紵にすべし。但し針目のあらさは凡そ三四分にて、表にあらはるる針は、内袖は口明元の一針下、外袖は口明元のところまでにて、その餘の一針は只縫込のみに通して打ち留をなし置くべし。

2、背縫及び肩當・居敷當　先づ衿肩明をかがり、肩當・居敷當の裁目を伏せ、（居敷當

は下となすべき一方のみ伏せ置く背を縫ひ、裾の處は二寸程返し留をなし、左身頃の方に折をつけ、次ぎに肩當切を右の後身頃の背縫目に添うてこれをつけ、終りを一針返しおき、この糸にて更に背縫の耳際を裾口のところまで縫ひ行くべし。

居敷當は先づ幅を二つに折りて後身頃の裾口より凡そ一尺程上りたるところにあて、裏を一寸、表を五厘程の針目としてあらく綴ぢつけ、次ぎに左右及び上方を表に紮けつくべし。

注意

背縫の返し留を多くするは、裾の綻（ほころ）びぬ爲めなれば、脇縫も衽附も同樣にすべし。

3、脇縫　兩脇を縫ひ、上を抄ひ留にして、下を返し留にして、前身頃の方に折りをつけ、縫込を開きて割り躾をかけ、尙此の縫込を左右ともに一寸二三分の針目にて表に綴ぢつくべし。

4、衽及び裾紮　鈎衽の時は先づ鈎の裁目をかがり、衿下を紮け、前身頃に合せて

標通り稍〻弛めに衽をつけ、劍先の返し針は斜に縫代の方に一寸程返し、衽の方に折をつけて縫込を脇縫の時の如く表に綴ぢつくべし。

次ぎに三四分の針目にて小裁物と同じ仕方にて裾紮をなすべし。

5、衿　衿の山標と背縫とを合せて待針を打ち、衿肩廻より劍先までは衿を稍〻弛めに、劍先より三四寸下までは衿・衽とも同樣に、合褄より三四寸上までは衿を稍〻張りめに、それより合褄までは亦同じ樣に合せて何れも待針を打ち、衿の方を見て下前より附け始め、劍先及び衿肩廻のところは一針返して小針に縫ひ、背縫のところも亦返し針をなし、それより上前も下前と同じく待針を打ちて縫ひ下げ、始め終りを抄ひ留にして衿の方に折をつけ、三つ衿を入るべし。

次ぎに衿幅の折をつけ、幅標を合せて衿先を縫ひ、裏の方に返し、眞中・兩衿肩明及び處處に待針を打ちて、布目の歪まぬやう注意して紮けつくべし。

6、袖附　袖と身頃との山標を合せて、四つ身單衣の時の如く待針を打ち、袖をつけ、縫ひ始め及び縫ひ終りを抄ひ留となし、次ぎに袖八つ口及び身八つ口を耳紮となす。その針目は七八分にして、袖附元より二針ばかり多く紮け置くなり。後總

體に少しく霧を吹き、烙鏝をかけて、仕上げをなし、正しく疊みて壓を置くべし。

注意

身頃の肩幅廣きときは、二分程の縫代にして二枚に折り、後袖をつくべし。

教授方法の大意

準備

女物單衣の實物若しくは標本、並びに名稱圖

方法

中裁單衣の仕立上げ寸法を復演せしめ、次ぎに本教材たる女物單衣の實物又は圖を示して、各部の仕立上げ寸法をこれと對照しつつ説明し、能く記憶せしむ。次ぎに中裁單衣の標附け方及び縫ひ方順序を問答し、本裁物のこれと異なる部分を説き、其の寸法、標附け方及び縫ひ方順序を筆記せしめ、それより實物につきて仕立てしむ。而して右仕立方終りて更に其の要所を問答して、本課に於ける確實なる知識を得しむ。

第三課　既授裁ち方練習

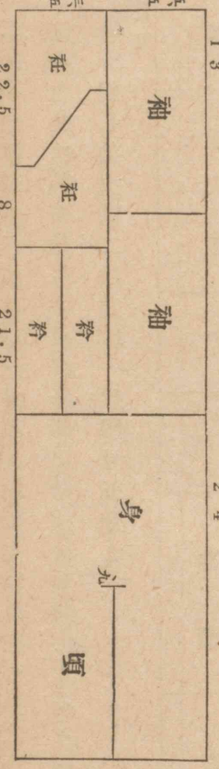
要旨

本課は小裁・中裁・本裁等の各種類につき、既に授けたる知識を應用して十分其の裁ち方に習熟せしむ。

練習問題

一、用布並幅長さ一丈を以て一つ身鈎衽を裁たんとするに、袖丈一尺三寸にせば身丈及び衽丈は何程なるか。且其の裁ち方圖を記せ。

但し衽下り一寸五分、鈎下八寸とす。



答　身丈、二尺四寸
衽丈、二尺二寸
五分

二、用布並幅長さ二丈八尺一寸の片面物を以て三つ身二枚の裁ち合せをなさんとせば、其の裁ち方及び各部の寸法は如何にすべきか。

但し袖丈は二枚共に一尺四寸五分とす。

三、用布並幅長さ一丈四尺四寸を以て四つ身筒袖を裁たんとするに、袖丈七寸とせば、他各部の寸法は何程となるか。

四、用布大幅(二尺幅)長さ一丈四尺六寸にて普通女物棒衽の裁ち方

但し身丈は三尺九寸とす。

備考

以上の問題を課したる後尚時間に餘裕あらば、次ぎの如き裁ち方を授けて、なるべく本課に於ける知識の擴充をはかるべし

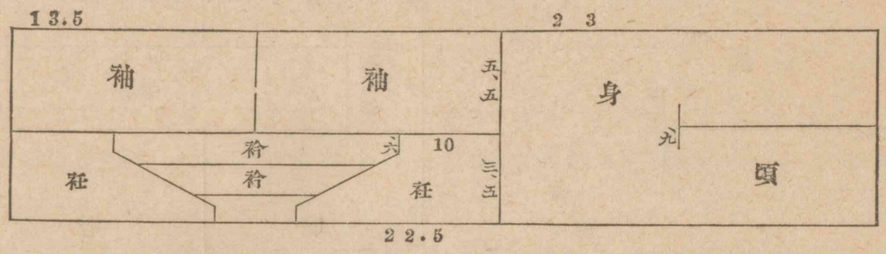
一、用布並幅長さ一丈五尺五寸にて男物襦袢の裁ち方

袖丈×4+身丈×5+衿肩廻並びに衿縫込=總丈

{總丈−(袖丈×4+衿肩廻並びに衿縫込)}÷5=身丈

{總丈−(身丈×5+衿肩廻並びに衿縫込)}÷4=袖丈

二、用布片面物並幅一丈にて一つ身鉤衽の裁ち方

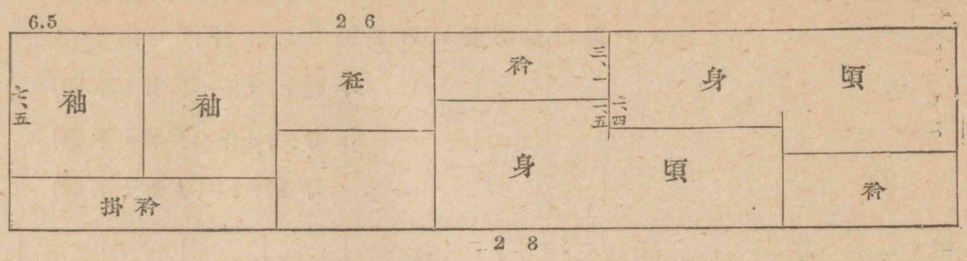


袖丈×4+身丈×2=總丈

(總丈−袖丈×4)÷2=身丈

(總丈−身丈×2)÷4=袖丈

三、並幅長さ一丈三尺六寸の用布にて三つ身筒袖の裁ち方

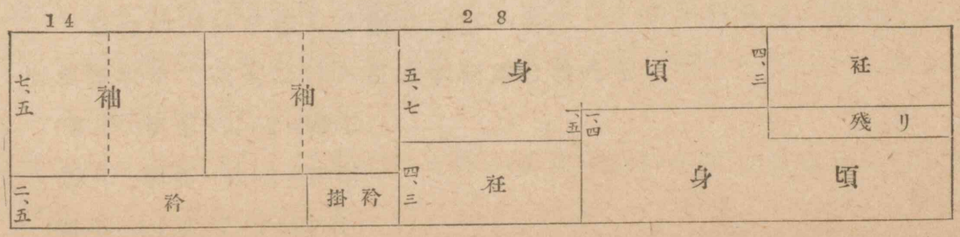


袖丈×4+身丈×4−衽下り=總丈

{總丈−(袖丈×4+衽下り)}÷4=身丈

{總丈−(身丈×4−衽下り)}÷4=袖丈

四、用布幅一尺長さ一丈四尺の片面物にて三つ身袂袖の裁ち方



袖丈×4＋身丈×3＝總丈

(總丈－袖丈×4)÷3＝身丈

(總丈－身丈×3)÷4＝袖丈

五、並幅長ゝ一丈九尺にて四つ身逆衽の裁ち方

但し衽上下の曲りの差は五分とす。

(袖丈＋身丈)×4＝總丈

(總丈－袖丈×4)÷4＝身丈

(總丈－身丈×4)÷4＝袖丈

六、並幅長ゝ二丈三尺の用布にて前衿裁の裁ち方

袖丈×4＋身丈×5－衽下り＝總丈

(總丈－袖丈×4＋衽下り)÷5＝身丈

(總丈－身丈×5－衽下り)÷4＝袖丈

教授方法の大意

前に授けたる小裁・中裁・本裁の裁ち方及び各部の寸法を問答して豫備とし、次ぎに本課の練習問題を板書して能く考へしめ、雜記帳を出して裁ち方の圖を畫かゝ、之に各部の寸法を記入せしむ。

一回出來上りたらば、二三の優良なる答を板書し、兒童と共に批評訂正して完全なるものとなし、後之を筆記せしむ。

第四課　涎掛

要旨

涎掛の裁ち方、縫ひ方を授けて其の技能に習熟せしめ、兼ねて小切類の利用法を了得せしむ。

梅形涎掛

一　裁ち方

用布表地　白キャラコ或は綿ネル・唐縮緬の類　八寸四方

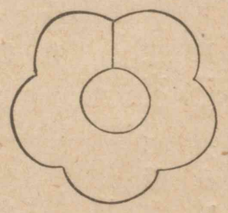
同　裏地　金巾・キャラコ・綿ネルの類　表と同寸

同　紐地　唐縮緬類　長さ一尺七寸、幅一寸三分

右の用布を裁つには、表裏の布を能く合せて、上に型紙を載せ、二三ヶ處に待針をなし、型の通りに標をつけ、後型紙を取りて、標通りに裁ち切るべし。

注意

一、表裏の裁ち方をなさしむるには、豫め圖の如き型紙を裁ち置き、これを各兒童に貸し、これに合せて先づ型紙を裁たしめ置き、後この型紙を用布にあてて裁たしむべし。

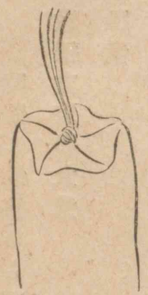


梅形涎掛

一、用布に白色を選びたるは、屢〻洗濯して清潔を保つに便利なるが爲なり。されど場合によりては色物又は形附物等を用ふるも可なり。

二　仕立方

表裏布を合せて待針をなし、廻りを半返しに縫ひ、引き返して能くこれを整へ、縁廻り及び紐附のところにあらく縫躾をなし、後、紐の中央を涎掛の表紐附の中央に合せて待針をなし、右の方より半返しに縫ひて平躾をかけ、次ぎに裏布の方を見て紐の端より躾をかけて小針にこれを綴け、終らば兩端を圖の如く五つに折りて留め置くべし。



表裏の地質薄きものを用ふるときは、晒木綿を同形に裁ちて表の方に綴ぢつけ置き、後、裏を合せて縫ひ行くべし。又時宜によりては紐に心を入るるも可なり。

注意

時間に餘裕あらば、緣廻りに藤縫等の飾をなさしむるを可とす。

教授方法の大意

準備

梅形涎掛型紙並びに仕立上げの標本

方法

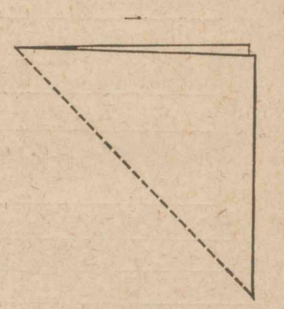
涎掛の種類・名稱・形狀・地質等につき、兒童の知れるところを問答し、次ぎに梅形涎掛の型紙及び仕立上げの標本を示して、用布の丈、裁ち方及び縫ひ方の順序・方法等を授け後實習せしむ。

備考

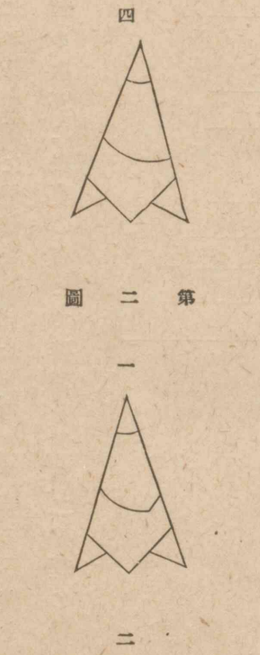
梅形涎掛型紙の裁ち方

正方形の紙を第一圖の如く三角に折り、更にこれを五つに折りて、その廻り及び中央を寸法通り裁ち切るなり。又櫻形になさんとせば、第二圖の如く緣の一方を少しく斜に切り、更に他方を二分程の深さに切り込むべし。

第一圖



第二圖

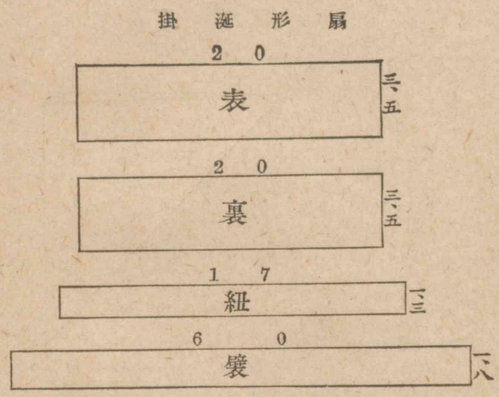


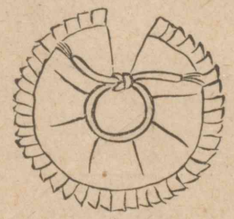
扇形涎掛

扇形涎掛には圖の如き幅二尺、長三寸五分の長方形の布二枚と、その三倍の

長さにて一寸八分幅の襞切と、梅形涎掛と同寸の紐布とを要す。

その仕立方は、最初襞切を取りて横の兩端を伏せ縫になし、次ぎにこれを二つに折りて、端に縫躾をかけおき、四五分幅の片襞を取りて、返し針にてこれを留め、次ぎに表裏の布にて襞切を挾み、二分程の縫代にて返し針に縫ひ行き、横の兩端を縫ひて裏の方に折をつけ、引き返して能く表裏を整へ、縫目の上及び紐附のところに躾をかけ、後中央に割襞、兩側に片襞三つ程づつか、或は割襞のみ五つ程を取りて、八寸位の長さに縮めてこれを留め、それより紐をつくること前と同じくす。

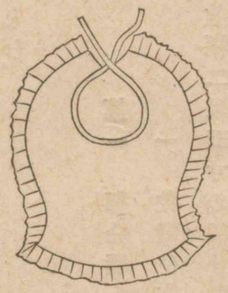


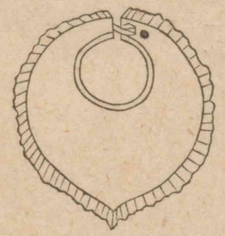


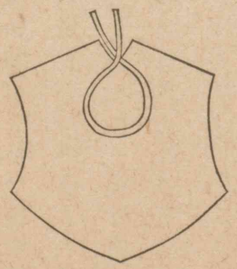
注意

布地の都合によりては、丈・幅共に今少しくつむるも可なるべく、又襞切の長さも、涎掛切の二倍餘となすも可なり。

又便宜左圖の如き形のものを手縫にして課するも可なり。







第五課　綿布繕ひ方練習

本課の教授は尋常小學校に於て授けたる普通綿布類の接ぎ方・繼ぎ方等を問答して既有の觀念を喚起しおき、次ぎに各自の用布につきて實習せしむ。

但し補綴すべき實物なき兒童には、運針用布を代用せしむるも可なり。

第六課　本裁單衣 男物

要旨

前に授けたる女物單衣と異なる箇所卽ち各部の寸法、袖の縫ひ方、腰揚の仕方、袖附け方等の部分に就き標附け方及び縫ひ方の順序・方法等を授けて、其の技能に習熟せしむ。

第一　部分縫

一　袖縫ひ方

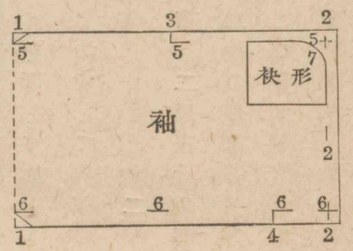
用布　並幅二尺五寸の部分縫用布一枚

1、標附け方　表を中にして二つに折り、左の順序によりて標附をなすべし。

一、山　二、袖丈　三、袖口明　四、人形(にんぎやう)　五、縫代　六、袖幅　七、袂丸(たもとまる)

右の標附をなすには、圖の如く縫目を左にして正しくおき、先づ山標1を附け、次ぎに袖丈2、袖口明3、人形4を標し、それより袖口の方を並縫代にはかりて

袖標附け方



5・5を附け、次ぎに袖幅をはかりて袖附の方に6・6を附け、後五分或は六分の袂形の兩邊を5と2との標のところに正しく當て、丸みの標をなすべし。

注意

右の部分縫に於ける各部の寸法は、袖丈一尺二寸、袖口明七寸、人形二寸、袖幅八寸八分、袂丸五分とす。

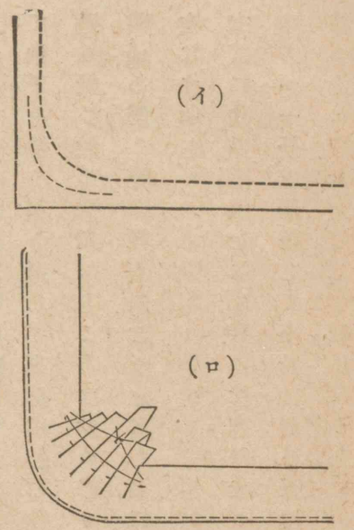
2、縫ひ方　表を出し、一分の縫代にて袂の方一寸程殘して袖下を縫ひ、引き返して裏を出し、右袖は袖下の方より、左袖は袖口の方より標通り縫ひ始め、袂丸のところは始め終りとも一針返し、且此の處は小針に縫ひて、稍、縮め置く程に輕く糸ごきをなし、袖口元は女物の通り、抄ひ留をなして返し針をなすべし。

次ぎに袖の括(くく)りをなす。其の仕方は先づ(イ)圖の如く、丸みの一分程手前より縫代の方へ一分五厘離して小針に縫ひ、五厘の著にて全體に折をつけ、丸みの始めと終りとに待針をなし、今縫ひたる糸を引きて弛みを縮め、襞を奇麗に整へ、前に縫

ひたる所より尙一分五厘程離して、針を其の襞に通してこれを纏め、次ぎに其の兩端及び末端に糸をかけて襞の動かぬやう留め置くこと（ロ）圖の如くし、後、袖口を三つ折縮になすべし。

注意

袖は成るべく左右を縫はしむるを可とすれども、若し時間少きときは左袖のみを縫はしめ、これは直ちに解かずして次ぎの袖附の時に用ひしむべし。



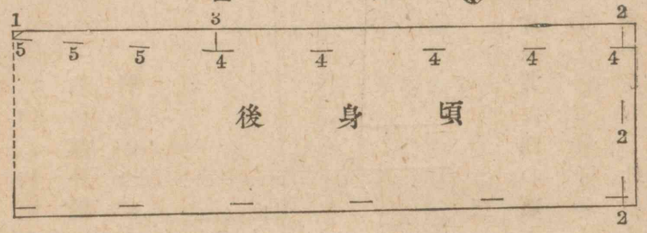
二　腰揚の仕方

用布　二尺三寸の部分縫用布二枚

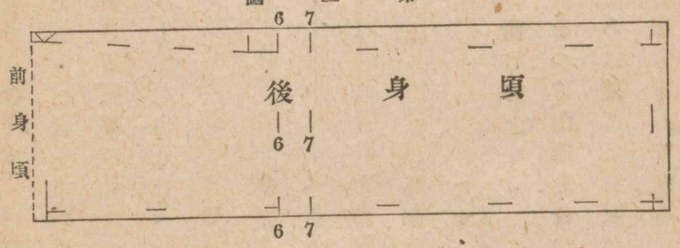
右二枚の用布の一方を二寸五分殘して衿肩明の分とし、其の他を二分五厘の縫代にて接ぎ合せ、片身頃と見做すべし。

1、標附け方　表を中にして衿肩明のところより二つに折り、後身頃を上に、折目

第一圖



第二圖



を左に、背を手前にして下に置き、左の順序によりて圖の如く標をつくべし。

一、山　二、身丈　三、袖附

四、後幅　五、肩幅　六、揚

揚の標をなすには第一圖の如く山・丈・附・後幅・肩幅の標をなしたる後、第二圖の如く衿肩を五分後身頃の方に越し、肩山より一尺一寸下りたるところに66・を標し、次ぎに揚の寸法をはかりて77・を標すべし。

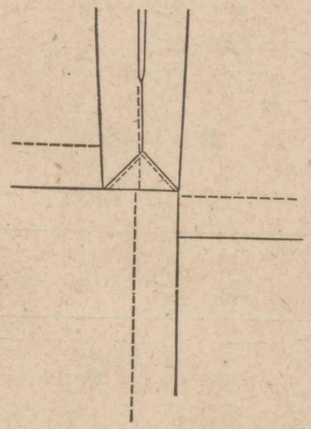
注意

一、揚の寸法を定むるには、裁ち切りの身丈より仕立上げの身丈と上下の縫代八分と縫ひ縮み

一分とを減じたるものとす。

但し袷綿入にありては上下の縫代を六分とす。

一、右の部分縫に於ける各部の寸法は、身丈二尺、袖附九寸九分、脇の縫込七分、肩幅いつぱいとしてなさしむべし。



2、縫ひ方　後身頃の揚を幅標の一分先まで縫ひ、次ぎに前身頃の揚を縫ひ、何れも裾の方へ折り返し、それより脇縫をなし、後幅の縫込を袖附の下より揚のところまで開きて、終りは圖の如く三角になし、角を上にして割鞋となすべし。

三　袖附け方

袖・身頃共に標の通り折をつけ、山標を合せて待針をなし、袖の方を稍、弛めにして脇明と合せ、袖下のところは袖にて身頃を包み、最初に袖の方より針を通して四つ留めをなし、此の糸を切らずして直ちに身頃の縫込を斜に折りて袖をつけ、縫ひ終りは返し留をなして、袖の方に折をつけ、脇の縫込を耳紵にすべし。

教授方法の大意

準備

男物單衣の袖及び揚の標附け方圖解

袖・揚・袖附の部分縫標本

方法

袖の部分縫につきては、先づ前に授けたる袂角の標附け方及び縫ひ方順序等を問答し、次ぎに男物の袖は何れも袂を丸くするものなること、及び人形のあること等を教へ、且其の標附け方、縫ひ方等を圖によりて説明し、標本を各兒童に配付して觀察せしめ、之に倣ひて仕立てしむ。但し袂丸の仕方は、衣服仕立方中の稍、むつかしき部分なるを以て、これを授くるには十分詳細に説明し、確實なる知識を與へて後實習せしむべし。

揚の仕方を授くるには、先づ男物は女物と異なりて、身の丈を著丈に仕立つべきものなるを以て、裁ち切りの長きものは帶の下になるところに揚をなすべきこ

とを敎へ、次ぎに其の標附け方及び縫ひ方を圖によりて委しく說明し、尙標本を示して能く了得せしめ、後實習せしむ。

袖附け方に於ては、男物は女物と異なりて、袖附け長きが故に能く注意して附くべきことを說き、且袖下の四つ留の方法を詳細に說明し、後標本を配付して十分觀察せしめ、これに倣ひて附けしむべし。

以上實習し終らば、何れも其の順序及び方法を復演せしめて、記憶を確かならしむべし。

第二　裁ち方

一　裁ち切り寸法

用布　並幅二丈八尺棒衽

一、袖丈	一尺四寸五分	一、身丈	三尺八寸五分
一、衽下り	四寸五分	一、衿肩明	二寸五分
一、衽幅	四寸八分	一、衿丈	四尺六寸

二　積り方

積り方算法は女物單衣に同じ。

三　裁ち方實習

裁ち方は其の順序・方法等前に述べたる女物に同じきを以て略す。

敎授方法の大意

先づ女物單衣の裁ち方、積り方を復演せしめ、次ぎに男物單衣につきての裁ち切り寸法を授けて、女物と異なる點を問答し、後これを筆記せしめ、更に右の裁ち切り寸法によりて積り方を練習せしむ。

第三　仕立方

一　仕立上げ寸法

一、袖丈	一尺四寸	一、袖口明	七寸五分
一、袖附	一尺二寸	一、人形	二寸
一、袖幅	八寸八分	一、身丈	三尺六寸五分

一、衿肩明　二寸三分　一、後幅　八寸
一、肩幅　八寸七分　一、揚　後、肩より一尺三寸　前、一尺四寸
一、衽下り　五寸五分　一、前幅　七寸
一、抱幅　六寸三分　一、衿下　一尺七寸五分
一、衽幅　四寸　一、合褄幅　三寸六分
一、衿幅　一寸六分　一、裄　一尺七寸五分

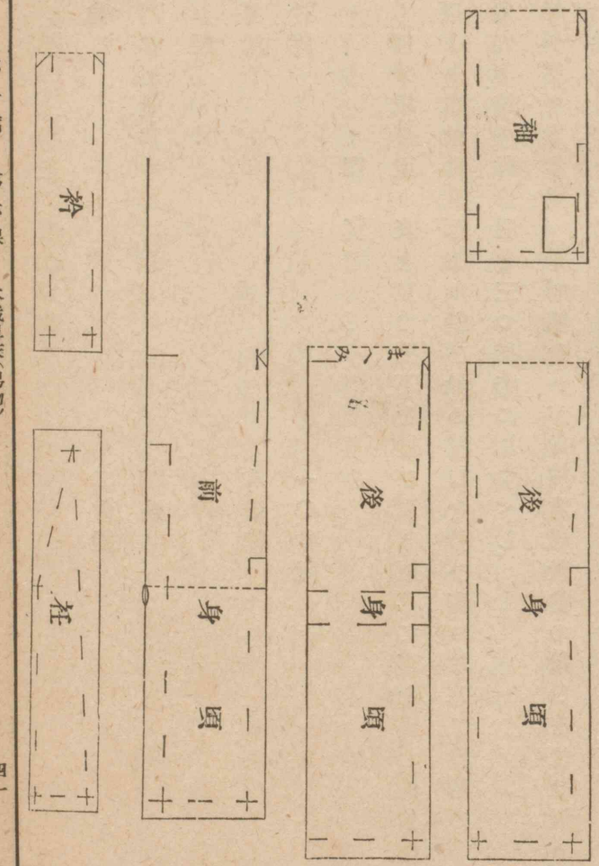
注意

揚の寸法は著用者の身長により斟酌を要するものにて、丈高き人は、後前とも前記寸法より今少しく多くするを可とす。

二　標附け方

前の仕立上げ寸法により女物單衣並びに男物單衣部分縫にて學びたる順序によりて標をつく。但し前身頃衽附の標をなすには、先づ揚の標を合せて待針をなし置き、後寸法通り標をつくべし。

又衿の標は表裏共に表を中にして二つに折り、折目を左に、裁目を向ふにして四枚重ね、先づ裁目の方に縫代の標を附け、次ぎに幅をはかりて耳の方に衿幅の標をなすべし。



圖合標方け附標（物男）衣單裁本

三　縫ひ方順序

一、袖　二、背縫
三、肩當・居敷當　四、揚
五、脇縫　六、衿下
七、衽附　八、裾紮
九、衿附　一〇、袖附

四　實習

1、袖　部分縫の通り表を見て袖下を縫ひ、引き返して裏を出し、內袖を見て左袖は袖口より、右袖は人形より縫ひ始め、袖口を抄ひ留になして、內袖の方に折をつけ、袂の丸を拵へ、袖口明を三つ折紮になすべし。

2、背縫・肩當・居敷當・揚　衿肩明をかがり肩當・居敷當の裁目を伏せ置き、女物の通り背を縫ひ、肩當をつけ、後前の揚をなし、次ぎに居敷當をつくべし。

3、脇縫　兩脇を縫ひ、上を抄ひ留に、下を返し留にして、前身頃の方に折をつけ、部分縫の時の如く後身頃の縫込を開き下を三角に折りて割躾をなし、縫込を一寸二三分の針目にて表に綴ぢつくべし。

4、衽及び裾紮　先づ衿下を紮け、前身頃に合せて標の通り稍〻弛めに衽をつけ、折は衽の方に返して左右とも縫込を綴ぢつけ、後、裾紮をなす。

5、衿　衿の表裏にて身頃を挾み、三枚共に縫ひ附け、始め及び終りを抄ひ留になし、衿先を縫ひ、裏の方に返して綴ぢつけ、幅の折をつけ、兩端の折込は三角に裏の方に折りて針目の表に出でぬやうに二三針綴ぢつけ、次ぎに、衿幅を二つに折りて山・衿肩明及び他の處處にも待針をなし、衿の捩れぬやう能く釣合を見て紮けつくべし。但し衿先のところは衿附の留より丈・幅共に二分程離れたるところに表裏とも小さく針目を出して、能く留め置くべし。

6、袖附　袖・身頃共に標の通り折を附け、部分縫の時の如く山標を合せて待針をなし、能く釣合を見て袖下に四つ留をなし、此の糸にて直ちに袖をつけ、終りは返し留をなして糸を切り、袖の方に折り返して後脇の縫込を耳紮にすべし。

注意

衿附の際劍先のところは、一針拔きにつけしむべし。

教授方法の大要

準備

男物單衣の名稱圖及び標附け方圖

各部要所の標本

方法

仕立上げ寸法を授くるには實物或は掛圖を示してこれと對照しつつ說明し、標附け方、縫ひ方順序等は部分縫に於て授けたる事項を除くの外大方女物と等しきを以て問答的にこれを說明し、十分了解せしめたる後實物につきて仕立てしむ。而して何れも其の要點を筆記せしむること前課に同じ。

筆記の事項

仕立上げ寸法

縫ひ方順序

第七課　袴の種類及び各部の名稱

要旨

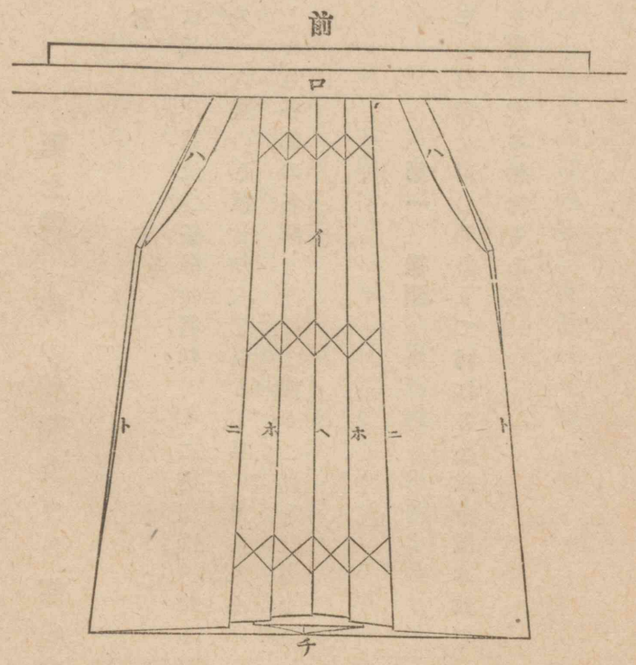
袴は其の形狀及び各部の名稱ともに是迄授けたる衣服と異なること多きを以て、先づ大體の形狀を知らしむると共に、男女大小によりて別あることをも了解せしめ、且各部の名稱を授けて能くこれを記憶せしむ。

第一　種類

袴には男袴・女袴の別ありて何れも、小裁・中裁・本裁の三種あり。通常は單なれども裏を附けたる袷袴もあり。

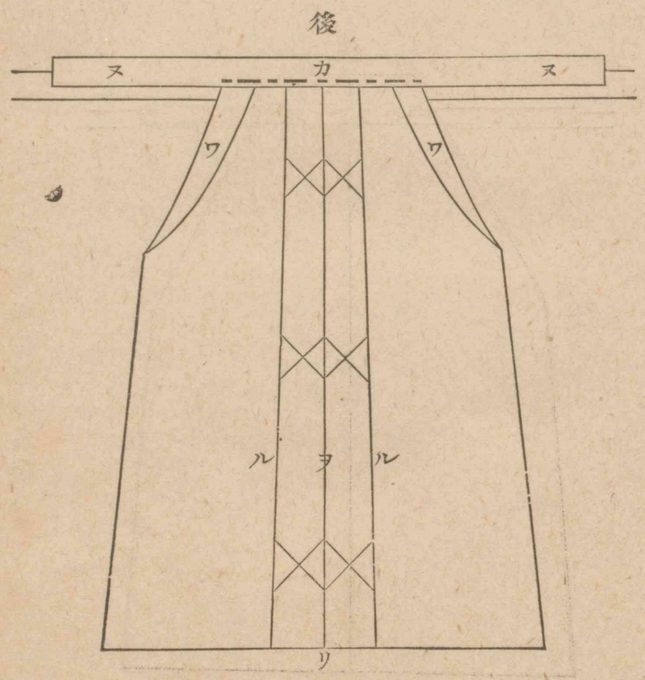
第二　各部の名稱

一　女袴各部の名稱



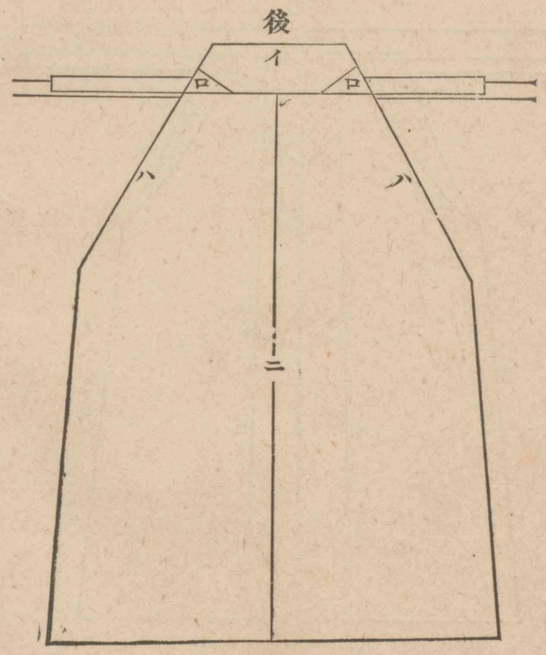
イ　紐
ロ　前
ハ　前
ニ　一の
ホ　二の
ヘ　三の
ト　相笹
チ　切

下紐
上紐
引
上
上
上
上



リ　蹴
ヌ　後紐
ル　後一の
ヲ　後二の
ワ　後
カ　飾糸

二　男袴各部の名稱



イ　腰
ロ　附菱
ハ　投
ニ　後　襞

右の外後前の中央に襠の部分あり。その他の名稱は總べて女袴に同じ。

教授方法の大意

準備

男女袴の名稱圖及び其の標本

方法

袴所用の目的及び男女袴の種類並びに各部の名稱につき兒童既知の觀念を喚起し、次ぎに掛圖若しくは標本を示して男女大小の別、及び各部分の名稱を正確に記憶せしめ、後これを筆記せしむ。

筆記の事項

袴の種類

女袴各部の名稱

男袴各部の名稱

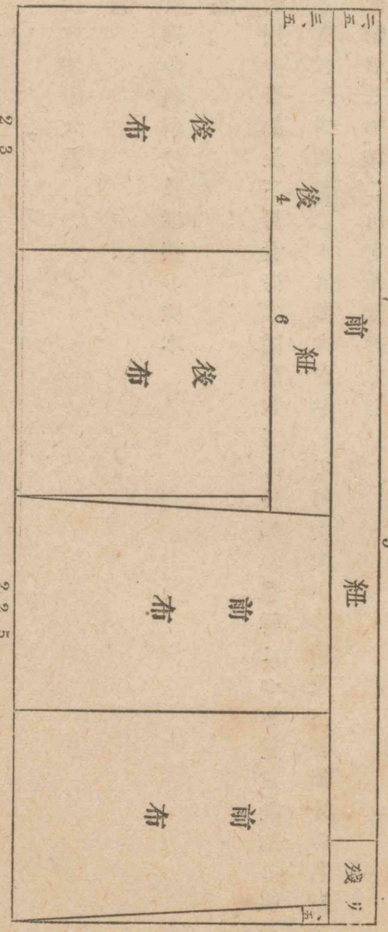
第八課　中裁女袴

要旨

中裁女袴の裁ち方及び縫ひ方の順序方法を授けて能くこれを了解せしめ、且其の實地裁ち方につきて應用自在ならしむると共に縫ひ方にも練熟せしむ。

第一　裁ち方

一　裁ち切り寸法



用布　幅二尺、長さ九尺一寸

一、後丈　二尺三寸　　一、前丈　二尺二寸五分（内切上げ五分）

一、後紐丈　四尺六寸　　一、同幅　三寸五分

一、前紐丈　七尺五寸　　一、同幅　二寸五分

二　積り方

23×4−0.5×2=91……總丈

(91+0.5×2)÷4=23……後丈

23−0.5=22.5……前丈

之を公式にて示せば左の如し。

後丈×4−後前の差×2=總丈

(總丈+後前の差×2)÷4=後丈

後丈−後前の差=前丈

注意

用布が兩面物にして丈不足なるときは前幅を裁違となすも可なり。

三　裁ち方實習

先づ用布の總丈をはかり、寸法書によりて積り方の計算をなし、次ぎに其の寸法通り後布二枚、前布二枚を折りて、算法の誤りなきや否やを確め、後、圖の如く前紐を裁ち切り、チョークにて前布に切上げの標をつけてこれを裁ち落し、次ぎに後幅より後紐を取り、それより後布・前布共に眞中より横に二つに切りて各二枚となし、なほ後布の斜なるところを眞直に裁ち切るべし。

教授方法の大意

準備

中裁女袴裁ち方の圖

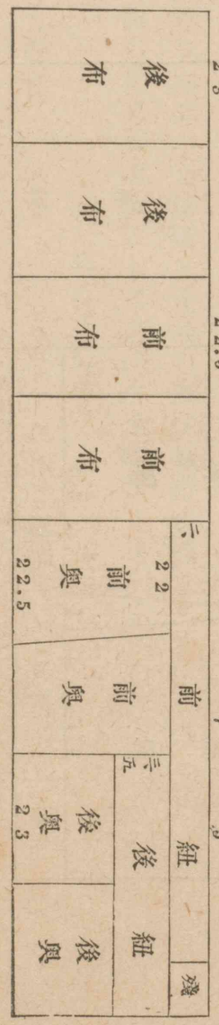
方法

前に教授せし女袴につき、各部の名稱を問答して豫備となし、次ぎに圖を示して各部分の關係及び裁ち切り寸法、積り方の算法等を説明し、十分了解せしめたる後これを筆記せしめ、それより實物或は紙等にて實地に裁たしむ。若し時間に餘裕あらば並幅物及び大幅物等に於ける各種の裁ち方應用問題を與へて考案工夫せしむべし。

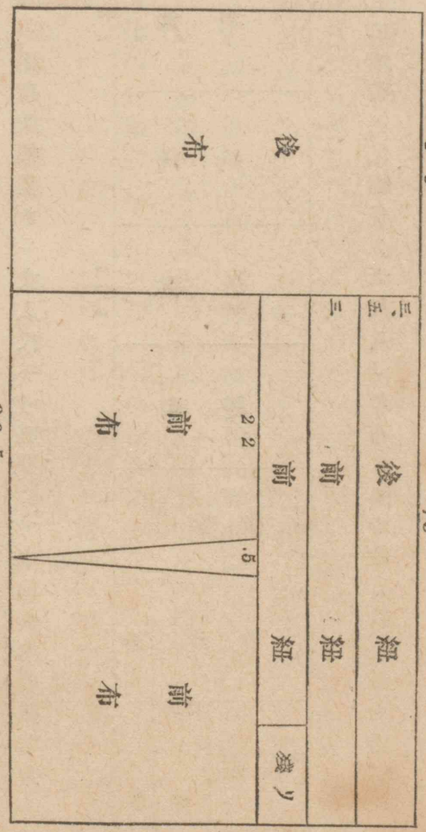
備考

袴に用ふる地質は、多くはモスリン・カシミヤ・セル等の毛織物なれども、また木綿・紬・琥珀等の類を用ふることあり。されば、その地質により並幅・二尺幅・三尺幅等の數種あるを以て、左にその各の裁ち方に於ける一例を擧ぐ。

一、用布並幅長さ一丈八尺一寸五分にて中裁女袴の裁ち方



二、用布三尺幅長さ六尺八寸の布にて中裁女袴の裁ち方



第二　仕立方

一　仕立上げ寸法

一、紐下　二尺　　一、相引　一尺四寸五分

一、後幅　上七寸二分　下一尺四寸　　一、後の重　九分

一、後寄襞　上九分　下一寸八分　　一、後笹襞　一寸三分

一、前幅　上七寸六分　下一尺三寸八分　　一、懷の重　八分

一、前寄襞　上八分　下一寸三分　　一、前笹襞　一寸

二　標附け方

一、後布　二、前布

後前共に布の表を中にして各二枚づつ合せ、裾を右に、相引の方を手前にして下に置き、前記の寸法通り丈・相引及び裾紵の標をつく。

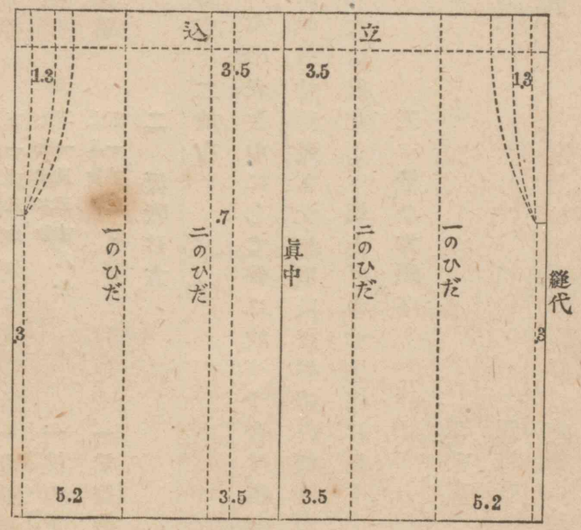
但し後丈は前丈より切上げの寸法だけ長くすべし。

三　縫ひ方順序

一、後布　二、前布
三、相引　四、裾紵
五、閂留　六、後前襞標附
七、後襞取　八、前襞取

襞取りの圖

後

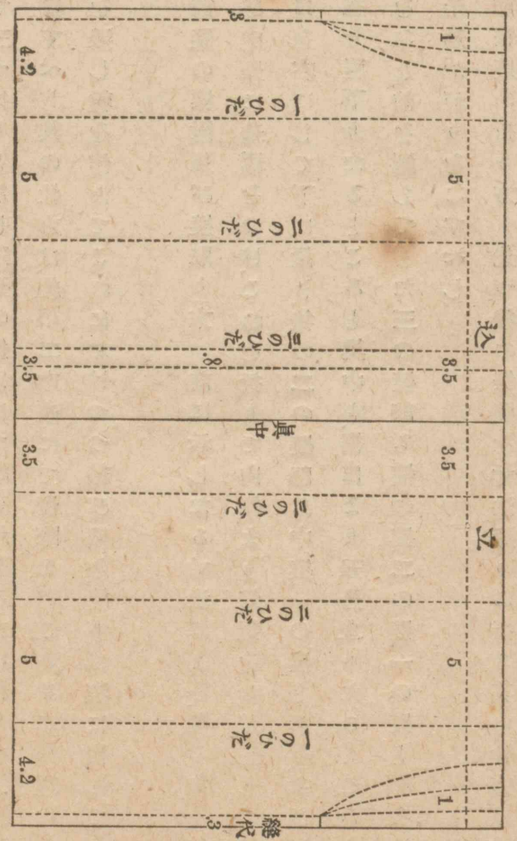


九、後笹襞
一〇、前笹襞
一一、紐絎
一二、後紐附
一三、前紐附

四　襞取り方

襞の取り方は、縫ひ方順序にて述べたるが如く、相引を縫ひ合せ輪になしたる後、これを取るものなれども、かくては圖解に不便なるを以てここには後前を別ちて記載せり。

前



五　實習

1、後前布の合せ方及び相引　後前の布を各二枚づつ合せて折伏せ縫をなし、折

は何れも右脚の方に返し、次ぎに左右の相引を縫ひ、前布の方に折り返すべし。

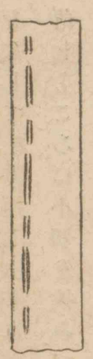
2、裾紵及び閂留　裾口を六分の紵代として全體に折をつけ、更にこれを二つに折りて三つ折りとなし、三分の針目にて紵け行き、次ぎに相引の上に左右とも閂留をなすべし。其の仕方は、絹の二本糸にて留際のところを二分程の針目にて二度糸を通し輪を作りてこれにかけつつ結びゆき、終りは裏に出して打ち留となす。

3、後前襞の標附及び襞取り方　前に示したる寸法により、圖の如く後前共に上下及び中央に糸標をつけ、これを折りて内側より烙鏝をかけ、正しく襞の折をつけ、裾口を右にして下に置き、後の二の襞卽ち中襞、一の襞と折り、次ぎに紐附の標より五分程下りたるところと眞中と、裾口より五分上りたるところとに千鳥かがりをなし、前を返してまた三の襞卽ち懷の襞、二の襞、一の襞と順次に折り後の如く千鳥かがりをなすべし。

4、後前笹襞の折り方　先づ後の笹襞を寸法通りに折る。其の仕方は丈標の處にて後一の襞より計り、後腰幅の半分より一分狹くして標を附け、其の標より笹襞の裏となるべき部分を笹襞幅より一分狹く標し、それより笹襞幅をはかりて殘りの分を裏へ折り返し、よく形を整へて正しく折をつけ、中を開きて折目より五厘程内を七分程の針目にてあらく縫ひ、下方を稍小針にして末端を三分位縫ひ殘し、其の上部を表裏合せて四五分の針目にて紵け、それより前の笹襞を笹の葉形に折りて後の如くなし、總體に烙鏝又は火熨斗をかけて能く折をつけ襞を整へ壓をおくべし。

壓を置くには前を上にして裁板の上にのべ、襞の重り少くして低きところには新聞紙若しくは小切を挾みて平らになし、その上よりなすべし。但し壓板小きときは三つに折りてなすも可なり。

5、紐の紵け方及び附け方　後前の紐に心を入れ、眞中一尺程を殘してこれを紵け、後紐のあけあるところに半紙五枚程合せたる厚紙を二重に折りて入れ、太白の捻糸二本にて雌針四つ、雄針三つを圖の如く厚紙を通して表に貫き、飾糸をかけ置き、これを後布に合せて待針をなし、一分の著を見込みて返し針にてつけ、裏にて紵け、兩端に能く留



をなして紮け返し、次ぎに前紐に美濃紙三四枚程を折りて入れ、後紐の如くつけ、薄きところに小切を挾みて平らになし、後小針に紮け置くべし。

附　疊み方

全體仕立上らば、前を上にして裾口と相引との眞中より五分程上のところに二尺指を置きて裾を上方に折り返し、折り返したる裾の端より五分程離れたる所を折目にして上部をその上に折り重ね、三つに疊み、後紐を交叉してその上に載せ、次ぎに前紐を疊みて後腰の上に置き、何れも二本糸にてその眞中を綴ぢ置くべし。

注意

一、襞の折目附き難きものは、あらく躾をかけおくべし。

一、後紐に入るべき厚紙は紐布の破損せぬやう先づ下部となすべき一方を三分程折り返し、次ぎに他の一方をその折代だけ減きて紐幅だけに折り返し、上部の兩角を二三分程丸く裁ち落し置くを可とす。

一、紐をつくるには、後の方は兩端の笹襞を稍〻張りめに、前はその反對に紐の方を少しく上げめにしてつくべし。

教授方法の大意

準備

女袴の名稱圖　中裁女袴襞取りの圖　仕立上げの標本

方法

女袴の裁ち方及び各部の名稱を復演せしめ、次ぎに實物又は圖を示して仕立上げ寸法、標附け方、縫ひ方順序、襞取り方等を授け、能く了解せしめ、なほこれを筆記せしめたる後實習せしむべし。

仕立終らば既授の事項につきその要點を問答して、記憶を確かならしむ。

筆記の事項

仕立上げ寸法

標附け方

縫ひ方順序
襞取り方

備考

中裁女袴の寸法は前に示したる如くなれども、用布の丈・幅等に長短・廣狹あり、又これを著用する人にも大小の相違あるを以て、左に一般に關する寸法割出し方の大要を示さん。

1、丈卽ち紐下　衣服の著丈の六割乃至六割半とす
2、相引　紐下の三分の二に一寸を加ふ。
3、後幅　略、著物の後幅に同じ。
4、脇襞幅　後は後幅の四分の三、前は同五分の三とす。
5、上の寄せ襞　後は後幅の八分の一、前はこれより一分を減ず。
6、下の寄せ襞　後は後幅の四分の一、前は五分の一より一分を減ず。
7、笹襞　後は後の脇襞幅の四分の一、前は前の脇襞幅の四分の一とす。

第九課　女腹合帶仕立方

要旨

腹合帶仕立方の順序を說きて、その要所を了得せしめ、且これを實習せしめてその技能に習熟せしむ。

一　仕立方順序

一、布の整理　二、縫の假綴
三、標附　四、縫ひ方
五、心拵　六、心附
七、眞中(まんなか)の紵け方　八、仕上げ及び飾糸

二　實習

1、布の整理　子供帶の時の如く兩側共に布の伸縮を直し、耳のところを稍多く伸ばしおくべし。
2、假綴及び標附　表を中にして正しく兩側を合せ、地質同じからざるものは軟

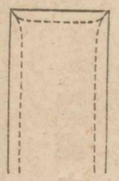
き方を少しく張りめにして、先づ眞中に假綴をなし、次ぎに兩側に待針を打ちて布目の歪まぬやうになしおき、また假綴をなして並縫代に幅標をつけ、後織出の關係を見計らひて丈標をなすべし。但し織出なきものは子供帶の時と同じく五分の縫代となすべし。

注意

帶の幅は、八寸二三分より八寸五分位までを普通となすを以て、餘り幅廣きものはこれを縫ひ込みおくべし。

3、縫ひ方　標の通り先づ縫を一針拔き、或は半返にして一方の中央帶幅だけを殘してこれを縫ひ、次ぎに兩端を返し縫になし、兩端及び兩側の折は地質剛きものの方に返し、著の深さは兩側を二三厘、兩端を五厘程となして、烙鏝をかけ、兩端の縫込を兩側の縫代に幅を稍〻張りめにして縫ひつけ、後四隅を綴ぢおくべし。

注意



縱横共に兩端の角は、圖の如く少しく縫代を淺くして縫ひ行くべし。

4、心拵　心布は表の丈より三寸程長く裁ちおきて、先づ布の一方の耳を平らに裁ち落し、次ぎに仕立上げの帶幅より五厘狹くはかりて標をつけ、殘りを裁ち切るべし。

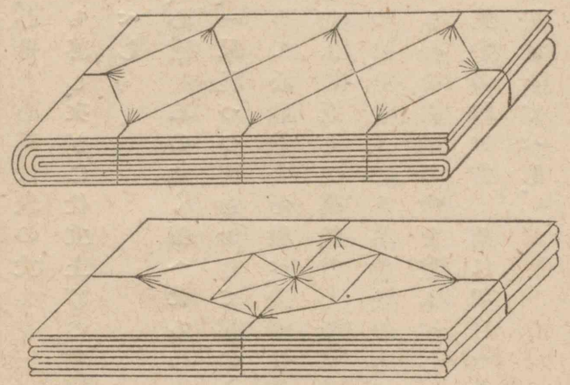
5、心附　右の如く拵へたる心を稍〻弛めにして、折を返したる方の帶側の上に載せ、一尺程づつ間をおきて幅の中央に縱に待針を打ち、子供帶の時の如く兩方に開きて心の釣合を檢べ、先づ片側處處に待針をなしてこれを綴ぢつけ、次ぎに心を向ふに返して眞綿若しくは綿をひき、亦元の如く帶側の上に載せて一方を綴ぢつけ、その上にも眞綿をひきて四隅に引糸をつけ、眞中より返してよく丈、幅を引き合せ、兩端の角を整ふべし。

6、眞中の絎け方　前に明けおきたるところを一方に心を包みて躾をなし、小針に絎けあぐべし。

7、仕上げ及び飾糸　一分の深さにて一寸程の針目に廻りに平躾をなし、兩端は躾をかけ戻して表裏針のなきやうにし、四隅のところは縱横共に上にかけてよく整へ、終りの糸は縫目の中にて打ち留をなすべし。

それより火熨斗又は烙鏝をかけて仕上げをなし、七つ若しくは八つに疊みて、四方を綴ぢ、壓を置き、後、圖の如く飾糸をかくべし。

帶飾糸掛け方



注意

一、飾糸のかけ方は種種工夫して成るべく面白き意匠のものを用ひしむべし。

一、飾糸の色は普通紅白を用ふれども時には帶側に配合よき色を選びて用ひしむるも可なり。

教授方法の大意

準備

腹合帶仕立上げの標本並びに飾糸掛け方の標本或は其の擴大圖

方法

女帶の長さ及び幅、地質等につき兒童の知れるところを問答し、次ぎに布の取扱ひ方及び縫ひ方の順序、方法、心の拵へ方、仕上げ方等につき子供帶にて授けたる事項を復演せしめ、次ぎに是等の事項につき大人物の子供物に異なるところを委しく説明し、なほ仕立上げの標本、及び飾糸掛け方の標本若しくは圖解を示してよく了解せしめ、後實地に仕立方をなさしむ。

筆記の事項

仕立方順序

飾糸掛け方の圖

第十課　四つ身袷

要旨

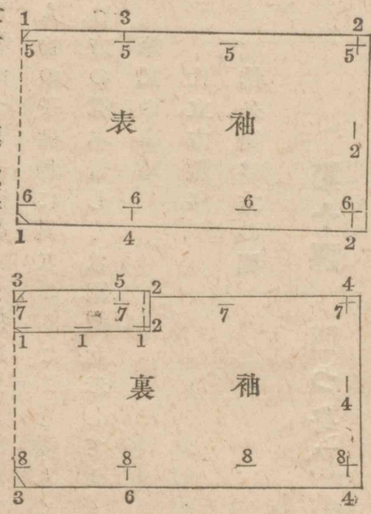
四つ身袷裏の裁ち方、積り方を授けて胴裏並びに裾廻の關係を知らしめ、且袂袖及び筒袖の部分縫に習熟せしめて、本課の仕立方につきて技能を得しむ。

第一　部分縫

一　袂袖縫ひ方

用布　並幅二尺五寸　二枚
　　四つ割幅一尺八寸　一枚

1、標附け方　先づ表袖を出して四つ身單衣の通りに標し、次ぎに裏袖を取りて表を中に二つに折り、袖口切もまた二つに折りて、圖の如く一分出して重ね、左の順序により標附をなす。但し裏袖口明の寸法は表より五厘をつめ、八つ口は一分をつむべし。



一、袖口切の縦　二、袖口切の横　三、山
四、袖丈　五、袖口明　六、袖附　七、縫代
八、袖幅

表袖は右の順序の如く單衣の時と同じ仕方にて標し、裏袖は先づ袖口掛の標を縦に11、横に22を附け、それより山標33、丈標44をつけ、次ぎに袖口明5、袖附6を標し、後袖口の方を並縫代にはかりて77…を附け、それより幅をはかりて88…を標すべし。但し7の標は山のところに篦跡の殘らざるやう注意すべし。以下これに準ず。

注意

一、右の部分縫に於ける各部の寸法は

袖丈	いつぱい	袖口明	四寸五分
袖附	四寸五分	袖幅	七寸

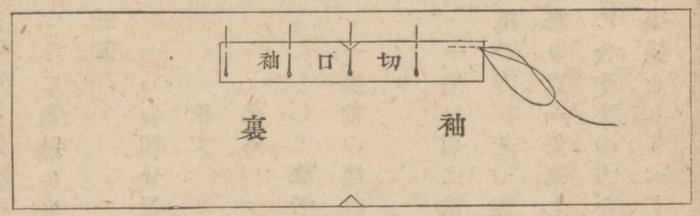
として練習せしむべし。

一、裏袖の標は、尋常小學校の時の如く袖口をかけたる後なさしむるも可なり。

一、袖口切は裁目を口明の方に向けて標すべし。

2、縫ひ方　先づ裏袖を取りて圖の如く袖口をかけ、始めは留結をなして一針返し、終りは一針返して打ち留をなし、袖口の方に折を返し、袖口切の端を折りて袖裏に合せ、裏の方を稍、弛めになすやう袂の方へ少しく開きて斜に紩けつけ、廻りに平縫をなすべし。

袖口掛け方



次ぎに表裏の袖口を合せて縫ひ、並より深めに著をかけて躾をなし、左袖は表を、右袖は裏を見て、袖口を四つ留とし、その糸にて袖口下より袂の丈標の一針先まで縫ひ、このところにて一針戻して丈標の通りに袖下の幅標の二三寸手前まで四つ縫となし、また一針返してこれより先は表のみ縫ひ、裏は別に共色の糸にて標より一分程つめて斜に縫ひ行くべし。

次ぎに表裏の八つ口を合せ、裏を張りめにして待針をなし、内袖外袖共に袖下の縫目より縫ひ始め、袖附の標まで縫ひて返し留をなし、五厘の著にて表の方に折をつけ、後引き返して表を出し、裏幅を稍ひきめにして平躾をなすべし。

注意

一、袖口下の四つ縫は二三寸の間一針抜き又は返し針をなさしむべし。

一、八つ口のところは、裏の方を幅標より五厘程ひきて表と合すべし。

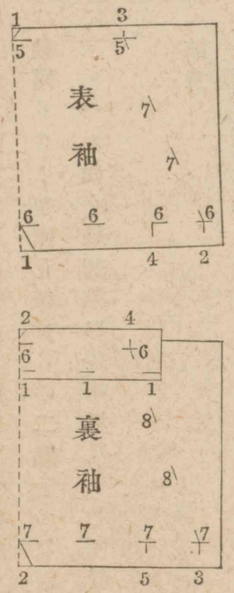
一、袖口の掛け方は、廻しがけを可とすれども小學校に於ては兒童の學び易からんやう兩端を紵けしむるを可とす。

二　筒袖縫ひ方

用布　一つ身單衣筒袖の部分縫に用ひたる半幅一尺の用布と、これと同寸の裏用布と、外に袖口切として四つ割幅八寸とを持參せしむ。

1、標附け方　先づ表袖を取りて、袂袖の時の如く二つに折りて下に置き、左の順序によりて標をつけ、それより裏袖及び袖口切に標をつくべし。但し裏の袖口明は表より一分五厘をつめ、丈は同じく五厘をつむべし。

筒袖標附け方



一、山　二、袖丈　三、袖口明　四、袖附　五、袖口縫代　六、袖幅　七、袖下

表袖は右の順序によりて先づ山

標11を附け、次ぎに袖丈2、袖口明3、袖附4を附け、それより袖口の縫代55、及び袖幅66：を標し、後23の二點をつなぎて丈標77を附くべし。又裏袖は圖に示したる如く、最初袖口掛の標11を附け、それより表と同じ順序にて標すべし。

注意

右の部分縫に於ける各部の寸法は

袖丈　いつばい　　袖口明　三寸

袖附　四寸　　袖幅　いつばい

とす

2、縫ひ方　袂袖の時の如く、裏袖に袖口をかけて折をつけ、横は折らずして廻りに平躾をなし、山標の左右五分ばかりのところは表を他より多く弛めにしてこれを縫ひ、始めは留め結をなして一針返し、終りは一針返して打ち留をなし、並の著より深めにして折をつけ、躾をかけ、次ぎに袖下を表裏四枚合せ、袖口のところは折を表の方に返し、内袖の裏切にて包み四つ留をなし、この糸にて袖下を一針

抜きに四つ縫とし、幅標の一二寸手前より標の一針先まで別別に縫ひ、表を出して平躾をかけ、次ぎに袖下の縫込をあらく裏に綴ぢつくべし。

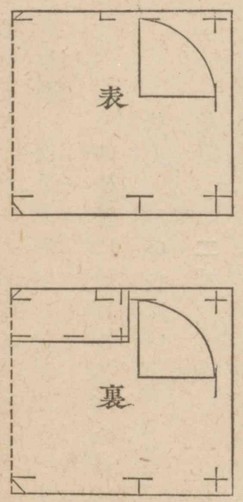
注意

地質厚きものは、袖口のところに四つ留をなし、下を表裏別別に縫ひてこれを綴ぢおくべし。

三　元祿袖縫ひ方

用布　筒袖の時に用ひたる表裏布及び袖口切を用ひしむ。

1、標附け方　先づ表袖を取り二つに折りて下に置き袂袖の時と同じ順序によりて山・丈・口明・附・縫代・幅の標をつけ、次ぎに圖の如く袂形の兩邊を丈標と縫代の標とに合せて置き、形の通りに袂丸の標をつくべし。



元祿袖標附け方

それより裏袖及び袖口切を取りて袖口掛の標をなし、後、表に準じて各部分に標をつ

くべし。

注意

右の部分縫に於ける各部の寸法は

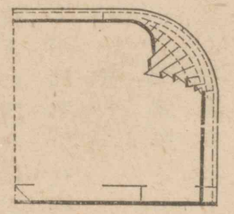
袖丈　いつぱい　　袖口明　二寸

袖附　二寸　　袖幅　いつぱい

袂丸　二寸五分

とす

2、縫ひ方　袂袖の時の如く裏袖に袖口をかけ、兩端を折りて紵け、廻りに平躾をなすべし。次ぎに表裏の袖口を合せて縫ひ、稍、深めに著をかけて平躾をかけ、袖口元の處に四つ留をなし、其の糸にて袖口下より袖下の一二寸手前まで四つ縫とし、それより先は袂袖の時の如く表裏別別に縫ひ、袂丸の處は丸みの始め終りともに一針返して針目を稍、細かに、糸を少しく張りめになしおき、更に此の縫目より三四分程はなして丸みの間を上圖の如く二度程縫ひ、並の著にて內袖の方に折り返し、今縫ひたる糸を引きて程よく縮め、末端は襞を取りて返し針にて留め置くべし。



教授方法の大意

準備

袷袂袖並びに筒袖元祿袖部分縫標附け方の圖及び標本

方法

四つ身單衣及び一つ身袷袖の標附け方、縫ひ方を問答して豫備とし、次ぎに本教材たる袷袖につき袖口の掛け方、裏袖口及び八つ口のつめ方、四つ留の仕方等を掛圖及び標本によりて十分說明し、後用布につきて練習せしむ。

第二　裁ち方 胴裏並びに裾廻

一　裁ち切り寸法

表用布　總丈各部の寸法等はすべて單衣に同じ。

裏用布　胴裏一丈四尺　裾廻四尺五寸六分

四つ身袷裏地裁ち方

一、裏袖丈　一尺五寸
一、胴裏丈　二尺
一、後幅　七寸二分
一、裾廻丈　一尺一寸四分
一、衽幅　三寸八分
一、衿肩明　二寸
但し筒袖丈は七寸とす

二　積り方

180－140＋0.2×8＋1×4＝45.6…裾廻總丈
45.6÷4＝11.4……裾廻丈
180－45.6＋0.2×8＋1×4＝140…胴裏總丈
30－11.4＋0.2×2＋1＝20……胴裏丈

右の算法を公式にて示せば左のごとし。

表總丈－胴裏總丈＋袵×8＋縫代×4＝裾廻總丈
裾廻總丈÷4＝裾廻丈
表總丈－裾廻總丈＋袵×8＋縫代×4＝胴裏總丈
表丈－裾廻丈＋袵×2＋縫代＝胴裏丈

注意

一、胴接ぎの縫代を五分づつと見積りたるは、いつぱいに裁つ時の場合を示したるもの故、若し裾の破れたるを切り拂ひ、或はこれを上下にせんには最初胴裏に一二寸の縫込をなしおくを可とす。

一、四つ身の裾廻は場合によりては後裾を低く、前裾を高くつくることあれども、四裾の揃はざるは見苦しきものなれば、已むを得ざる時の外はなさざるを可とす。

一、通裏となすときは、表身丈より袵の二倍だけ長く裁たしむべし。又一二寸長く裁ちて内揚をなしおくも可なり。

應用問題

一、表地一丈七尺六寸、胴裏地一丈三尺二寸の用布にて四つ身袷を裁たんとす、踞廻總丈何程を要するか。

但し衽及び縫代は普通とす。

答　四尺九寸六分

二、表用布一丈八尺五寸、裾廻の總丈六尺の布を用ひて四つ身袷を仕立てんとするに、衽二分、縫込一寸五分トせば、胴裏總丈何程を要するか。

答　一丈三尺二寸六分

三、袖丈六寸、身丈二尺八寸、仕立上げの四つ身筒袖に通裏を附くるとせば、裏地の總丈幾何を要すべきか。

但し衽一分五厘、内揚の縫込一寸として計算すべし。

答　一丈四尺六寸

三　裁ち方實習

胴裏並びに裾廻布の總丈をはかり、染斑・織斑等を檢べ、表を中にして卷き置き、表布の寸法に準じ、前に示したる積り方の方法によりて計算をなし、先づ胴裏を取りて、袖丈四枚、胴丈四枚を折り重ね、それより左右の裏袖を裁ち切り、次ぎに裏身頃を取りて衿肩明及び裏衿を裁ち、後、下の輪のところを切り放すべし。

右終りたらば、裾廻の布を取りて正しく四つに折り、これを裁ち切るべし。若し後布より袖口を取るときは、先づ表に準じて後幅を裁ち、その餘りを袖口とすべし。

教授方法の大意

準備

四つ身單衣裁ち方の圖並びに胴裏裾廻裁ち方の圖

方法

四つ身單衣の裁ち切り寸法、裁ち方等を復演せしめて豫備となし、次ぎに胴裏及び裾廻裁ち方の圖を示してその裁ち切り寸法並びに裁ち方の順序方法等を說明し、後四つ身單衣裁ち方の圖を示してその積り方を問答し、これと對照して胴裏並びに裾廻の積り方を授け、尙前に示せる應用問題を與へて、十分了得せしや否やを試み、それより左の事項を筆記せしめ、後實地に裁ち方をなさしむ。

筆記の事項

裁ち切り寸法
裁ち方の圖
積り方

第三　仕立方

一　仕立上げ寸法

一、袖丈　一尺四寸五分　一、袖口明　四寸五分
一、袖附　四寸五分　一、袖幅　七寸五分
一、身丈　いつぱい　一、身八つ口　二寸五分
一、衿肩明　一寸八分　一、肩幅　いつぱい
一、後幅　いつぱい　一、前幅　いつぱい
一、衽下り　三寸五分　一、衽幅　三寸二分
一、合褄幅　三寸一分　一、衿下　八九寸
一、衿幅　一寸二分　一、衽　二分

一、紐附　七寸肩より
附　筒袖寸法
一、袖丈　六寸五分　一、袖口明　三寸五分
一、袖附　五寸　一、衽　二分

注意

一、筒袖を附けつめとなしたるときは、左の袖下より一寸位下りたるところに、一寸五分程の紐通(ひもとほし)の穴をあけ置くべし。

一、すべて筒袖は濶袖より稍〻裄を長くせざるべからざるが故に、從つて袖幅を廣くすべし。又袖附も稍〻多く附くるを良しとす。

備考

四つ身は五六歳より十一二歳までの兒童の著用する衣服にして、この時期は兒童身體の發育最も著しきを以て、その年齢により各部の寸法にも多少の斟酌を加へざるべからず。前に示したる寸法は、八九歳の兒童の身長を標準としたるものなり。

又衿下の寸法の定め方は、普通の發育の兒童にありては、その年齢の數に一を加へたるものとす。例へば七歳の兒童ならばこれに一を加へて八寸と定むるが如し。

二　標附け方

標附をなすには、先づ布の表裏・皺・折目・伸縮等を直しおくべし。

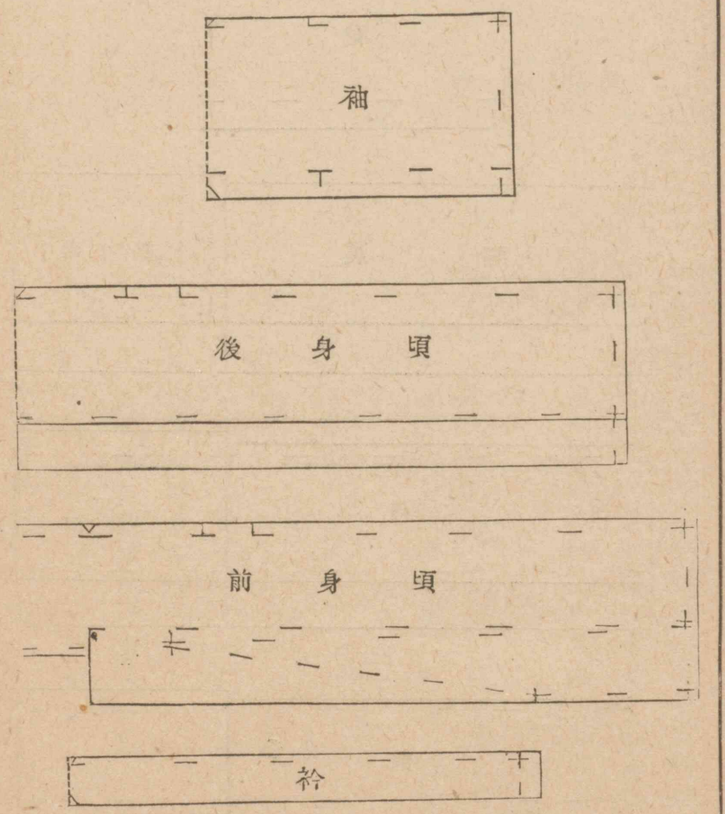
一、表袖　二、裏袖　三、表後身頃　四、表前身頃　五、表衽　六、裏後身頃　七、裏前身頃　八、裏衽　九、衿

1、袖　袂袖・筒袖共に前に示したる寸法により、部分縫の通り表裏に標をつくべし。

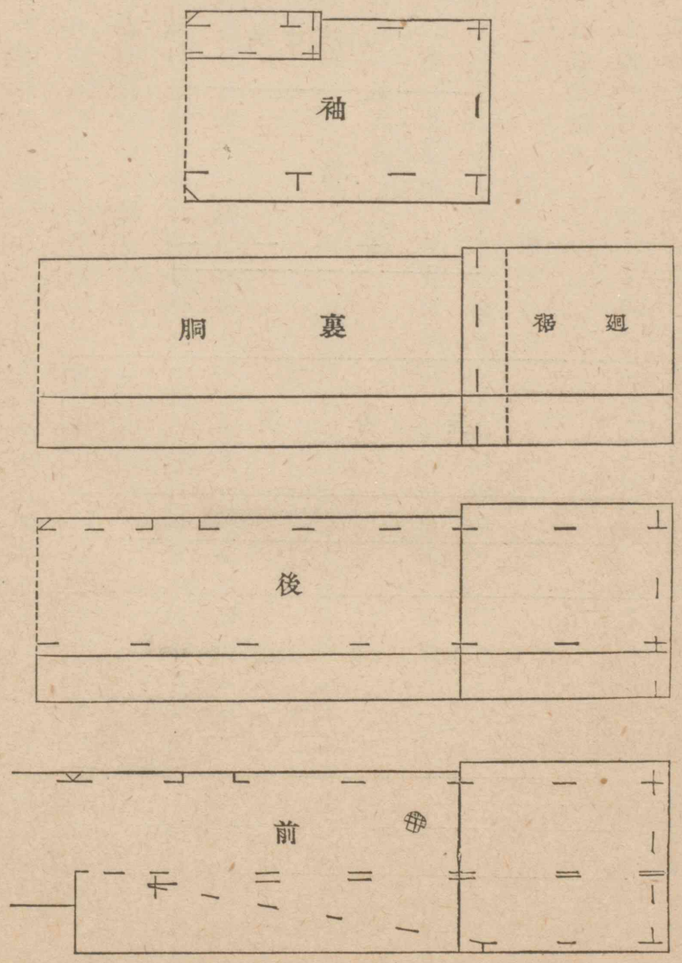
2、表身頃及び衽　四つ身單衣の通り、先づ後前の身頃を合せて山・丈・袖附・身八つ口・背縫代・後幅・肩幅の標をつけ、次ぎに後身頃を左に開き、前身頃に前幅・衽下り・衿下・衽附・衽幅・衿附の標をなすべし。

3、裏身頃及び衽　先づ胴裏の表を中にして左右の身頃を合せ、後身頃を上に、衿肩を手前にして山より二つに折り、裾廻も後布を上にして四枚揃へ、表より衽の

表標附け方



裏標附け方



二倍だけ長くして圖の如く胴裏の上に重ね、裾布を並縫代にして胴接ぎの標をつけ、直ちにこれを接ぎ合せて隱し躾をなし、次ぎに表に準じて山・丈・袖附・身八つ口及び背縫代・後幅・肩幅の標をつけ、後身頃を左に開き、前身頃に前幅・衽下り・衿下・衽附・衽幅・衿附・褄形の標をなすべし。

褄形の標は一つ身袷の時の如く、表裏衽の縫代及び幅等の標を附けたる後、表衽を左に開き裏のみを出して褄形の先を手前に、兩邊を縫代の標に合せて形の通りに標を附け縫標をなすべし。

4、衿　單衣と同じ仕方にて山・丈・幅の標をなすべし。

三　縫ひ方順序

一、袖口掛け方　二、表裏の袖
三、表身頃及び衽　四、裏身頃及び衽
五、裾合　六、背・脇の縫綴及び身八つ口
七、袖附　八、衽の縫綴及び衿下縫
九、衿附並びに衿綴　一〇、横綴

四　實習

1、袖　袖口の掛け方及びその縫ひ方はすべて部分縫に同じ。

2、表身頃及び衽　標の通り表身頃の背脇及び衽を縫ひ、裾は何れも返し留にし脇の縫ひ始めは一針返して一二寸返し置き、衽は單衣の時の如く縫代の方に斜に返し、各縫目に上下五六寸づつの間平躾をなすべし。

3、裏身頃、衽及び裾合　表身頃の如く背脇及び衽を縫ひ、丈調べをなし、脇縫に割り躾をかけ、表裏裾口の縫目を合せて待針をなし、先づ表を見て四裾を合せ、各縫目は一針返し、後一つ身裕の時の如くして褄を拵へ、隱し躾をなし、衽を極め、表裏合せて全體に平躾をかくべし。

4、背脇の縦綴及び身八つ口　表裏の背縫を合せ裾のところに待針をなし、表を見て一二寸の針目にて、衿肩の方よりあらく綴ぢ行くべし。次ぎに兩脇も背縫の時の如く綴ぢ行き、脇明のところは一寸程殘して留め置くべし。

それより脇明のところ前身頃にて後身頃を挾み、四つ留をなし、身八つ口を袖附の標まで縫ひ、表の方に折り返して平躾をなすべし。

5、袖附　袖と身頃との山標を合せて待針をなし、内外共に袖附の標を能く引き合せ、袖の表裏にて身頃の表裏を挾み、袖の方を稍、弛めにして四つ留をなし、先づ表袖を附けて袖の方に折り返し、次ぎに裏袖を附けてまた袖の方に折り、何れも平躾をなすべし。

6、衽の縦綴及び衿下縫　表裏衽附の縫目を合せて、劍先より二三寸下まで縦綴をなし、能く衽幅を合せて衿下標のところまで縫代の折をつけ、裏を返して褄先を拵へ、表裏の折目を合せて、待針を打ち、これを縫ひて平躾をかくべし。

7、衿附並びに衿綴　表裏の衿附を合せて、躾糸にてあらく綴ぢおき、次ぎに表衿の耳と裏衿の裁目とを合せて處處に待針をなし、これを接ぎて裏の方に折をつけ、隱し躾をなしおくべし。

それより衿の山標と背縫とを合せて待針をなし、なほ衿肩廻、劍先、合褄幅及びその中間にも適宜待針をなしてよく釣合を檢べ、單衣の時と同じく下前よりつけ初め、劍先二三寸の間は一針拔き、衿肩廻は極く小針にして附け行き、始め終りの留は何れも抄ひ留をなして二三寸返しおくべし。

次ぎに幅を定め幅標を合せて衿先を縫ひ、裏の方に折をつけて表を返し、背縫・衿肩廻・劍先・衿先及びその中間處處に待針をなして小針に綴け上ぐべし。

8、横綴　表を上に、裾口を向ふにして平らになしおき、裾の折角より一分五厘程上のところに、凡そ一寸位の針目にて横綴をなし、各縫目は何れも一針戻しおくべし。

右終らば、糸屑等を取りて、先づ裏より烙鏝をかけ、次ぎに表を返して各縫目及び劍先衿先等の肝要なるところに烙鏝をかけ、後總體に仕上げをなして、單衣の時の如くに疊み置くべし。

注意

一、衿附の際、衽幅狹きものは單衣の時の如く劍先より二寸下りて六分、五寸下りて一寸一二分、一尺下りて二寸二三分の割に衿附の標をなしおくべし。

一、裏の裾口一二寸の間にて、後前とも幅を標より五厘づつつめおくべし。

一、裾廻の色、表の地色と異なるときは、裾を合せたる後、四裾にも表より隱し

躾をなしおき、横綴のときは表に出さずして裏と縫代とのみを抄ひおくべし。

一、實地仕立方の際、部分縫用布にて一二回褄揚の練習をなさしむべし。

教授方法の大意

準備

袷仕立上げ並びに褄分解縫の標本

方法

袷を用ふる季節及び地質等を問答し、次ぎに四つ身單衣並びに一つ身袷の仕立上げ寸法、標附け方、縫ひ方順序等を復演せしめ、それより本課の仕立上げ寸法、標附け方、縫ひ方順序の前と異なる箇所を說き、後實物につきて仕立てしむ。但し此の際更に各部分につき、その要所を詳細に說明して實習に便ならしむべし。

右實習し終らば、その順序・方法及び技術の要點を問答して確實なる知能を得しむべし。

筆記の事項

仕立上げ寸法
標附け方
縫ひ方順序

第十一課　頭巾

要旨

頭巾の裁ち方、縫ひ方を授けて實用上の知能を得しめ、兼ねて其の形狀及び配色等に關する趣味を養ふ。

頭巾は其の形狀種種あり。隨つて其の作り方も一樣ならず。今左に一例として大黑頭巾の作り方を示すべし。

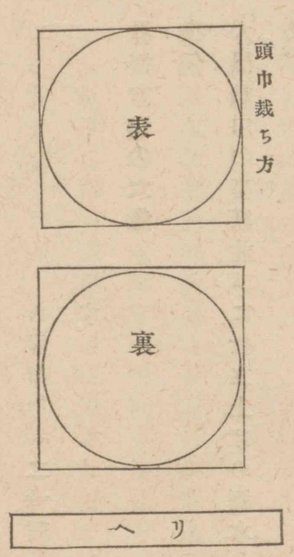
大黑頭巾

一　裁ち方

用布表地　唐縮緬或は唐天鵞絨類　一尺四方
同　裏地　木綿或は瓦斯甲斐絹類　表と同寸
同　緣地　唐天鵞絨或は觀光繻子の類　丈一尺三寸　幅一寸八分

右の用布を裁つには先づ表裏を揃へて二つに折り、其の上に型紙を載せし處處に待針を打ちおき、後これに合はせて廻りを裁ち切るべし。

頭巾裁ち方



注意

一、用布は一尺四方となしたれども、布地の都合によりては、並幅四方にても可なり。

一、表裏布を圓形に裁たしむるには、豫め型紙を裁ち置き、これを各兒童に貸附するを可とす。

二　仕立方

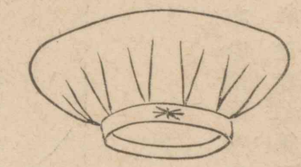
緣布の兩端を合せて片接ぎをなし、次ぎに表裏布の裏と裏とを合せて廻りに縫ひ躾をなし、緣布の長さに合せて圖の如く七つ程割り襞を取り、前の方三つ程は稍〻襞を深くして、端より三四分の縫代にして一一これを留め、次ぎに表の後の中

央に縁の接目を合せ、頭巾布を縁幅だけ縫ひ込みて處處に待針を打ち、一針抜き又は刺縫にこれをつけ、次ぎに裏の方に小針に絎けつけて仕上げをなすべし。

注意

小兒の成長するに從ひて頭巾の廻りを延ばさんとせば、豫め縁布を一二寸程長く裁ちてこれを縫ひ込み置くを可とす。

大黒頭巾



教授方法の大意

準備

大黒頭巾の型紙並びに仕立上げの標本

方法

小兒用頭巾の名稱・形狀・地質等につき、兒童の知れる所を問答し、次ぎに大黒頭巾の裁ち方、縫ひ方等を圖解及び標本によりて十分說明し、尙頭巾の小兒衞生上最も必要なる所以を附說してこれを了得せしめ、後其の寸法を筆記せしめて實地に仕立てしむ。

筆記の事項

頭巾の寸法

頭巾の型

備考

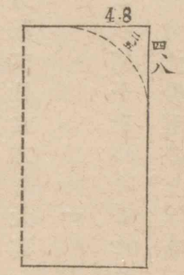
頭巾は嬰兒の軟弱なる頭部を保護して寒熱を防ぎ、又はその損傷を避けしむるを以て主要なる目的となせども、亦多少裝飾の意味をも兼ぬるものなれば、これを調製するに當りては、よく此の兩樣の趣意に叶はしめんことを務むべきなり。

大黒頭巾の外に、雪帽子・夏帽子等あり、左に是等の簡易なるものにつき裁ち方及び仕立方の大要を述ぶべし。

一　雪帽子

この帽子をつくるには一尺二寸の正方形の表布一枚と、これより丈・幅共に一寸六分程狹き裏布一枚と、テープ或はリボン等の附屬裝飾品とを要す。

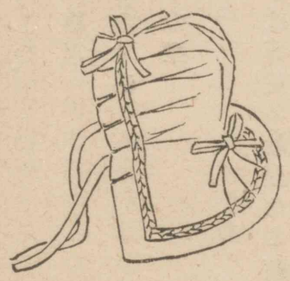
雪帽子



其の裁ち方は、圖の如く表布を縦に二つに折り、右の角卽ち裁目の方より兩側に四寸八分づつと、角の向ふに二寸五分とを取りて、標をつけ、此の點を通して程よく丸みの標をなして、これを裁つべし。

次ぎに裏布は表より丈・幅、丸の大さとも六分づつを減じて同じ形に裁ち切るべし。

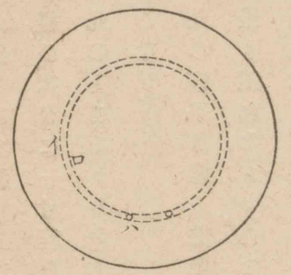
雪帽子

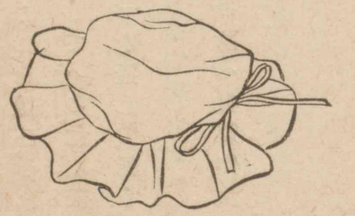


縫ひ方は、先づ裾の方にて、表を八分裏に折り返し、此の内より縫代二分を折りて裏布にまとひつけ、次ぎに兩側及び上部も同じ幅に折り、裾の兩角を三角にして前の如く裏にまとひつけ、後、圖の如く下部三寸程を除きて、前となるべき方に割襞七つ程を取り、端より一寸ばかり離れたるところを返し針にてこれを止め、廻りに飾テープ若しくは幅狹きリボンを附して兩側をまとひつけ、別に表若しくは裏と同質の布を二つに折りて

表と同じ襞を取り、これをその裏がはに附けて二重襞となし、裁目のところは見返しを附けてまとひ、次ぎに後の中央裾より三寸程上りたるところにて、割襞一つ、片襞二つ、(左右に一つづつ)を取りてこれを止め、このところ及び上部にリボンを結びて飾を附け、後、前の襞の終りたるところに表地と同質の布若しくは飾と同じリボンの紐をつくべし。

二　夏帽子





此の帽子は、直徑一尺五寸の圓形の上等の麻布(卽ち俗に絹寒冷紗と稱する布)二枚と、長さ三尺五寸、幅三分程のテープ一本とを要す。

その仕立方は、先づ表裏布の廻りをなるべく細く三つ折りにしてまとひこれを二枚合せて躾をなし、緣の方より二寸五分中へ入りたるところに圖中(イ)の如く表を見て五厘程

の針目にて返し針にこれを縫ひ、それより三分五厘程内を(ロ)の如く今一度縫ひ、次ぎに一寸程離して(ハ)の如く表に鳩目穴を二つあけてこれをかがり、此のところよりテープを通して能く仕上げをなし、後程よく締めて結び置くなり。

此の帽子は能く洗濯に耐へ、且製作法簡易なるが故に小兒の常用としては最も便利なるものなり。

注意

一、緣の三つ折及び紐通しのところの返し縫は、ミシンを用ふるを普通とすれども、小學校に於ては、前述の如く手縫ひになさしむべし。

一、鳩目穴を明くべきところは、豫め表裏用布の間に長さ一寸五分、幅六七分位の小切を挾み置くを可とす。

一、テープの通し方は、左端は右穴の表より、右端は左穴の表よりなすべし。

第二篇

第一課　本裁袷　女物

要旨

本裁袷女物の仕立方を授けて、標附け方及び縫ひ方の順序方法を會得せしめ、尙これを實習せしめて、十分其の技能に習熟せしむ。

第一　裁ち方　胴裏並びに裾廻

一　裁ち切り寸法

表用布　總丈及び各部の寸法は單衣棒衽の時に同じ。

裏用布　胴裏、二丈一尺五寸二分　裾廻、七尺八寸

一、裏袖丈　一尺六寸　一、胴裏丈　二尺八寸餘

一、裏衿丈　三尺九寸　一、裾廻丈　一尺二寸五分

一、衽裾丈　二尺三寸　　一、衿先丈　五寸

圖の方ち裁

二　積り方

右の裁ち切り寸法によりその積り方及び公式を示せば左の如し。

但し棒衽裁の場合

288－78＋0.15×8＋1×4＝215.2……胴裏總丈

{215.2－(16×4＋47－10＋2)}÷4＝280㎝……胴裏丈

288－215.2＋1.2＋4＝78……裾廻總丈

表總丈－裾廻總丈＋袖×8＋縫代×4＝胴裏總丈

{胴裏總丈－(袖丈×4＋表衿丈－衿先丈×2＋縫代×2)}÷4＝胴裏丈

表總丈－胴裏總丈＋袖×8＋縫代×4＝裾廻總丈

注意

前の積り方に於て袖の八倍となしたるは、裏の衽先丈十分あるを以て衽の袖丈を省かて計算したるものなり。縫代の四倍もいれと同理にて、四裾と胴裏との接代のみを取り、裏の衽先と衽裾との接代は算入せざるものなり。但し裏地の丈十分なるときは胴接ぎの縫込をなるべく多くなし置くべし。

應用問題

一、表地二丈八尺、裾廻地七尺五寸の用布を以て、女物袷を調製せんとす。胴裏總丈何程を要するか。

但し棒衽裁にて衽の寸法及び各部の縫代は普通とす。

答　二丈一尺二分

二、總丈二丈二尺五寸の胴裏地にて女物袷の裏を裁つに、袖丈一尺六寸五分とせば胴裏丈何程となるか。

答　三尺

三、表地三丈胴裏地二丈二尺七寸の用布にて、女物棒衽を裁たんとせば、裾廻總丈何程を要するか。

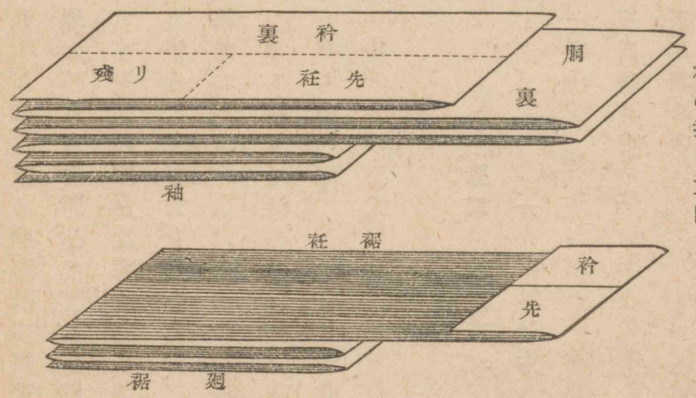
但し衽一分、胴裏縫込一寸とす。

答　七尺九寸八分

三　裁ち方實習

胴裏並びに裾廻布の總丈をはかり、表布の寸法に準じて積り方の計算をなし、先づ胴裏を取りて圖の如く袖丈四枚、胴丈四枚、裏袷丈一枚を取りて重ね、最初に左

布の折り方



布の折り方圖

右の袖を裁ち切り、次ぎに胴丈と裏袷とを裁ち分けて、胴裏の方に袷肩を明け、それより裏袷と衽先とを裁ち切るべし。

次ぎに裾廻布を取りて裾丈四枚、衽裾丈及び袷先丈、各一枚を折りて重ね、各折目を裁ち切り、後、衽裾並びに袷先布を更に半幅づつに裁ち切るべし。

教授方法の大意

準備

本裁單衣女物裁ち方の圖　本裁女物袷胴裏及び裾廻裁ち方並びにその折り方の圖

方法

本裁單衣女物の裁ち切り寸法、裁ち切の順序並びに四つ身袷裏の裁ち方を問答して豫備

とし、次ぎに本課の胴裏及び裾廻裁ち方の圖を示してこれを說明し、尙四つ身袷裏地の積り方を問ひて、袵及び胴接ぎ等の觀念を喚起し、次ぎに本課の積り方を授けて異同の點を比較せしめ、後二三の應用問題を與へて十分了解せしめ、それより實地に裁ち方をなさしむ。

筆記の事項

裁ち切り寸法

裁ち方の圖

積り方の公式

第二　仕立方

一　標附け方

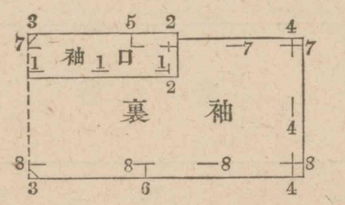
一、表袖　二、裏袖

三、表後身頃　四、表前身頃

五、裏後身頃　六、裏前身頃

七、表裏の衽　八、表裏の衿

1、袖　表袖の表を中にして各二つに折りて二枚重ね、寸法通り山・丈・口明・附幅の標をつけ、次ぎに裏袖をとりて表を中に二つに折り、袖口切も亦二つに折りて、四つ身袷の時の如く幅一分出して裏袖の上に載せ、先づ袖口掛の標をなし、後表に準じて各部分の標をつくべし。但し裏袖の寸法は表より口明にて五厘、八つ口にて一分をつめ、其の他は表と同じくすべし。

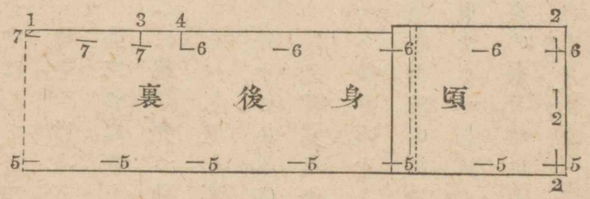


2、身頃　表身頃は、單衣の時の如く布の表を中にして二枚揃へ、後身頃を上に、衿肩明を手前にして二つに折り、寸法通り山・丈・袖附・身八つ口・後幅・肩幅の標をつけ、次ぎに後身頃を左に開きて前身頃に衽下り・前幅・抱幅の標をつくべし。

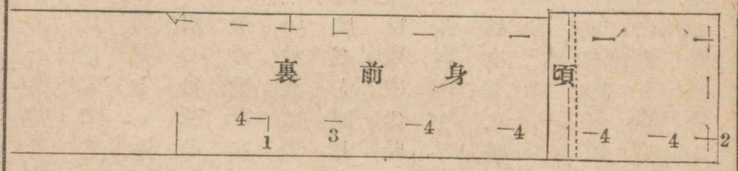
裏身頃は先づ胴裏の表を中にして左右の身頃を合せ、第一圖の如く後身頃を上に、衿肩明を手前にして、山より二つに折り、裾廻も後布を上にして四枚揃へ、表より袵の二倍長くして、胴裏の上に重ね、裾布を並縫代にして胴接ぎの標をつけ、直

第一圖

第二圖

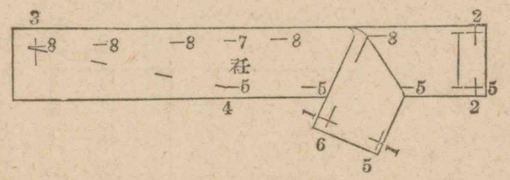


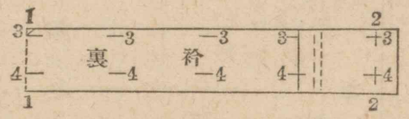
第三圖



ちにこれを接ぎ合せて隱し躾をなし、元の如く四枚揃へて第二圖の如く下に置き、袖附・身八つ口及び後幅・肩幅の標をつけ、次ぎに第三圖の如く後身頃を左に開きて、前身頃に衽下り・前幅・抱幅の標をなすべし。

3、衽　先づ並の縫代にて裏の衽先と衽裾とを接ぎ合せ、衽先の方に折り返して、隱し躾をなし、表を中に、裁目を手前にして二枚揃へて下に置き、それより表衽の表を中にして二枚合せて其の上に重ね、單衣の時の如





く丈・衿下・幅・合褄幅・衽附・衿附の標をなし、次ぎに表衽を左に折り返して裏衽に褄形の標をつくべし。

4、衿　先づ衿裏に衿先の切を接ぎ、裏衿の方に折り返して隱し躾をなし、表を中に二つに折りて下に置き、表衿も亦表を中にして二つに折りて其の上に重ね、山・丈・衿附縫代の標をつけ、次ぎに表裏を各別になして幅標をつく、其の仕方は、表は仕立上げの衿幅より二分廣く、裏は一分狹く標すべし。

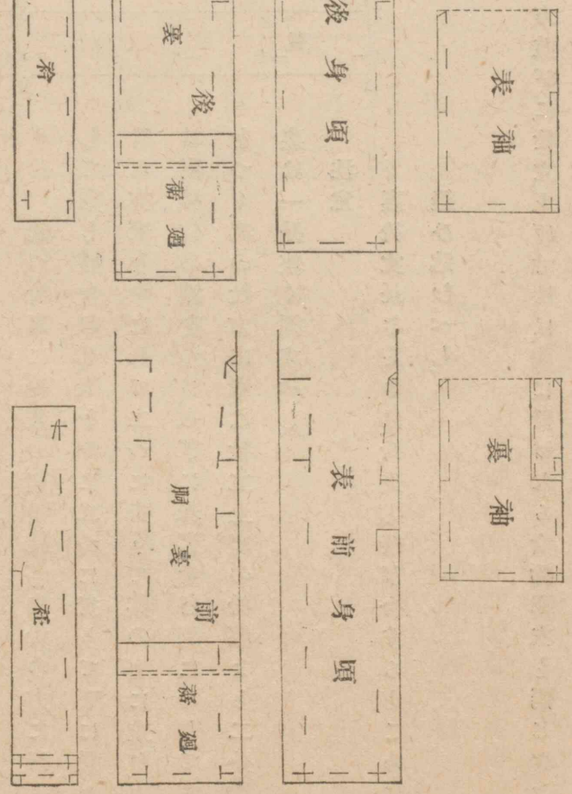
注意

裏衿丈長きときは、衿先と接ぎ合するところにて縫ひ込むべし。

備考

本課の裁ち方並びに仕立上げ寸法は、前に授けたる女物單衣と同じきを以て茲に省けり。但し袵は一分五厘とす。

圖合線方け附標地裏袷裁本



二　縫ひ方順序

一、袖口掛け方　二、表裏の袖
三、表身頃及び衽　四、裏身頃及び衽
五、裾合　六、縫綴
七、身八つ口及び衿下縫　八、表裏袖附
九、衿附並びに衿綴　一〇、横綴

三　實習

1、袖　先づ裏袖に袖口を掛けて廻りに平躾をなし、次ぎに袖口明のところ表裏の山標を合せて待針をなし、標の通り袖口を稍〻張りめにして一針抜きに縫ひ、口明を四つ留になし、此のところより四つ身の時の如く、八つ口二寸程手前まで四つ縫になし、これより先は一針返して、表袖のみ縫ひ行き、次ぎに裏と同じ色糸にて、裏袖の縫ひ殘りたるところを標の通り斜に縫ふべし。

それより表袖幅は標の通り、裏袖幅は標より少しく減きて各幅の折をつけ、裏の方を見て袖下の縫目より兩方に縫ひ上げ、裏の方に返して折をつけ、表を出して先づ八つ口に躾をかけ置き、それより袖口及び袖下に躾をなすべし。但し袖口下

並びに袖下の躾は表裏四枚合せてするを可とす。

2、身頃　標の通り表裏身頃の背・脇及び衽を縫ひて折をつけ、何れも裏を出して袖疊みとなし、先づ裏身頃を下に置きて正しく揃へ、其の上に表身頃を重ねて丈調べをなし、次ぎに表裏共に各縫目に上下五六寸程づつ平躾をなすべし。

注意

裏の裾口は四つ身袷の時の如く後前共に凡そ五厘づつをつむべし。

3、裾合　表裏の裾口を合せて、各縫目に待針をなし、表を見て四裾を合せ、次ぎに裏を見て左右の褄をあげ、一分の著にて全體に折をつけ、衽に隱し躾をなし、標の通り袵を定めて不同なく折り、表裏を合せて平躾をなすべし。

4、縦綴　表裏の背縫を合せて、裾のところに待針をなし、表身頃を見て、衿肩の方より裾口一寸程上まであらく綴ぢ行き、次ぎに兩脇も脇明の一寸程下より背縫の時の如く綴ぢ、それより左右の衽を劍先五六寸程を殘して綴ぢ行くべし。

5、身八つ口及び衿下縫　脇明のところ前身頃にて、後身頃を挾み四つ留をなし、身八つ口を袖附標のところまで縫ひ、表の方に折り返して平躾をかくべし。

それより左右の衿下に標の通り折をつけ、裏を返して能く襟先を拵へ、衿下の標までこれを縫ひ、引き返して正しく著をかけ、表裏共に平躾をかくべし。

6、袖附　標の通り表裏の袖附に折をつけ、先づ表袖の山標と肩山の標とを合せて待針をなし、附の標を合せて内外共に四つ留をなし、此の糸にて直ちに表袖をつけ、次ぎに裏袖をつけ、何れも袖の方に折り返して平躾をかくべし。

留の仕方は先づ裏袖附の標のところより針を出し、裏身頃・表身頃・表袖・裏袖の順に抄ひて四つ留をなすべし。

注意

裏の袖附を表と反對に身頃の方に返さしめんとせば、別に四つ留の仕方を授くべし。

7、袷　先づ前身頃を下に平らに置きて衿附をあらく綴ぢ、次ぎに表裏の衿にて身頃を挾み、能く釣合を見て、背・衿肩明・劍先其の他處處に待針を打ちて、一針抜きにて下前よりつけ始め、劍先・背縫等に至らば返し針をなし、附け始め及び附け終りは抄ひ留をなして一二寸程返し置くべし。

次ぎに衿先を縫ひ裏の方に折り返して縫込を綴ぢつけ、それより標の通り表裏の衿幅を折り、縫込を總べて表の方に包み、裏の衿幅を稍張りめにして山及び處處に待針を打ち置き、三四分の針目にて紮け上ぐべし。

掛衿をかくるときは幅の縫込を衿附の方に置きて折をつけ、能く縞目布目等を合せて先づ小針に衿附を紮け、次ぎに左右の横を紮けて後、縫を紮けつくべし。

8、横綴　表を見て上前の身頃より綴ぢ始め、各縫目に至らば一針返して能く糸を引き締め、針目の數は普通の寸法ならば表は前身頃に六つ、後身頃に八つを出し、裏は一針置きに出すを以て前身頃に三つ、後身頃に四つとなす。

次ぎに表裏に烙鏝をかけて能く仕上げをなすべし。

教授方法の大意

準備

本裁女物袷標附け方の圖　仕立上げの標本及び局部要所の標本

方法

本裁單衣女物仕立上げ寸法、並びに四つ身袷の標附け方並びに縫ひ方順序を問答して豫備となし、次ぎに本裁袷女物の標附け方及び縫ひ方順序を掛圖若しくは標本に對照しつつ説明し、能く了得せしめたる後、是等の事項を筆記せしめ後實物につきて仕立てしむ。

筆記の事項

標附け方

縫ひ方順序

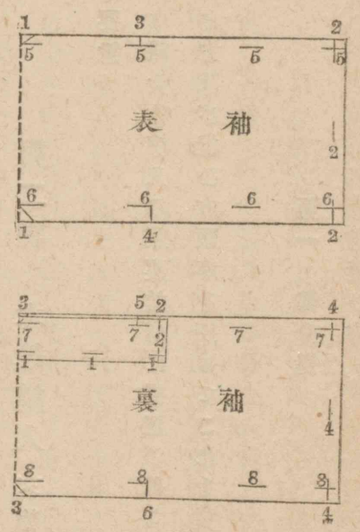
第二課　本裁綿入女物

要旨

本裁女物綿入の胴裏並びに裾廻の裁ち方を授けて能く了得せしめ、次ぎに標附け方及び縫ひ方順序を授けてこれを實習せしめ其の技能に習熟せしむ。

第一　部分縫

袖縫ひ方



用布　並幅二尺五寸　一枚
四つ割幅一尺八寸　一枚

1、標附け方　先づ表袖を取りて表を中に二つに折り、女物單衣の通り標し、次ぎに裏袖も亦表の如く二つに折り、其の上に袖口切を幅一分減きて圖の如く重ね、左の順序によりて標を附くべし。但し裏袖幅狹きときは袖口明のところに持出し切を附くるを可とす。

又裏の袖丈及び袖口明は表より五厘をつめ、八つ口は凡そ幅二寸五分位の間に於て更に一分をつむ。

一、袖口切の縦　二、袖口切の横　三、山　四、袖丈　五、袖口明　六、袖附　七、縫代　八、袖幅

右標附をなすには、表袖は單衣の時と同じ仕方にて附け、裏袖は先づ袖口掛の標縦に11横に22をなし、それより山標33・丈標44・を附け、尙袖口明5、袖附6を標し、後袖口の方にて幅五分(袖口切より)をはかりて77…を附け、それより袖幅をはかりて88…を標すべし。

注意

一、本課の部分縦に於ける各部の寸法は、袖丈いつぱい、袖口明五寸五分、袖附五寸五分、袖幅八寸、袖口袵一分五厘とす。

一、八つ口のつめ方は袖丈の長短によりて異なれども普通の大人物にありては一分五厘とす。

2、縫ひ方　裏袖を取りて標の通り袖口切の縦を縫ひ、袷の時の如く横の兩端を折りて絎けつけ、廻りに平躾をなすべし。

次ぎに表裏の袖を標の通りに縫ひ、留は始め終り共に返し針をなし、内袖の方に折り返して躾をかけ、袖口に含み綿をなすべし。

(イ)含み綿の作り方　並の厚さの青梅綿にて幅一寸、長さ袖口明の二倍より二寸程長きもの一枚と、五六分幅にて同じ長さのもの二枚とを切りて重ね、左の

食指を中に入れて綿を壓へつつ順次に右手にて折り行き、なほ其の上を能く壓へて綿の離れぬやうになしおくべし。

注意

木綿綿を切るときは、鋏を用ひずして、左手にて綿の上をおさへ、右手にて所用の寸法だけむしり取るべし。

(ロ)綿の含ませ方　袖口綿の眞中を袖の山標のところに合せ、下方を掛針にて張り、口明元の稍下より含め始め、針目は口明標のところより出し、綿を弛めに含ませて待針をなしおき、前の針目より五分程先のところにて一針出し、それより先は一針おきに綿のみを抄ひて、凡そ一寸位の針目にて綴ぢ行き、山のところは針目を出さずして標の左右一分程づつのところに出し、順次前と同樣にして綴ぢ行くべし。

(ハ)袖口の縮け方　表裏の山標を合せ、寸法通り袖口袵を、出して口明のところ五分程の間は表を稍張りめに、その他は弛めに引き合せ、釣合を見て口明の方を右にして四つ留をなし、處處に待針を打ち、並の著にて口明のところより三分程の針目にて縮け行き、終りはこの糸にて直ちに袂のところまで綴ぢおくべし。

(ニ)八つ口の含み綿及び縮け方　先づ綿の幅を一寸位にきり、これを二つに折りて、袖幅標の五厘程内のところに含ませ、綿を稍弛めにして一つ身綿入の時の如く一寸位のあらさにて綴ぢおき、後、表と合せて袖下・袖附及び其の他の處處に待針を打ち、三四分の針目にて縮け上ぐべし。

注意

一、袖口袵は口明より五分程の間にて、褄の如く丸く出づるやう指頭にて巧に其の形を拵へつつ縮け行かしむべし。

一、すべて袖口の拵へ方は褄と同じく、衣服仕立方中の最もむづかしき部分なれば能く注意して仕立てしむべし。

一、八つ口の拵へ方は一つ身綿入と同じきを以て、時間に餘裕なきときはこれを省くも可なり。

教授方法の大意

準備

女物綿入袖標附けの圖解及び部分縫の標本

方法

四つ身袷、並びに一つ身綿入袖の標附け方及び縫ひ方、袖口綿の作り方等を問答して舊觀念を惹起し、次ぎに本教材たる女物綿入袖部分縫の標本を配付して能く觀察せしめ、其の標附け方及び縫ひ方の方法を圖解・標本と對照しつつ説明し、能く了得せしめたる後實習せしむ。

第二　仕立方

一　標附け方

一、表袖　二、裏袖
三、表後身頃　四、表前身頃
五、裏後身頃　六、裏前身頃
七、表裏の衽　八、表裏衿

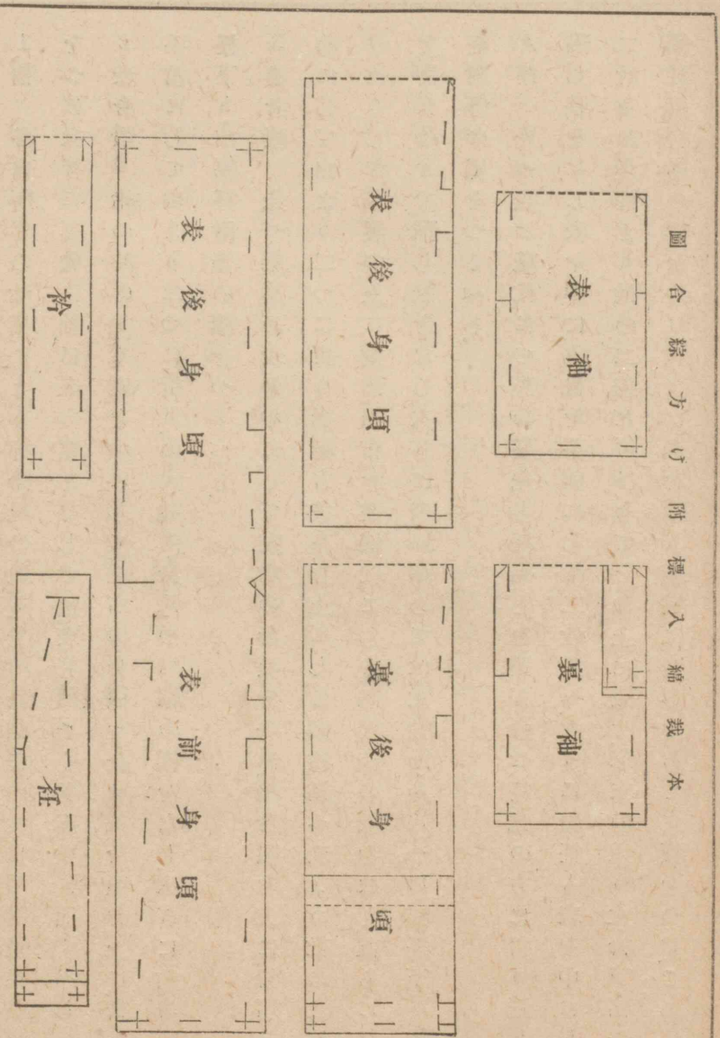
1、袖　各自所要の寸法により部分縫の通り先づ表袖に山・丈・口明・附・縫代・幅の標をつけ、次ぎに裏袖に袖口掛の標をなして後、表と同じく各部分に標すべし。

2、表身頃　袷の時の如く表を中にして左右の身頃を合せ、後身頃を上に、衿肩を手前にして山より二つに折り、山・丈・袖附・身八つ口・幅の標をなし、次ぎに前身頃に衽下り・前幅・衽附等の標をつくべし。

3、裏身頃　先づ胴裏の表を中にして左右の身頃を合せ、後身頃を上に、衿肩を手前にして山より二つに折り、裾廻も後布を上にして四枚揃へ、表より袵の二倍だけ長くして胴裏の上に重ね、裾布を並縫代にして胴接ぎの標をなし、直ちにこれを接ぎ合せて隠し躾をなし、次ぎに表に準じて山・丈・袖附・身八つ口・幅・衽下り・前幅・衽附等の標をつくべし。

4、衽　先づ並の縫代にて裏の衽先と衽裾とを接ぎ合せ、衽先の方に折り返して隠し躾をなし、表を中に、裁目を手前にして二枚揃へ、次ぎに表衽も表を中にして二枚重ね、裏衽より袵の二倍だけひきてその上に載せ、單衣の通り丈・衿下・幅・合褄幅・衽附・衿附の標をつけ、次ぎに表を除き裏衽に褄形をあてて標をつけ、これに縫

圖合綜方け附標入綿裁本



標をなしおくこと、四つ身衿の時の如くなすべし。

5、衿　先づ裏衿に衿先の布を接ぎ、裏衿の方に折り返して隠し縫をなし、表を中に二つに折りて下におき、表衿も亦表を中にして二つに折りてその上に重ね、山・丈・衿附・縫代の標をつけ、次ぎに表裏衿を別別にして幅標をつく、其の寸法は表は仕立上げ寸法より二分廣く、裏は一分狹くなすべし。又裏衿の丈長きに過ぐるときは、衿先を接ぎ合すところにて縫ひ込むべし。

注意

衿幅の標にて表を二分廣く、裏を一分狹くなしたるは、表衿附に五厘の著をかけたる殘り一分五厘だけ裏へ返し、裏衿をそれだけひきて紮け合す爲なり。但し裏衿は標附のとき一分をつめたれども、附の方に表と同じく五厘の著を要するを以て、一分五厘ひけることとなるなり。

二　縫ひ方順序

一、袖口掛け方　　二、表裏の袖

三、表身頃　　四、裏身頃

五、表裏袖附　六、裾合
七、含み綿　八、綿入
九、袖口及び八つ口綴け方　一〇、衿下綴け方
一一、衿綴並びに衿綴　一二、縦綴
一三、横綴

三　實習

1、袖　部分縫の通り裏袖に袖口をかけ、表裏の袖を縫ひ、躾をかくべし。

2、身頃　表身頃の背脇を縫ひ、左右の衽をつけ、表裏共に裏を返して袖疊みとなし、裏を下に表を上にして下に置き、肩山・衿肩・劍先等に待針を打ちて丈調をなし、表裏共に脇の縫込を割りて割躾をなし、各縫目に上下四五寸の間平躾をかけ、それより劍先・衿肩廻等に能く注意して表衿をつけ、衿の方に折り返して平躾をなし、次ぎに裏衿をつけて亦平躾をかけおくべし。

3、袖附　先づ表袖と表脇明とを合せて、山のところに待針をなし、袖の方を稍、弛めにして附の標を合せ、始め終りを返し針にしてこれをつけ、袖の方に折り返して平躾をかく。

次ぎに裏袖も亦表の如くにして左右をつくべし。

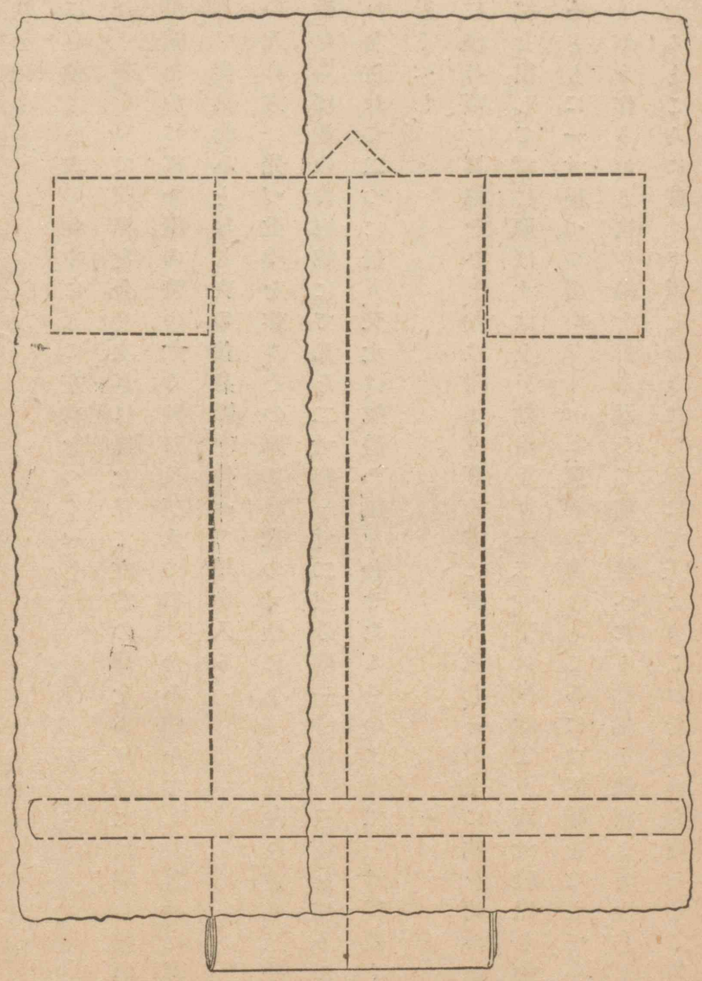
4、裾合　表を見て四裾を合せ、次ぎに裏を見て左右の褄をあげ、衽には隱し躾、他には平躾をかけ、部分縫の時の如く袖口及び八つ口に含み綿をなし、表裏共に裏を返して夜具疊みとなし、表の後身頃を伸べて綿を入る。

5、綿の入れ方　先づ袍綿を作る。その厚さは、袍の寸法によりて異なれども、三分程の袍ならば並の青梅綿にて凡そ二寸幅、一寸二三分幅、一寸幅の三枚を切りおき、これを重ねて二つに折り、又丈は、總體の幅を合せたるものより二三寸程長くなし置くべし。

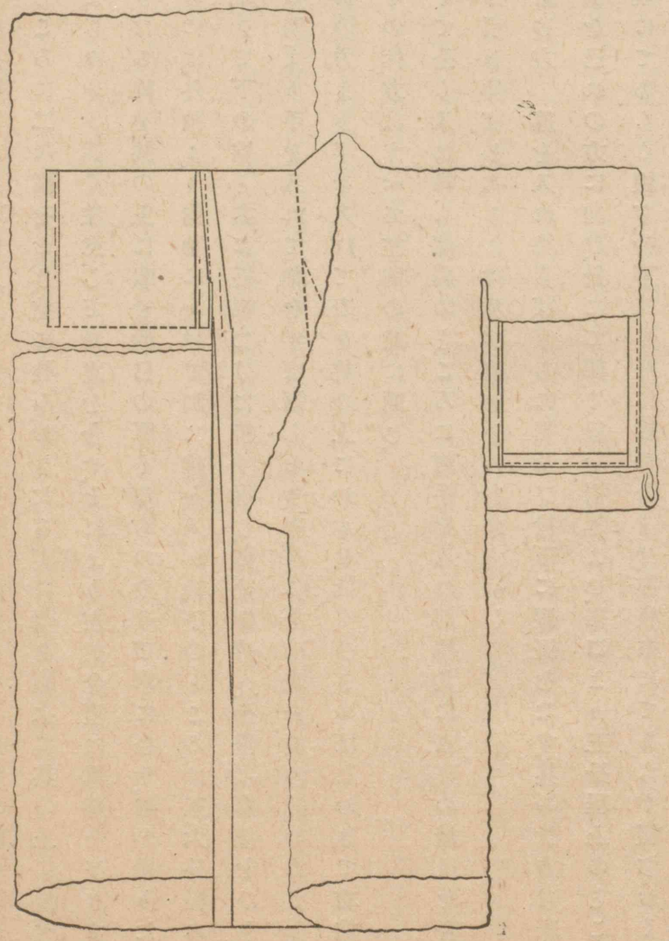
次ぎに後身頃に眞綿をひき、袖は附より裏の方に折り返し、その上に綿を圖の如く丈・幅を出して縦に廣げ、丈は上を袖附より一二寸、下は袍標より四寸程出し、幅は左右ともに一寸程づつ廣くなすべし。又綿の薄きところには附綿をなして不同なきやう作りおき、裾の綿を折り返して前に拵へたる袍綿を袍標より少しく下りたるところに載せて返しおきたる綿にて上よりこれを包み、袖附のところ

綿入れ方の圖

後



前



にて綿を切り前身頃に入るる分となし、全體に眞綿をひき、袵綿の動かぬやう裾のところに二尺指をおき、前に疊みおきたる裏身頃を順次に其の上に伸べ、綿の片よらぬやう能く注意して表裏を合せ、それより左前身頃に眞綿をひきて、殘しおきたる綿を其の上に載せ、繼目の厚くならぬやう丁寧に合せ、袖の殘りたるところには、外袖より內袖にかけて別に綿を入れ、衿下のところは五六分程の綿一枚おきて下の綿と共に衽幅だけに折り返し、褄先を拵へ、全體に眞綿をひき、表の袖口明より手を入れて袖を半ば返しおき、次ぎに上は表身頃の衿の方より、下は裾口の方より手を入れて表を綿の上にかぶせ、能くひきのばしおきて右前を入る。その仕方はすべて左前の時に同じ。

かくて全く入れ終らば肩のところに兩手を入れ兩脇共に表裏の縫目を合せて十分引き伸ばし、次ぎに袖及び裄をひきあはすべし。

6、紮け方　綿を入れ終らば直ちに裾及び衿下に假綴をなす。其の仕方は表を見て裾を己れの方に向け、針にて能く綿を引きよせ、裾口より五分程上のところを並躾にてあらく綴ぢ、衿下は裏衽に綿を含ませ、亦躾糸にてあらく綴ぢおくべし。

次ぎに袖口及び八つ口に四つ留をなしてこれを紮け、それより左右の衿下を紮け、表裏の衿を合せて綴ぢ、衿附の始め終りに四つ留をなし、衿先を縫ひ、裏へ返して綴ぢつけ、三つ衿を入れ、裏衿幅を標の通り折を附け、稍〻張りめにして表に合せ、縫込及び綿は總べて表にくるみ、衿先のところは下と反對に表に返し、裏衿の先は褄の如き形に作り、眞中及び所所に待針をなし、裏の方を見て三四分の針目にて紮け上げ、次ぎに背脇・衽に裾口より二尺程上まで縦綴をなし、それより衽を除きて横綴をなすべし。

以上仕立終らば、先づ裏を返して能く烙鏝をかけ、更に表を出して標糸及び糸屑等を取り除き、丁寧に烙鏝又は火熨斗をかけて仕上げをなすべし。

注意

一、縦綴は、上前は表を、下前は裏を見てなすべし。

一、褄の揚げ方は一つ身綿入の時にも授けたれども最もむづかしき技術なるを以て、本課實地縫ひ方の際、更に部分縫用布にて練習せしめ、後實物にて縫はしむるを可とす。

一、眞綿を使用するときは、なるべく線（すじ）にならぬやうに引き伸ばし、又これを切るときは鋏を用ひしむべし。

二、表地と裾廻地との色合異なるときは褄を揚げたる後、總體に隱し躾をなし、横綴の時は表に出さずして裾の縫代のみにかけ、裏を見てなすべし。

教授方法の大意

準備

本裁綿入表裏標附け方の圖　綿入れ方の圖並びに綿入袖褄部分縫の標本

方法

本裁女物單衣の仕立上げ寸法、一つ身綿入及び四つ身袷の標附け方、縫ひ方順序を復演せしめて豫備とし、次ぎに本課の標附け方、縫ひ方順序及び其の方法を掛圖・標本によりて說明し、よく了得せしめたる後これを筆記せしめ、それより實習せしむ。

實習中は机間巡視をなして各兒の成績につきて批評訂正すべし。

筆記の事項

標附け方

縫ひ方順序

袖口及び裾の含み綿の厚さ及び其の寸法

第三課　本裁綿入　男物

要旨

本裁男物綿入の仕立方を授けて其の技能に習熟せしめ、且女物と異なる點を了得せしむ。

仕立方

一　標附け方

一、表袖　二、裏袖

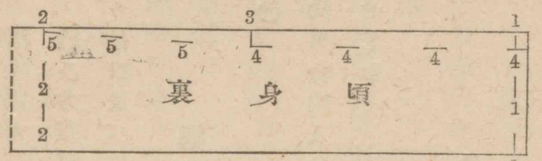
三、表後身頃　四、表前身頃

五、裏後身頃　六、裏前身頃

七、表裏の衽　　八、表裏の衿

1、袖　各自の寸法により、先づ表袖に山・袖丈・袖口明・人形・袖幅の標をつけ、次ぎに裏袖の上に袖口を置きて袖口掛の標をなし、表に準じて山・丈・口明・附・人形・幅の標をつくべし。但し袖丈及び袖口明は表より五厘をつめ、袖口衽は一分五厘出すものとして標すべし。

裏身頃標附け方



2、身頃　表は單衣の通り後前に山・丈・袖附・幅の標をなし、次ぎに衿肩を五分、後身頃の方に越して揚の標をつけ、それより後身頃を左に開きて前身頃を出し、揚の標を合せて待針をなし置き、衽下り・前幅・抱幅及び其の中間に標をなすべし。但し脇明は袖附より一分をつむ。

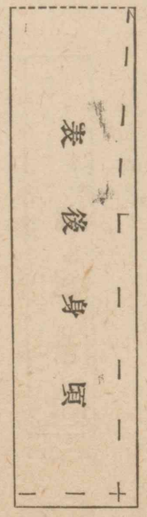
裏は表の丈より衽の二倍即ち四分長くして丈を定め、殘りは圖の如く肩にて揚の標をなすべし。

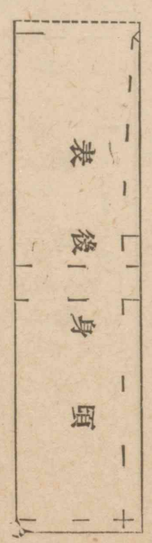
注意

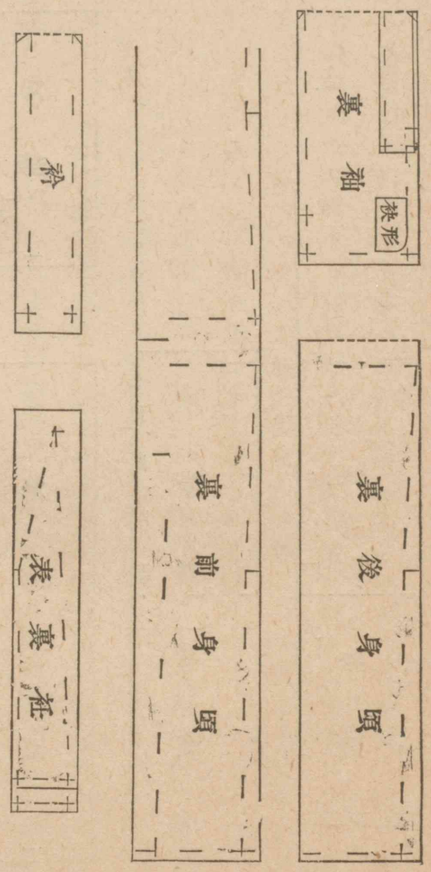
男物の裏は、女物と異なり、通裏となすを以て、通常右に述べたるが如く標せども、若し裾廻をつくるときは、胴裏と接ぐところにて縫ひ込むこと女物の時の如くすべし。

3、衽　裏を二枚揃へて下に置き、表を衽の二倍だけひきてその上に重ね、女物の

圖合縫方け附標(物男)入綿裁本







時の如く丈・衿下・幅・合褄幅・衽附・衿附の標をなし、次ぎに表を除き、裏衽に褄形をあてて標し、縫標をなし置くべし。

4、衿　表裏共に表を中にして二つに折り、裏を下に、表を上にして置き、山・丈・衿附・縫代の標をなすべし。

二　縫ひ方順序

一、袖口掛け方　二、表裏の袖
三、表身頃　四、裏身頃
五、表裏袖附　六、裾合
七、含み綿　八、綿入
九、袖口紮け方　一〇、衿下紮け方
一一、衿綴並びに衿紮　一二、縫綴
一三、横綴

三　實習

1、袖　裏袖に袖口をかけ、表裏の袖を縫ひ、平躾をかくべし。

2、表身頃及び裏身頃　先づ表身頃の背を縫ひ、單衣の時の如く後前の揚をなし、裾の方に返して平躾をかけ、次ぎに前身頃を見て兩脇を縫ひ、上下共に返し針をなし、揚のところまで割躾をかけ、それより標を合せて衽をつけ、上は縫込の方に斜に、下は縫目に沿うて返し針をなし、衽の方に折をつけ、次ぎに衿の山標を身頃

の山標に合せて、衿肩・劍先・合褄及びその他の處處にも待針をなして、下前より附け始め、劍先・衿肩廻及び背縫のところは、何れも一針返し、附け始め及び終りは一二寸程返し置くべし。

次ぎに裏の背縫をなし、揚のところは標の通り小針に縫ひ、兩方に開きて六七分のあらさに隱し躾をなし、兩脇を縫ひ、裾のところは表より五厘程幅をつめおき、次ぎに衽をつけ、表裏共に裏を返して袖疊みとなし、裏を下に表を上にして丈・裄を調べ、後、表裏共に脇の縫込を割りて割躾をなし、各縫目の上下及び劍先に平躾をかけ、それより女物の時の如く表裏の衿をつくべし。

3、袖附　表袖と表身頃の袖附とを合せて、山のところに待針をなし、標の通り袖の方を少しく弛めにして單衣の時の如く、袖にて身頃を挾み四つ留をなし、布幅廣きものは身頃を折りて袖をつけ、袖の方に折り返して平躾をなし、後、裏袖も表の如くこれをつくべし。

4、裾合　表を見て四裾を合せ、次ぎに裏を見て左右の褄をあげ、一分の著にて表の方に折り返し、衽に隱し躾、四裾に平躾をなすべし。

それより袖口に綿を含め、裏を返して夜具疊みとなし、裏の後身頃を擴げて綿を入る。

5、綿の入れ方　先づ袍綿を作る。その厚さは二寸幅位のもの一枚と、一寸四五分幅及び一寸幅位のもの各一枚とを重ねて、これを二つに折り、丈は總體の幅を合せたるものより二寸程長くなしおくべし。

次ぎに擴げたる後身頃に眞綿をひき、その上に女物の時の如く、身頃より丈・幅を出して綿を縦に擴げ、薄きところには附綿をなし、次ぎに裾の綿を折り返して袍綿を載せ、裾綿にてこれをくるみ、人形のところにて綿を切り、全體に眞綿をひき、次ぎに疊みおきたる裏をその上に擴げて能く表裏を合せ、前身頃の裏の方に眞綿をひき、殘しおきたる綿を入れ、不足なるところには足し綿をなし、褄・衿下等を拵へ、上に眞綿をひきて表を返し、次ぎに片前も同じ仕方にて綿を入れ、引き返して能く表裏を合せて仲ばしおくべし。

6、紆け方　女物の時の如く裾及び衿下に假綴をなし、次ぎに袖口の留をなしてこれを紆け、次ぎに左右の衿下を紆け、後、表裏衿の縫目を合せてこれを綴ち、衿附

の始め終りに四つ留をなし、衿先を縫ひ、標の通り幅の折をつけ、衿先の縫込を三角に折りて表にあらはれぬやうに綴ぢつけ、幅を二つに折りて衿附のところに合せ、處處に待針を打ちてあらく躾をかけ、後衿附の終りより二分程上を表裏に小さき針目を出して能くこれを留め、後三四分の針目にて絎けおくべし。

次ぎに背・脇・衽に裾より二尺程の高さに縦綴をなし、後、衽を除きて横綴をなすべし。

教授方法の大意

準備

本裁綿入男物標附け方の圖並びに仕立上げの標本

方法

女物綿入の標附け方、縫ひ方順序並びに男物單衣の普通仕立上げ寸法を復演せしめ、掛圖及び標本を示して、男物綿入表裏の標附け方、袵の寸法、縫ひ方の順序・方法等を説明し、よく了得せしめたる後實地に仕立方をなさしむべし。

筆記の事項

標附け方

縫ひ方順序

袖口及び裾の含み綿の厚さ及びその寸法

第四課　羽織の種類及び各部の名稱

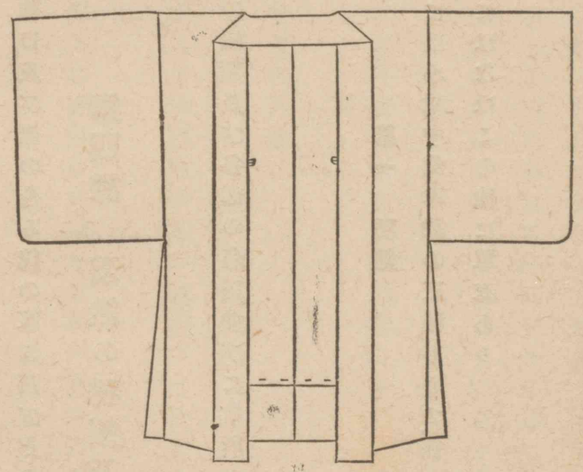
要旨

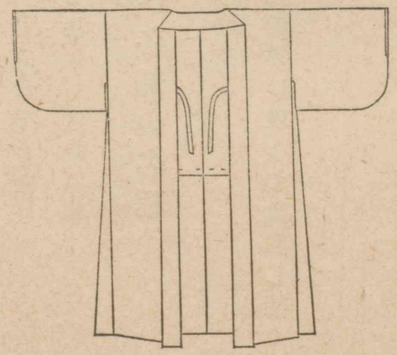
羽織の種類及び各部の名稱並びに紋所の位置等に就きて説明し、能く記憶せしむ。

第一　種類

羽織には小裁・中裁・本裁の三種ありて、各、男物女物の別あり。また袷・綿入の別あり。本裁にはなほこの他に單衣あり。

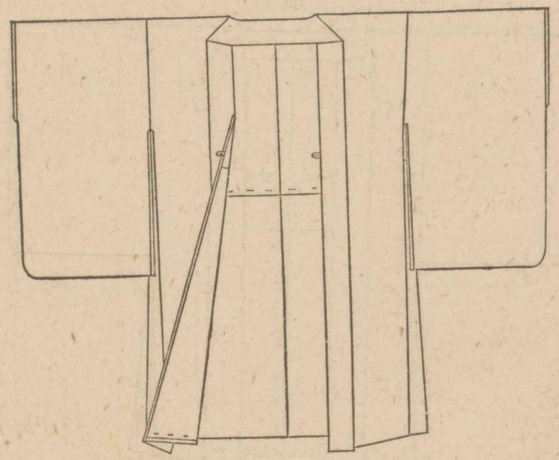
本裁羽織男物

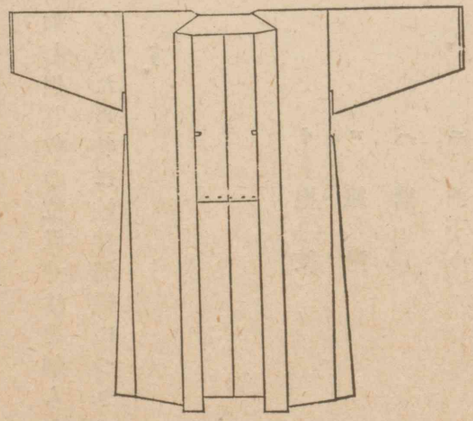




小裁羽織

本裁羽織女物

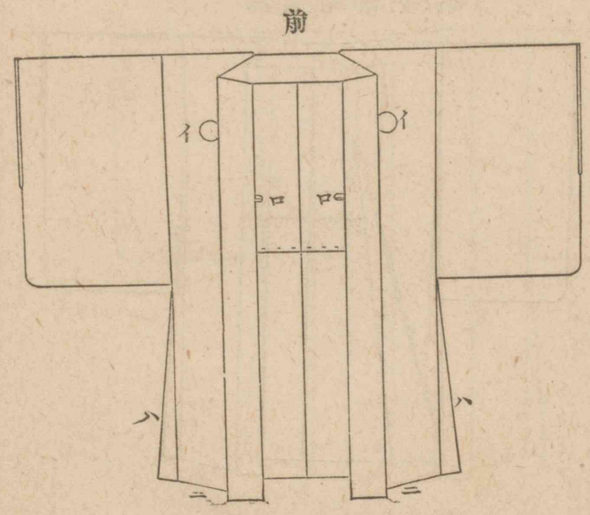




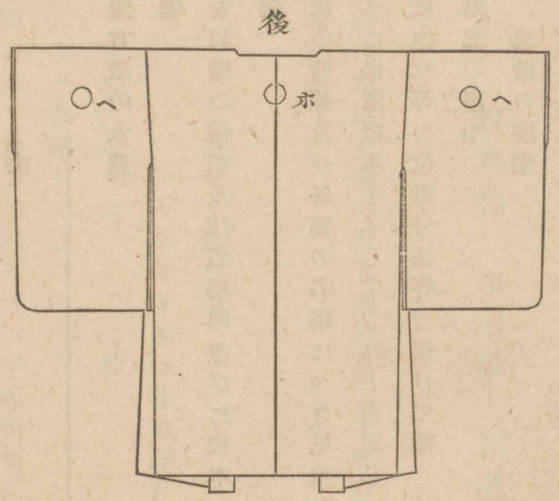
中裁羽織

第二　各部の名稱

羽織の名稱中著物と異なるところは左の如し。但し紋の位置・寸法を知らしめんがため特に紋付羽織につきて説明す。



イ　抱紋
ロ　紐附
ハ　襠
ニ　前下り



ホ　背紋
ヘ　袖紋

右に示せる紋所の位置

一、袖紋　袖山より一寸八分乃至二寸下りて外袖幅の中央

二、背紋　肩山の裁目より一寸七分下りたるところ

三、抱紋　肩山より四寸下りて、衿肩明の寸法を除きたる前身頃の布幅の中央

教授方法の大意

準備

男女羽織の種類及び名稱圖並びに標本

方法

羽織の種類及び各部の名稱につき、兒童の知れるところを問答して豫備となし、次ぎに掛圖・標本を示してこれと對照しつつ更に順序正しき説明を與へ、後、背紋・袖紋・抱紋等の位置・寸法等を授けて能く了解せしめ、左の事項を筆記せしむ。

筆記の事項

羽織の種類

各部の名稱

紋所の位置

第五課　本裁綿入羽織女物

要旨

本裁綿入羽織女物の裁ち方、縫ひ方を授けて、よくこれを了得せしめ、その技能に習熟せしむ。

第一　部分縫

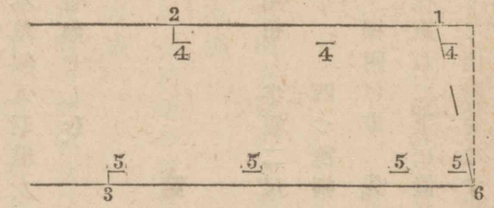
一　前下り及び襠の附け方

用布　半幅二尺三寸　二枚

四つ割幅一尺八寸　一枚

1、標附け方　先づ二尺三寸の半幅用布二枚を取りて表裏の前身頃と見做し、二枚重ねて下に置き、左を衿肩、右を裾口、手前を衿附、向ふを脇となし、左の順序によりて標附をなすべし。

前身頃標附け方



一、丈　二、脇明　三、紐附　四、前幅　五、衿附縫代　六、前下り

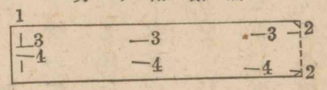
右の順序の如く先づ丈標1をなし、次ぎに脇明2、紐附3、前幅4を標し、それより衿附縫代5、5、前下り6の標をなし、後4と6とをつなぎて前下りの斜なる標をなすべし。但し衿附の縫代は上を二分五厘、裾口を三分五厘とし、下より三寸程上りたるところより自然に斜に標すべし。

次ぎに一尺八寸の用布を襠布と見做し、眞中より二つに折り、折目を右にして置き、圖の如く標をつくべし。

一、丈　二、幅　三、後の曲り　四、前の曲り

右の順序により輪の方よりはかりて丈標1を附け、次ぎに幅標2、2をつけ、それより曲りの割合を定めて、後身頃につくべき方に3、3を標し、前身頃につくべき方に4、4を標すべし。但し後前の曲りの割合は、仕立上げの下の幅標より上の襠幅を減き、殘りを三分してその一を後身頃に附く方へ、その二を前身頃に附く方へ曲ぐるものとす。又幅の縫込はすべて後身頃に附く方になすべし。

襠標附け方



注意

右の部分縫に於ける各部の寸法

一、丈　いつぱい　縫代三分五厘　一、脇明　一尺三寸五分

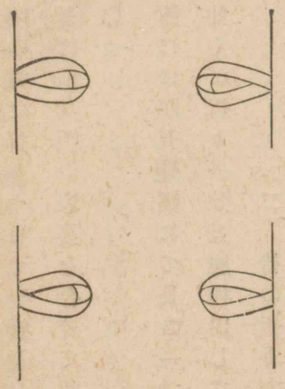
一、紐附　七寸　一、前幅　いつぱい

一、前下り　八分　一、襠丈　八寸五分

一、襠幅　下一寸六分　上四分

2、縫ひ方　裾の山（部分縫にては裁目）を一分表身頃の方に繰り越し、表は前下りの標の一分先き、裏は一分手前を合せて、裏の幅を稍、弛めにして表を見て縫ひ、裏の方に折をつけ表を一分裏に返して躾をかけ、次ぎに襠布を標の通りに折り稍、張りめにして前身頃に合せ、身頃の方より待針を打ちて縫ひ、始め終りを返し針になし、前

紐附の折り方



身頃の方に折をつけて平躾をなすべし。

次ぎに前身頃の表裏を合せて、衿附のところに縫躾をなし、紐附を紮けてこれをつくべし。

紐附には四五分幅にて、長さ一寸二三分の切を折りて紮け、輪の方を表として圖の如くに折り、一分五厘程出して前身頃の紐附標のところに縫ひつけ置くべし。

二　衿の折り方、附け方

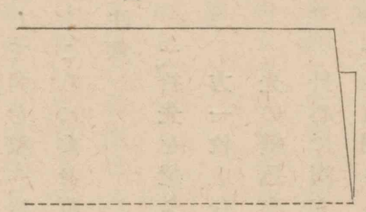
用布　並幅二尺五寸　一枚

四つ割幅一尺八寸　一枚

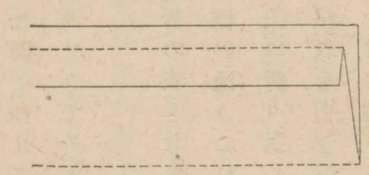
1、衿の折り方　裏を出して机上に置き、衿幅一寸八分の二倍に六分五厘を加へたる幅に第一圖の如く折り、それより第二圖の如く中の布を六分五厘減きて折り、次ぎに輪の方を四分、耳の方を三分に折り、更に第三圖の如く、四分に折りたる方を一分出して中央より二つに折り、折目のところは伸びぬやう注意して烙鏝をかけ、後、前身頃の丈より三分程長くして丈標を附け、それより五寸程づつを隔てて合標をなすべし。又心を入るるときは、心の幅を出來上りの衿幅より一分狹

衿の折り方

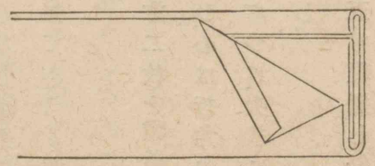
第一圖



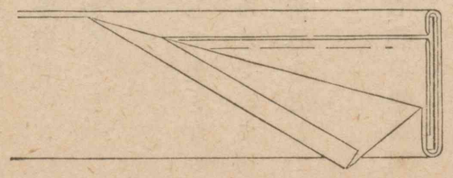
第二圖



第三圖



第四圖



くして平らに裁ち切り、兩方共に五厘づつひきて二枚に折りたる方卽ち衿の表となるべき方に載せ、第四圖の如く幅の折込にて包み、あらく躾をかくべし。

注意

右の部分縫に用ふる心ぎれは、四つ割幅なるを以て廣き分は折り込みおく

べし。

2、衿の附け方　衿の二枚になりたる方を裏身頃の衿附のところに合せ、紐附より上は衿の方を稍〻弛めに、下は同樣にして五寸程づつを隔てて待針をなし、衿の方を見て折目の一分上を一針拔き、又は刺縫にし、紐附のところは二度程返して能く留め、それより衿先を標の通りに縫ひ、裏の方に返して縫込を綴ぢつけ、表を返して角を整へ、衿紐の合標を合せて待針をなし、小針にこれを紐け、次ぎに衿附のところに前身頃を五厘ひきて衿の方を見てあらく並縫をかくべし。

注意

一、衿先を縫ふには、衿の表となるべき方二枚を稍〻弛めにして、裏となるべき方一枚と合せ、丈標の通りこれを縫ひ、心は折角のところまでにて切り、衿先の縫込をその上に折り返して綴ぢつけ、次ぎに幅の折込を返して二三針心に綴ぢつけ、後、表を引き返すべし。

一、地質剛きものは、衿附の始め終り四五寸程返し針をなし、其の他は刺縫となすべし。

教授方法の大意

準備

本裁綿入羽織女物前身頃襠標附の圖

衿折り方の圖並びに其の標本

方法

目的を指示して羽織の著物と異なるところを問答し、掛圖・標本によりて先づ前下り、襠の標附け方、縫ひ方順序を說きて了得せしめ、次ぎに紐附の寸法及び折り方を授けて前身頃を縫はしめ置き、後、衿の折り方、附け方の標本を配付してよく觀察せしめ、圖解及び標本と對照しつつ委しく說明し、十分了解せしめたる後、これに倣ひて實習せしむ。

第二　裁ち方

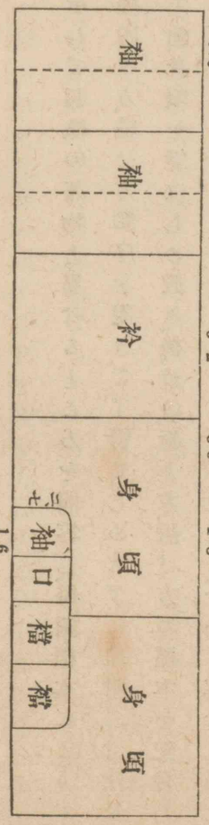
一　裁ち切り寸法

表用布　二丈八尺

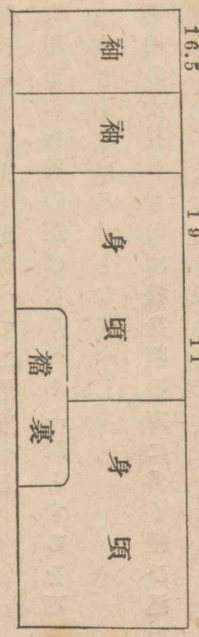
一、袖丈　一尺六寸五分　一、衿丈　六尺二寸
一、後丈　三尺三寸　一、前丈　四尺三寸
一、衿肩明　二寸七分（内四分の廻し）　一、袖口丈　一尺六寸

注意

右の衿丈は身丈を凡そ二尺五寸の仕立上げとして定めたるものなり。



裏用布　一丈二尺六寸
一、袖丈　一尺六寸五分　一、後身丈　一尺九寸
一、前身丈　一尺一寸



二　積り方

右の裁ち切り寸法により其の積り方算法及び公式を示せば左の如し。

表用布

(16.5＋33)×4＋62＋10×2＝280……總丈
280－(16.5×4＋62＋10×2)÷4＝33……後丈
33＋10＝43……前丈

(袖丈＋後丈)×4＋衿丈＋後前の差×2＝總丈
總丈－(袖丈×4＋衿丈＋後前の差×2)÷4＝後丈

後丈＋後前の差＝前丈

裏用布

16.5×4＋(20＋11.5)×2＝129…總丈

袖丈×4＋(後丈＋前丈)×2＝總丈

又表用布の總丈及び仕立上げ寸法を知りて、裏用布の總丈を求むるときは左の如くなすべし。

袖丈×8＋後丈×4＋前丈×6＋衿肩明×2＋縫代一表の總丈＝裏の總丈

注意

一、衿丈を定むるには、仕立上げの身丈に裁ち切りの衿肩明と、前下りと、外に縫代一寸以上とを加へて二倍すべし。

一、表用布の後前の差は、なるべく一尺とするを可とすれども、後の折返し餘り少きときは八寸となすべし。

一、裏地の丈長きものは、後身頃の方に多く縫ひ込むべし。

應用問題

一、左に示せる寸法にて、綿入羽織を裁たんとせば、表の總用布幾何を要するか。

一、袖丈　一尺五寸　一、後丈　三尺五寸

一、後前の差　一尺　一、衿丈　六尺四寸

答　二丈八尺四寸

二、表地二丈九尺の用布にて、女物綿入羽織を裁つに、袖丈一尺七寸として、他を普通寸法にせば、後丈及び前丈は何程となるか。

答　後丈　三尺五寸

前丈　四尺五寸

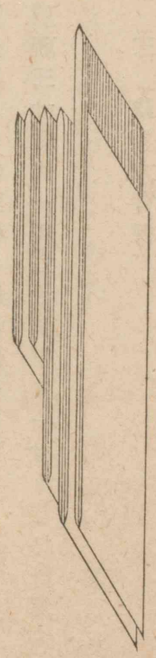
三、表地二丈八尺五寸の用布にて、袖丈一尺六寸五分、身丈二尺六寸仕立上げの羽織を調製せんとせば、裏地の總丈何程を要するか。

但し衿肩廻三寸、縫代一尺二寸、前下り一寸として計算すべし。

答　一丈三尺一寸

三　裁ち方實習

各自の表用布を出して總丈をはかり、織斑・染斑・汚點等の有無を檢べて、積り方の

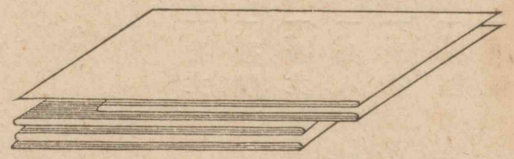


方り折の布

計算をなし、寸法通り袖丈四枚、衿丈二枚、後丈一枚、前丈二枚、後丈一枚を順次に折りて重ね、算法の正しきや否やを確めたる後、先づ袖布を裁ち、次ぎに衿布を切り、次ぎに後前の身頃の山を合せて、衿肩明を二寸三分だけ眞直に裁ち、後四分の廻しをくりて二寸七分の明となし、この幅にて前身頃全體を裁ち落し、それより輪のところを裁ちて左右の身頃となし、次ぎに狹き布の一端より紐附袖口、襠と順次に裁ち切るべし。

次ぎに裏用布を出して袖丈四枚、後丈一枚、前丈二枚、後丈一枚を順次に折り重ね、先づ袖を裁ち切り、後、裏の衿肩をあくべきところに、表の衿肩明を重ね、表に倣ひてこれを裁ち切り、次ぎに輪のところを切りはなし、裁ち落したる狹き布にて裏の襠先二枚を裁つべし。

裏布の折り方



教授方法の大意

準備

羽織名稱圖

本裁綿入羽織女物裁ち方の圖並びに折り方の圖

方法

羽織の種類及び各部の名稱を問答して豫備となし、次ぎに表地裁ち方の圖を示して各部の關係、裁ち切るべき順序、裁ち切りの寸法、積り方の算法等を說明し、それより裏地裁ち方の順序、方法、寸法、積り方等を說き、後二三の應用問題を與へて十分了解せしめ、次ぎに各自の用布及び寸法によりて積り方をなさしめ、尙その寸法通り順次に折り重ねて、算法の誤なきや否やを確めしめ、後これを裁たしむ。

右實習し終らば二三の兒童をしてその要點を復演せしめ、記憶を確かならしむ。

筆記の事項

表裏裁ち切り寸法

裁ち方の圖

積り方の公式

第三　仕立方

一　仕立上げ寸法

一、袖丈　一尺五寸七分　一、袖口明　六寸五分

一、袖附　六寸六分　一、袖幅　八寸六分

一、身丈　二尺五寸　一、前下り　一寸

一、身八つ口　二寸五分　一、衿肩明　二寸四分

一、後幅　七寸五分　一、肩幅　七寸九分

一、前幅　四寸五分　一、紐附　八寸肩より

一、襠幅　下一寸六分　上四分　一、衿幅　一寸七分

一、衿　一尺六寸五分

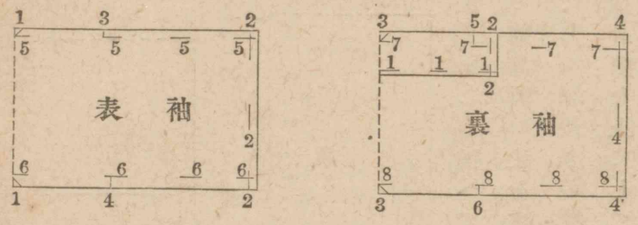
二　標附け方

一、表袖　二、裏袖

三、後身頃　四、前身頃

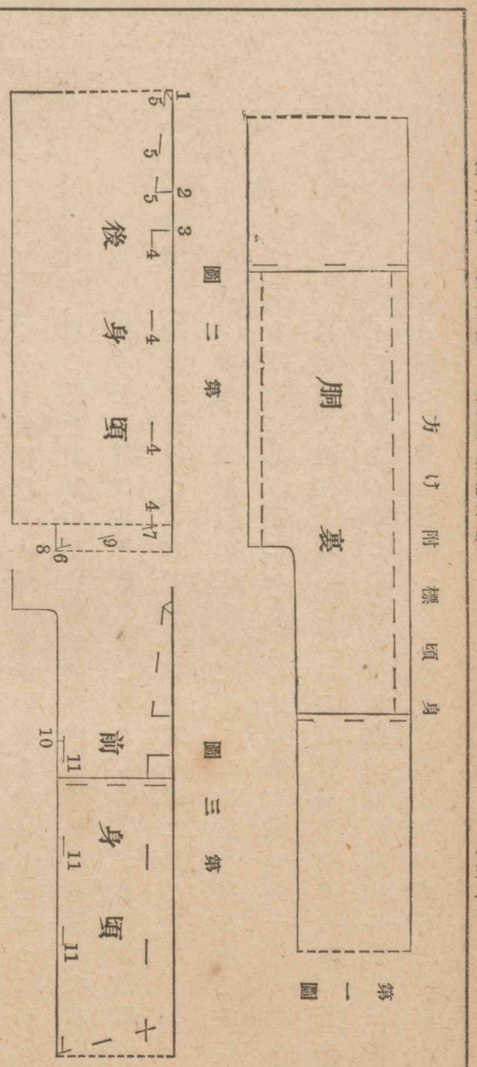
五、襠　六、衿

袖標附け方



1、袖　女物綿入の通り表袖の表を中にして二つに折り、左右の袖を重ね、山・袖丈・袖口明・袖附・袖幅の標を附け、次ぎに裏袖の上に袖口切を載せ表に準じて標すべし。但し袖口の掛け方、裏袖のつめ方等すべて綿入の時に同じ。

2、身頃　表身頃の表を中にして二枚揃へ、後身頃を左に、背を手前にして下におき、その上に裏を載せ、第一圖の如く背及び脇に假綴をなし、衿肩の裁目を一分後身の方に繰り越して山標をつけ、この標より仕立上げの身丈に縫代三分、繰り越し一分とを加へて丈標をなし、殘りの布を上の方に折



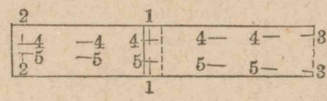
り返し、正しく揃へて待針を打ち置き、次ぎに後丈より前下りの分一寸二分長くして前身頃の丈を定め、又殘りの布を上に返して待針を打ち表布いつぱいの縫代にして胴接ぎの標をつけ、次ぎに山標より二つに折り、第二圖の如く背を手前に、後身頃を上にしておき、袖附・身八つ口・後幅・肩幅・前幅・前丈・前下りの標をつけ、後、第三圖の如く後身頃を左に開き、紐附及び處處に前幅の標をなすべし。但し前幅は別に寸法を定めずして後身頃に準ずるも可なり。又裾口のところは部分縫の時の如く一分五厘をつめおくべし。

注意

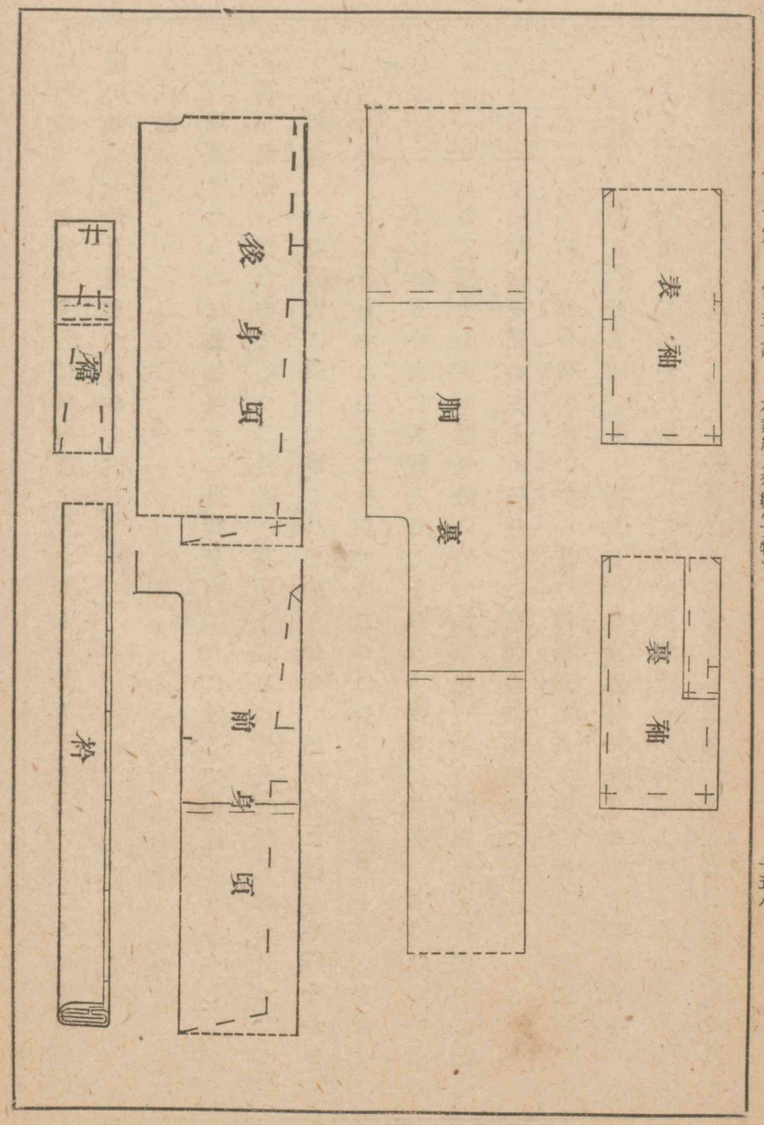
地質厚きものは前身頃を二分、後身頃の方に越して山標をなすべし。

3、襠　表襠の表を中にして二枚揃へ、其の上に裏の襠先二枚重ねて、先づいつぱいの縫代に標をつけ、これを接ぎ合せて裏の方に返し、平躾をかけ、次ぎに表を中にして二枚別別に二つに折り、表布の裏と裏とを合せて下におき、中央に假綴をなし、それより身頃の襠附の長さより一分ひきて襠丈を定め、部分縫の時の如く、先づ下の幅標をつけ、次ぎに曲りの割合を定めて、上の幅並びに兩側の斜の標をつくべし。

襠標附け方



4、衿　部分縫の時の如く、先づ衿幅を定めて縦に折り、次ぎに縫込の布を六分五厘ひきて折り、それより兩側の縫代を折り、衿の表となるべき方を一分出して二つに折り、心の幅を出來上りの衿幅より一分ひきて平らに裁ちおき、中に包みてあらく躾をかけ、中央より二つに折りて山標及び丈標を



附け、次ぎに山の方より五寸はかりて第一の合標をつけ、それより下は凡そ五六寸程づつを隔てて合標を附くべし。但し衿丈は前身頃衿附の丈に衿肩明と外に凡そ四分を加へたるものとす。又合標は篦を用ひずして、糸標をなすべし。

三　縫ひ方順序

一、袖口掛け方　二、表袖
三、裏袖　四、胴接ぎ
五、背縫　六、前下り
七、襠　八、袖附
九、含み綿　一〇、綿入
一一、裾及び衿附の假綴　一二、袖口及び八つ口綴
一三、紐附　一四、衿附
一五、衿綴　一六、縦縫

四　實習

1、袖　本裁綿入女物と同じく、裏袖に袖口をかけ、表裏の袖を縫ひ、鞍をかくべし。

2、胴接ぎ　標を合せて表裏の胴接ぎをなし、三厘程の著にて裏の方へ返し、平躾をかくべし。

3、背縫　左右の身頃を合せて待針をなし、表身頃の方より縫ひ始め、丈標のところ一二寸の間は小針に縫ひ、胴接ぎのところは、一針返して裏身頃の方に縫ひ行き、始め終りとも一針返して打ち留をなす。但し裏の色、表と異なるものは、胴接ぎのところにて糸をかへ、裏と同じ色糸にて縫ひ行くべし。

4、前下り　部分縫の時の如く、前身頃を一分後身頃の方に越して山標をつけ、裏の幅を五厘程弛めにして、表布の標の一分上と、裏布の一分下とを合せて待針をなしてこれを縫ひ、並の著にて裏の方へ返し、平躾をなし、始め終りとも一針返して打ち留とす。

5、襠　身頃の脇及び襠に標の通り折をつけ、稍張りめに合せて五六寸おきに待針をなし、身頃の方を見て後襠よりつけ始め、終りは一二寸程返し針をなし、身頃の方に折り返して平躾をかくべし。

6、袖附及び含み綿　先づ左右の表袖をつけ、袖の方に返して躾をかけ、次ぎに裏袖をつけ、表と反對に裏身頃の方に返して躾をかく。それより綿入の時の如くして袖口・八つ口・身八つ口に含み綿をなすべし。

7、綿入　先づ表裏の衿・丈等を合せて能く較べおき、裏を返して夜具疊みとなし、綿入の時の如く、表の後身頃を出して眞綿をひき、袖は附より前身頃の方に折り返し、上は肩より八九寸程、下は丈標より二三寸、左右は袖幅だけに綿を擴げ薄きところには附綿をなし、更に裾口のところに二寸幅程の綿を入れ、丈標の稍下より折り返し、袖のところは附にて切り、全體に綿を弛めにおきて眞綿を引き、裾口に二尺ざしを載せて綿をおさへ、裏をその上に折り返し、能く背縫を合せて擴げおくべし。

それより上前に眞綿をひき、後身頃より續きたる綿を折り返し、袖の殘りたるところには別に綿を入れ、前幅だけに綿を切りて眞綿を引き、その上に表の前身頃を返して丈・幅共に能く引き合せ、次ぎに同じ仕方にて下前に綿を入るべし。

8、裾及び衿附の假綴　裾口によく綿を引きよせ、五六分程上に假綴をなし、次ぎに衿附のところ表裏をよくひき合せて背縫・衿肩・紐附等のところに待針をなし、

裾口は表前身頃の幅を五厘程はりて合せ、總體に假綴をなすべし。

9、袖口及び八つ口綴け方　綿入の時の如く袖口下に四つ留をなして綴け、次ぎに内外の八つ口及び脇明のところに四つ留をなしてまたこれを綴け行くべし。

10、紐附　左右の紐附を綴け、部分縫の時の如く下方を上に重ねて折り、一分五厘程出して前身頃の標のところに合せ、返し針にて能く綴ぢつけおくべし。

11、衿附及び衿綴　前身頃の裏の方を見て、衿の二枚になりたる方の山標と背縫とを合せて待針をなし、次ぎに衿肩明二寸程の間は、身頃も衿も同じ張にして合せ、衿肩廻より紐附までは衿を稍〻弛めに、それより下は衿も身頃も略〻同じ張にして合せ、合標のところは何れも待針を打ちて、先づ左前より背縫のところまで一針抜き、或は刺縫にして附け行き、紐附のところは返し針となしてよく留め、衿肩廻は小針に縫ひ、背縫のところは一針返して縫ひ行くべし。

かくて片前つけ終らば、表より見て衿の加減を檢べ、後同じ仕方にて右前をつく、次ぎに左右の衿先を縫ひて裏の方に返し、心布を折角のところまでにて裁ち切り、衿の縫込を綴ぢ、引き返して能く合標を合せ、小針に綴けつくべし。

12、縫綴　能く丈・幅を引き合せて、背縫及び左右の後襠に縫綴をなし、衿に躾をかけて、仕上げをなすべし。

附　疊み方

先づ衿肩を左に、前身頃を上にして左右とも襠の中央より折り、衿の前身頃につきたる部分は躾のかけある通り表の方に、衿肩の部分は裏の方に折り返して、背縫のところより二つに折り、よく丈・幅等を引き合せて、袖を附より各〻後身頃の方に返し、紋所のあるものは白紙をあてて紋の汚れぬやうになしおき、後、袖丈の二三寸下より裾を上に折り返すべし。

教授方法の大意

準備

本裁綿入羽織仕立上げの標本並びに表裏標附けの圖

局部要所の標本

方法

本裁綿入袖及び綿入羽織部分縫の仕立方につき、其の順序・方法を問答して豫備となし、次ぎに女羽織の名稱圖若しくは標本を掲げてこれと對照しつつ仕立上げの寸法を説明し、後標附けの圖を示してその順序を説き、それより縫ひ方の順序・方法を問答的に説明し、十分了解せしめたる後、以上の各項を筆記せしめて實習をなさしむべし。

筆記の事項

仕立上げ寸法

標附け方

縫ひ方順序

備考

土地の情況により袖無羽織を課する場合には左の如き順序・方法によりて教授すべし。

袖無綿入羽織

一　裁ち切り寸法及び積り方

表用布　一尺幅　五尺一寸

一、後丈　一尺六寸二分　一、前丈　一尺六寸八分

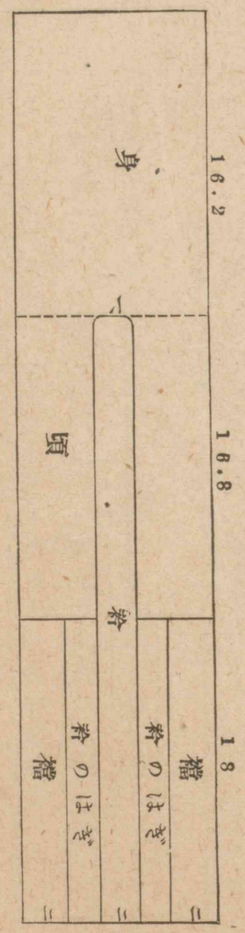
一、衿丈　一尺八寸　一、衿幅　三寸

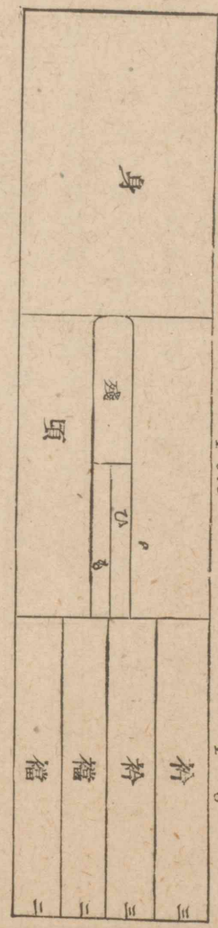
一、襠幅　二寸　一、衿肩明　一寸内二分の廻し

一、紐丈　六寸

裏用布　一尺幅　三尺

一、後丈　一尺四寸七分　一、前丈　一尺五寸三分





二　仕立上げ寸法

一、身丈　一尺五寸　一、後幅　いつぱい
一、前幅　いつぱい　一、脇明　五寸五分
一、前下り　二分　一、襠幅　下一寸五分　上九分
一、紐附　五寸肩より　一、衿幅　一寸二分

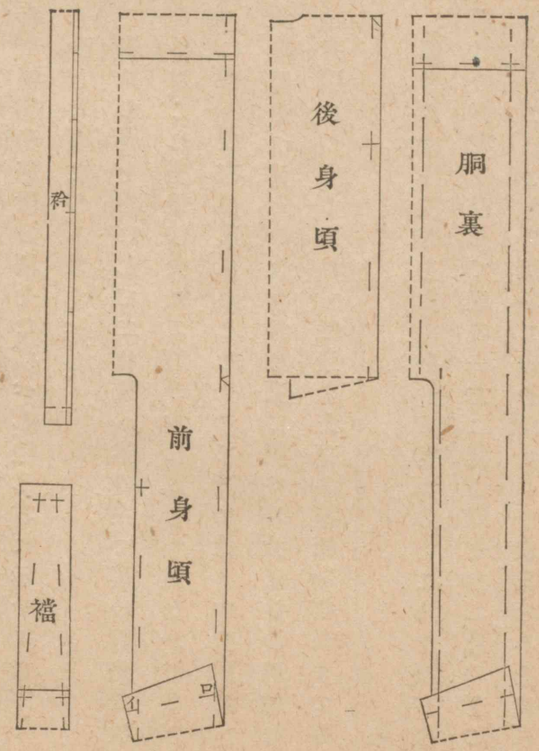
三　標附け方

1、身頃　表身頃の表を中にして縦に二つに折り、羽織の時の如く後身を左に、背を手前にして下に置き、裏も同じく折りて上に載せ、背及び脇を假綴し、前身頃を二分後身頃の方に越して山標をつけ、此の標より後丈をはかりて裾を上に折り返し、前身頃は二分の前下りとして、圖の如く斜に折り、表の折り返しをイロの如くすべて同じ寸法にはかりて胴接ぎの標を附け、次ぎに肩山より二つに折り幅脇明紐附の標をなすべし。但し右に示せる前下りの仕方は、表の折り返し少きものにのみなすべし。

2、襠　表襠の表を中にして二枚揃へ、其の上に裏の襠先二枚重ねて並の縫代に標をつけ、これを接ぎ合せて裏の方に返し平躾をかけ、次ぎに表を中にして各、二つに折り、表布の裏と裏とを合せて下に置き、中央處處に待針をなし、寸法通り丈の標をつけ、それより後身頃に附くる方は、並の縫代にて上まで眞直に標し、前身頃につくる方は、寸法通り上下の襠幅をはかりて、圖の如く斜に標すべし。

3、衿　縞目又は模樣等を能く合せて衿山のところを掛接ぎとなし、次ぎに表衿と同寸の裏布を合せて縦の一方に縫ひ躾をなし、此のところを三分五厘の縫代に折り、これより衿幅の二倍をはかりて表布のみを縦に折り、次ぎに此の折目より三分五厘を減きて裏布を折り、衿の表となるべき方を五厘出して更

に二つに折り、山・丈及び合標をなすべし。



四　縫ひ方

1、身頃及び襠　後身頃及び前身頃の胴接ぎをなし、裏の方に返して躾をかけ、

次ぎに標を合せて後前に襠をつけ、何れも身頃の方に折り返して躾をかけ、後、裏の丈を稍張りめにして脇明を合せ、後前共に襠を挾みて四つ留をなし、次ぎに表は幅標より一分縫代の方に、裏は一分身頃の方に寄せて折をつけ、これを縫ひて裏の方に返し、それより一分の著にて襠の上を縫ひ、亦裏の方に返して躾をかくべし。

2、綿入れ方及び假綴　表裏共に裏を返してよく引き合せ、次ぎに表の後身頃をのべて丈・幅共に綿を身頃より一二寸出して載せ、裾口及び八つ口のところは別に一寸幅程の綿一枚を入れて羽織の時の如く上の方に折り返し、肩より兩手を入れ、引き返して裏の前身頃を出し、片前づつ綿を入れて表をかぶせ、能く引き合せて後、裾口及び衿附をあらく綴ぢ附くべし。

それより並の縫代にて紐を縫ひ、引き返して躾をかけ、中に眞綿を入れ一端を五行留となし、他の一端は縫目を裏の方に向けて前身頃の標に合せ、返し針にて能く裏身頃に縫ひつけおくべし。

3、衿及び縦綴　身頃の裏を見て背の眞中と衿の山標とを合せて待針をなし、

紐附までは稍、衿を弛めに、それより下は略、同じ張り方にして、羽織の時の如く衿の折目の一分上を刺縫又は一針抜きに縫ひ、次ぎに衿先を縫ひて裏の方に折り返し、後合標を合せて衿紐をなすべし。

それより左右の後襠に縦綴をなし、衿に躾をかけて、能く仕上げをなすべし。

第六課　本裁袷羽織男物

要旨

本裁袷羽織（男物）につき、其の仕立上げ寸法、標附け方、縫ひ方等を授け、綿入羽織（女物）との異なる點をよく了得せしめ、是等に關する知識及び技能を習得せしむ。

第一　部分縫

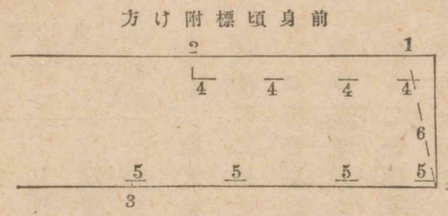
襠及び衿附け方

用布　並幅　二尺五寸　一枚

半幅　二尺三寸　二枚

四つ割一尺八寸　一枚

1、標附け方　綿入羽織の部分縫の時と同じく、並幅二尺五寸を衿、半幅二尺三寸二枚を表裏の前身頃、四つ割一尺八寸を襠と見做し、左の如く標附けをなすべし。



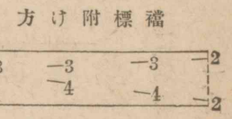
イ、前身頃　二枚の用布を重ねておき、一枚卽ち上の方を裏、下の方を表として、左の如き順序にて標をなす。

一、丈　二、脇明　三、紐附　四、前幅　五、衿附縫代　六、前下り

右の順序の如く、先づ脇の方、裾の端より一寸二分のところに丈標1をなし、次ぎに脇明標2、紐附3、前幅4 4、衿附5 5 5を標し、次ぎに前下り6を標すべし。但し衿附縫代の曲りは女物綿入の時に同じ。

ロ、襠　四つ割一尺八寸の用布を眞中より二つに折り、輪を右に、前の方を手前に、表の方を上にして置き、左の如き順序にて標をなす。

一、丈　二、幅　三、後の曲り　四、前の曲り



右の如く、先づ裾口より丈を定めて1を標し、次ぎに手前裾口のところに並の縫代をとり、それより幅を定めて22を標し、後綿入羽織の時と同じく曲りの割合は出來上り幅の三分の一を後、三分の二を前とし、先づ後の方を定めて33を標し、それより前の方は、丈標のところ幅一分を殘して標をなし、之と裾口の幅標との間に尺を當てて、適宜44を標すべし。

ハ、衿　綿入羽織の時と同じく、衿となすべき並幅の用布を取り、仕立上げ衿幅寸法の二倍に、縫代六分五厘を加へたる寸法のところに折目をつけ、其の折りたる布を、更に前の耳端より六分五厘ひきて手前に折り返し、次ぎに輪の方を三分五厘、耳の方を三分に折り、輪の方卽ち表となるべき方を五厘出し、二つに折りて合標をつけ、熨鏝をかくべし。

又心を入るるときは、綿入羽織の時と同じく、四つ割一尺八寸の用布を、出來上りの幅より一分狹く折りて、衿の表となる方の上に載せ、縫込にて包み、平躾をかくべし。

注意

右の部分縫に於ける各部の寸法は左の如し。

一、丈　いつぱい　一、脇明　一尺三寸五分
一、紐附　七寸上端より　一、前幅　いつぱい
一、前下り　八分　一、襠丈　八寸五分
一、襠幅　一寸八分　一、衿幅　一寸九分

2、縫ひ方

イ、前下り　丈標より表は五厘上、裏は五厘下を合せて待針をなし、表を見て標の五厘上を縫ひ、裏の方に折り返して平躾をなし、衿附のところにも假綴をなし、次ぎに紐附をこしらへ、前の女物綿入羽織の時と反對に折り重ねて附けおくべし。

ロ、衿附　先づ前身頃の裏に、衿の表となるべき方を合せ、紐附より上は稍、衿を弛めに、下は平にして待針をなし、次ぎに前身頃を三つ若しくは四つに折り込み、衿の裏となるべき方の合標を合せ待針を打ち直し、衿の表は折目の七厘上、

裏は二厘上を、肩より二三寸下迄、刺縫又は一針拔きに四つ縫をなし行き、一針戻して、それより上は、身頃と表衿のみを縫ひつけ、始めは二三寸返し針に、終りは一針返して打ち留をなす。

次ぎに二三分ばかりの著をとりて衿先を縫ひ、表衿の方に折り返して縫込を綴ぢ附け、引き返して表を出し、裏衿の縫ひ殘しある分を極小針に表身頃に絎けつけ、衿をよく整へて平躾をなすべし。

ハ、襠附　襠は上の縫込を中に折り込み、躾糸にて幅の兩脇を綴ぢおき、前身頃の方に標通り折目をつけ、前襠を挾みて身頃を稍、弛めに待針をなし、小針にて刺縫又は一針拔きに縫ひ行き、上下共に一針返して、更に一寸程縫ひ返しおくべし。

右縫ひ終らば身頃の方に折目をつけて、表をひき返し平躾をなすべし。

教授方法の大意

準備

襠及び衿の標附圖解並びに縫ひ方の標本

方法

綿入羽織前身頃、襠及び衿の標附け方、縫ひ方等につき問答し、舊觀念を喚起して豫備とし、目的を指示して、標附け方の圖及び縫ひ方の標本につき、其の標附け方、縫ひ方の順序方法等を問答教授し、兒童の十分了得したるのち、各自をして實習せしむべし。

第二　仕立方

一　仕立上げ寸法

一、袖丈	一尺四寸二分	一、袖口	七寸五分
一、袖幅	八寸九分	一、身丈	二尺六寸五分
一、後幅	八寸	一、肩幅	八寸七分
一、前下り	一寸	一、前幅	五寸
一、紐附	八寸五分	一、襠幅	一寸八分
一、衿幅	二寸	一、裄	一尺七寸六分

二　標附け方

標附をなすには左の順序によるべし。

一、表袖　二、裏袖　三、後身頃　四、前身頃　五、襠　六、衿

1、表袖　男物綿入の時と同じく、表を中にして二つに折り、兩袖を重ね、山を左に、袖口の方を向ふにして置き、山・袖丈・袖口・袖幅・袖丸と順次標をなすべし。

注意

袖丸の大さは五六分として標をなすべし。

2、裏袖　表と同じく、表を中にして二つに折り、兩袖を重ね、其の上に袖口切を一分出して載せ、袖口掛・山・袖丈・袖口・袖幅・袖丸と順次標をなすべし。

3、身頃　女物綿入羽織の時の如く、先づ表身頃二枚を表を中にして合せ、背を手前に、後身頃を左にして下に置き、其の上に胴裏の表を中にして合せたるものを載せ、衿肩を揃へて假綴をなしおき、次ぎに前身頃を後身頃の方へ一分繰り越して山標を定め、それより丈を定めて、殘りを裏の方に折り返し、ねぢれぬやう正しく揃へ、兩端及び中程に待針をなし置くべし。

次ぎに此の後丈より前下り及び縫代の分一寸二分を長くして前丈を定め、後の如く殘りの分を折り返して、又待針をなしおき、前後共表布を並の縫代として、胴接の標をつけ、次ぎに肩山より二つに折りて、後身頃を前身頃の上に載せ、袖附後幅・肩幅・前幅・前丈・前下りと順次標をなすべし。

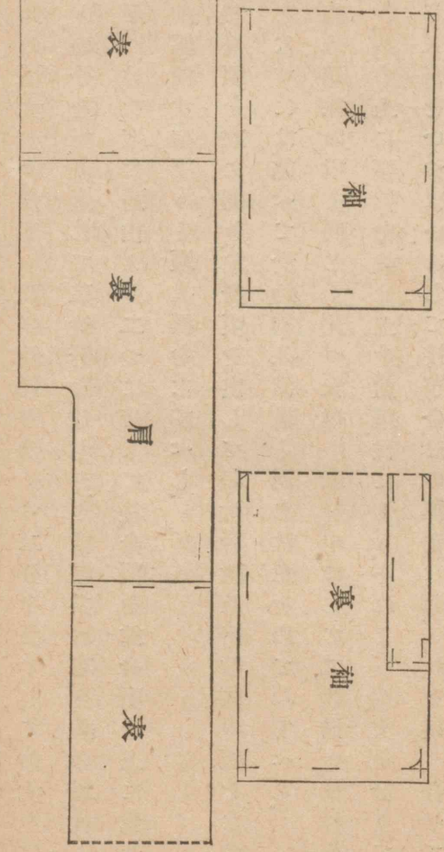
次ぎに後身頃を左に開き、前身頃を出して紐附・衿附及び前幅の標をなす。

右標附をなすには、總べて女物綿入羽織と同じ注意を以てなすべし。

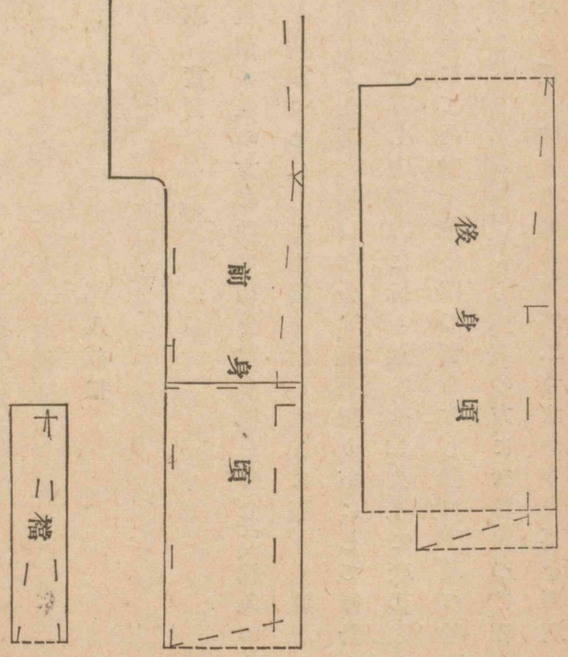
4、襠　綿入羽織の襠と同じく、先づ表襠の表を中にして二枚揃へ、裁目を手前にしておき、其の上に裏襠を載せ、上を並縫代にとり、それより襠丈を計りて殘りを折り返し、表布をいつぱいにして接ぎ合せの標をなし、これを接ぎ合せて裏の方に折り返し平躾をかく。

次ぎに各表を中にして二つに折り、裾の方を右に、後の方を向ふにしておき、先づ身頃襠附の丈より一分短くして襠丈を定め、次ぎに寸法通り襠幅を定め、曲りの割合は部分縫の時の如くにして後の方を定め、上は此の標より一分の幅を殘して標をなし、これと裾口とに尺を當てて適宜標をなすべし。

5、衿　部分縫の如く、先づ定めたる衿幅の寸法を二倍して、それに六分五厘の縫代を加へたる寸法のところより、裏の方に折り返し、更に之を先の布端より、六分五厘引きて中に折り返し、次ぎに輪の方を三分五厘、耳の方を三分の縫代に折り、更に表の方を五厘出して二つに折り、衿幅より一分狭き心切を中に包みて躾を



圖合綜方け附標（物男）織羽袷裁本



かけ、山標・丈標をなし、其の間五寸置位に合標をなすこと及び衿丈の計り方等は、總べて綿入羽織に同じ。

三　縫ひ方順序

一、袖口掛け方　二、袖
三、胴接　四、背縫
五、前下り　六、後襠
七、衿附　八、前襠
九、袖附

四　實習

1、袖口掛け方　裏袖の表の方に袖口切を載せ、標を合せて、綿入の時と同じくこれを縫ひ、袖口切を稍張りめにして兩端を絎け、次ぎに廻りに躾をなしおくべし。

2、袖　袷の時と同じく、表裏の袖口を合せ、裏を張りめにして待針をなし、これを縫ひて兩端に返し留をなし、表の方に折り返すべし。次ぎに表裏とも山より二つに折りて、表裏の内袖にて外袖を包み四つ留をなし、袖口下及び袖下を刺縫または一針拔にして縫ひ行き、丸みをこしらへ、裏の方に折目をつけ、表を引き返して平躾をなしおくべし。但し袖下の附の方は、二寸ばかり表裏を別別に縫ひおくべし。

3、胴接　標を合せて綿入羽織の時の如く胴接をなし、裏の方に淺き著にて折をつけ平躾をかくべし。

4、背縫　後身頃の表を中にして二枚揃へ、丈標より折りて表を手前、裏を向ふにして表裏の衿肩を揃へ、胴接の縫目をよく揃へて、標通り待針をなし、衿肩の方より刺縫又は一針拔に四つ縫にし、胴接のところに至らば一針戻して縫ひ行き、上下は返し留として手前に折を返し、表より平躾をかくべし。

5、前下り　部分縫の時の如く、裏を表の方に五厘越して、表布の標の五厘上と、裏布の標の五厘下とを合せ、裏を五厘程弛めに待針をなして縫ひ行き、裏の方に折り返して平躾をかくべし。

6、後襠　先づ襠切を部分縫の如く、裏を中にして合せ、上の縫込は表裏共中に折り込み、幅の兩端を躾糸にて綴ぢおき、次ぎに後身頃の表裏にて襠の後の方を挾み、身頃の方を弛めにして待針をなし、標通り一針拔にして縫ひ行き、上下の兩端は、一針戻して更に返し縫をなす。次ぎに表身頃の方に折り返して著をかけ、後脇

明のところより表を引き返して平躾をなすべし。

7、衿附　先づ衿附のところを、二三分の針目にて假綴をなし、標のところに部分縫の時の如く紐附をつけおき、次ぎに前身頃の裏に、衿の表となるべき方を合せ待針をなし、前身頃を包みて衿の裏の方を引き合せ、合標を合せて待針をさしかへ、山より五寸下の合標のところ迄は、刺縫又は一針拔に四つ縫をなして一針戻し、それより上は裏となるべき方の衿を離して、小針に縫ひ行き、背縫にて又一針戻し、右前も亦左と同じ仕方にて附け行くべし。

次ぎに衿先は部分縫の時の如く、表の方を稍〻弛めにして三分程先を縫ひ、裏の方に折り返して、縫ひ込みを衿附の縫代に綴ぢ附け、引き返してよく角を整へ、衿肩廻のところを細かく表に絎け附け、身頃を五厘程ひきて衿を折り返し、紐附の二針程上迄躾糸にて綴ぢ置くべし。

8、前襠　前身頃の表裏にて襠切を挾み、身頃の方を稍〻弛めに適宜待針をなして、一針拔に四つ縫にし、上下共に一針返して縫ひ返し、表身頃の方に折目をつけ、脇明のところより表に返して平躾をなすべし。

9、袖附　先づ袖身頃共に標通り折目をつけ、表袖を表身頃に合せ、山に待針をなして袖下のところに四つ留をなす。四つ留の仕方は、先づ男物單衣の如く表袖にて表身頃二枚を包みて留め、次ぎに裏は身頃にて袖を包み、同じく四つ留をなすべし。それより一寸ばかりの間は、身頃の幅標より五厘程先に折をつけて、極めて細かく刺縫をなし、其の他のところは成るべく小針にして縫ひ行き、山にては一針返し、終りも亦始めの如くにして返し留をなし、袖の方に折をつけ縫込あるものは、割躾をなして表より平躾をかけおくべし。

次ぎに裏袖は、表と反對に袖の方を、標より五厘程先に折目をつけ、表の如くにして縫ひ行き、前身頃の方五六寸の間あけおき、身頃の方に折り返して其處より表の方へ引き返し、後細かく絎けつくべし。

注意

地薄のものは、表袖は身頃の方を、裏袖は袖の方を、總べて幅標の上を淺く折りて附くべし。

右終らばよく糸屑を取り、火熨斗をかけて仕上げをなすべし。

教授方法の大意

準備

袷羽織仕立上げの標本並びに標附け方の圖

局部要所の標本

方法

綿入羽織及び袷羽織部分縫の標附け方、縫ひ方等につき問答して豫備となし、次ぎに羽織の名稱圖若しくは標本を示して、仕立上げ寸法を教授し、後標附け方の順序・方法を圖によりて説明教授し、次ぎに縫ひ方の順序・方法を授け、殊に肝要なる部分は、標本を附與してよく觀察せしめ、十分了解せしめたる後、左の事項を筆記せしめて實習せしむべし。

筆記の事項

仕立上げ寸法

標附け方

縫ひ方順序

第七課　腹合帶仕立方練習

本課の教授は前學年に於て授けたる女腹合帶の用布の整へ方、縫ひ方順序、心の拵へ方等を復習問答して舊觀念を惹起しおき、次ぎに左の事項を注意して實地に練習せしむ。

縮緬類の片側ものなるときは、丈・幅ともに豫め伸びの分を見計らひおきて、それだけ張りて合せ、縫目のところは二分幅程の細紙をあて、其の上を縫ひ行くを可とす。また鹿子絞等の品は先づ程能く伸ばして裏打をなし、後一方の表と合すべし。

又地薄の縮緬或は絽等の類には極めて薄き金巾等を裏打するを可とす。

備考

若し場合によりて丸帶を仕立てしむるときは、左の方法によるべし。

布の伸縮を直し、兩側の縫代のところは稍〻多く伸ばして、表を中に幅を二つに折り、子供帶の時の如く待針をなして假綴をなし、幅及び兩端に標を

つけ、眞中帶幅程を殘して縫を半返に縫ひ、先づ平烙鏝をかけて能く伸ばしおき、それより縫目を割りて亦烙鏝をかけ、次ぎに兩端を半返に縫ひ、五厘の著にて片返となし、烙鏝をかけ、角の縫込を斜に切りて厚さを平らになし、角を綴ぢ心を入る。心は一枚ならば表の縫込を減きたるものより五厘程狹く幅を平らに裁ち落し、眞綿をひきて帶側の上に載せ、表と共色の糸を二つに割りて表の方に出さぬやう、地質の間を極小針に抄ひてあらく綴ぢつけ、二枚ならば腹合の時の如くしてつけ、上に眞綿をひき、輪の方に二尺程づつを隔てて引き糸をつけ、引き返して縫ひ、殘りを細かに絎け、鞆をかけて仕上げをなし、壓をおくべし。又地薄の品は一針拔きに縫ひて片返しとなし、縫目を割らずして心を綴ぢつくべし。この他心の弛め方、飾糸の掛け方等は、すべて腹合帶の時に同じ。

第八課　改良前掛

要旨

改良前掛(卽ち西洋前掛)各部の縫ひ方、裁ち方、並びに仕立方の順序方法を授けてその技能に習熟せしむ。

第一　各部の縫ひ方

一　ミシン縫

用布　幅五寸、長さ一尺の天竺金巾　一枚

用糸　三十番並びに六十番の白カタン糸

用布の一端より二寸程離れたるところに縫に折をつけ、三十番のカタン糸を用ひて、一分五厘の縫代にて空縫をなし、手前の方に折をつくべし。

次ぎに六十番の糸にて、表を見て圖の如く、折目より一分ほど下のところに五厘以下の針目にて、一針ごとに本返をなして縫ひ行くべし。

ミシン縫

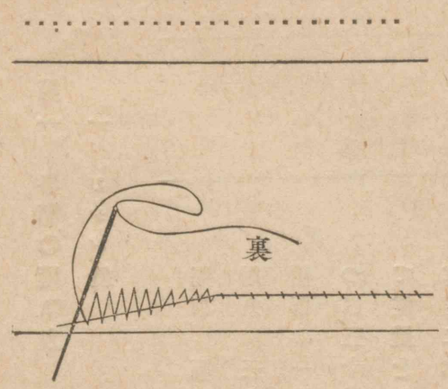
表

裏

二　まとひ縫

用布・用糸共にミシン縫に使用せしものを用ふ。

用布の縫の一端を五分の深さに折り、其の中一分程を更に折り返して三つ折となし、處處に待針を打ちて留め置き、六十番の糸を用ひて一端に留め結をなして、裏の折角より針を出し、極めて小針に表を抄ひてまた裏の折角に出し、順次此の如き針使にて圖の如くまとひ行くべし。



教授方法の大意

準備

ミシン縫及びまとひ縫の標本、並びにその擴大圖

白木綿及び赤の毛糸

方法

改良前掛の形狀及び地質につき兒童の知れるところを問答し、尙此の前掛は從來の前掛に比し、如何なる點が勝れるかを問ひて其の用ひ方を明かならしめ、次ぎにこの前掛を縫ふには、前に學びたる各種の縫ひ方と異なる縫ひ方あるを以て、先づこれを學ばざるべからざるを說き、ミシン縫の標本及び擴大圖を示して能く觀察せしめ、豫め用意しおきたる白木綿及び赤の毛糸にて、敎師示範しつつ縫ひ方の順序、針使の方法を授け、十分了得せしめたる後、各兒童の用布につきて實習せしむ。

右終らばまとひ縫を授く、其の方法ミシン縫の時に同じ。

第二　裁ち方

一　裁ち切り寸法

蝶蝶形前掛

但し四五歳位の子供用

用布　白キャラコ大幅　長さ二尺二寸

レース五六分幅　長さ六尺

テープ三分幅　長さ三尺

一、袖丈　一尺　一、袖幅　二寸五分

一、身丈　一尺七寸　一、身幅　二尺四寸

一、脇明のくり　縦四寸、横三寸

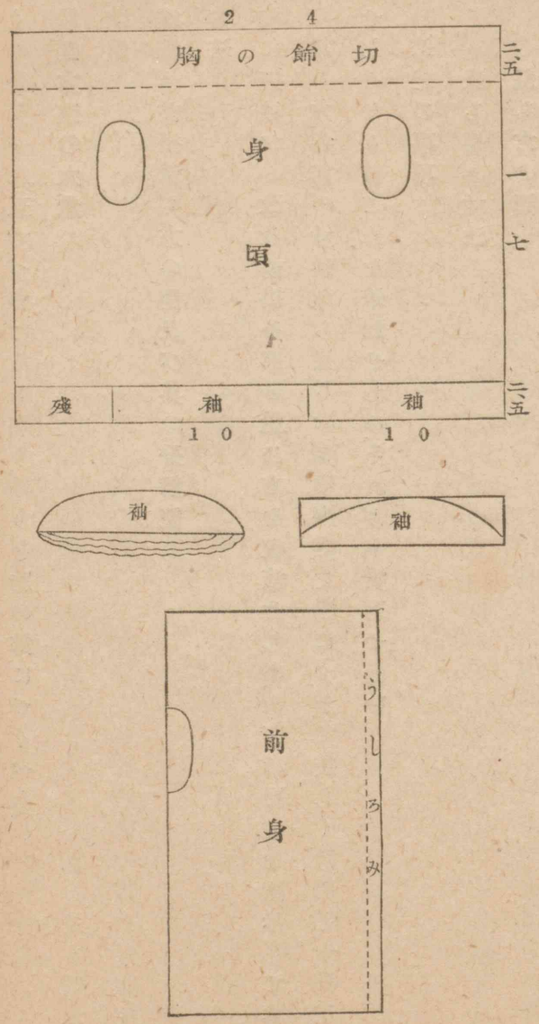
但し飾切の下より一寸五分下りたるところよりくり始む。

一、胸の飾切　長さ二寸五分、幅二尺四寸

二　裁ち方實習

先づ袖幅二寸五分を總丈の中より裁ち落し、更にこれを一尺づつの長さに二つに切り、袖附の方を圖の如く櫛形に裁ち落すべし。

次ぎに殘りの布を中央より縦に二つに折り、更にこれを圖の如く、耳の方を一寸出して縦に折り、この折目のところにて、上より四寸下りたるところに標をつけ、脇明四寸を取りてまた標し、その中央にて横に一寸五分はかりて標をつけ、此の標を通して、圖の如くくりの標を附し、後これを裁ち切るべし。レースは袖口につ



くる分を一尺五寸づつに裁ち切り、殘りを胸の飾につくべし。

教授方法の大意

準備

蝶蝶形前掛裁ち方の圖及び其の分解圖

方法

前に授けたる改良前掛各部の縫ひ方を復演せしめ、次ぎに目的を指示して本課の裁ち方、各部の寸法、裁ち切るべき順序等を圖につきて委しく説明し、十分了解せしめたる後これを筆記せしめ、それより實習せしむ。

筆記の事項

裁ち切り寸法

裁ち方の圖

第三　仕立方

1、袖　レースを袖丈に合せて、同じ長さに縮め置き、縫代を淺くして小針に合せ

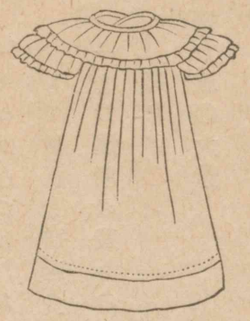
縫をなし、袖布の方に折り返して、表よりミシン縫をなすべし。

2、身頃　裾を五分の深さに折りてまとひ縫をなし、次ぎにレースの兩端を細く三つ折にしてまとひ、胸の飾切と同じ長さに縮めおき、飾切に合せて小針に縫ひ、飾切の方に折り返して、表よりミシン縫をなすべし。

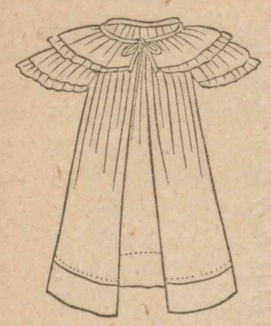
それより袖の櫛形の方を小針に縫ひて、六寸程の長さに縮め、肩山と袖山とを合せて小針に縫ひ、一針返して打ち留をなし、身頃の方に折をつけ、脇明の殘りは細く三つ折りになして躾をかけ、表より總體にミシン縫をなす。

次ぎに飾切の幅を二寸五分表の方に折り返し、その折角より四分はなれたるところに、あらく平躾をかけおきてミシン縫をなし、これにテープを通して程

前



後



よく縮め置くべし。

それより子供のたけに準じて裾より一寸五分程上りたるところに二分程の揚を二三本取りて表よりミシン縫をなし、後よく仕上げをなして圖の如く仕立上ぐべし。

注意

一、レースの代りに共ぎれのギャダをつけ、又テープの代りに細き紐を用ふるも可なり。

一、ギャダをつけたるときは、袖附のところは殘り切を五分程の幅に斜に裁ちて見返し切をつけ、縫目を包みて端をまとひおかしむべし。

一、また脇明の殘りのところも、三つ折にせずして見返し切をつけしむるも可なり。

教授方法の大意

準備

蝶蝶形前掛仕立上げの標本

方法

蝶蝶形前掛の裁ち方及び各部の縫ひ方を問答して豫備となし、それより仕立上げの標本を示してこれと對照しつつ縫ひ方の順序・方法を説明し、よく了得せしめたる後、これを實習せしむ。

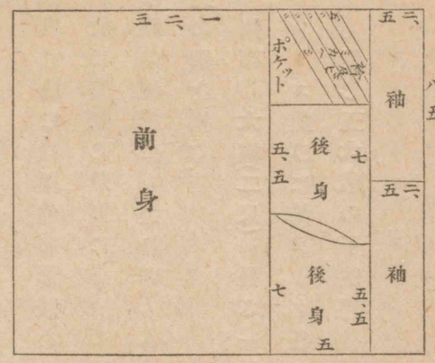
備考

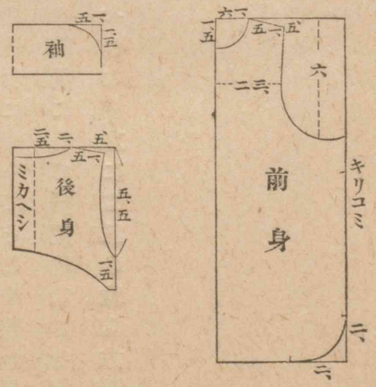
改良前掛には種種の形狀あり、又年年の流行によりてその形狀を異にするが故に、實際の教授にありてはなるべく簡易にして實用的なるを選ぶと共に、時の流行にも遲れざらんやう勉むべきなり。左に二三の裁ち方及び仕立方の圖を掲ぐ。

一、用布　大幅(二尺)　長さ一尺七寸

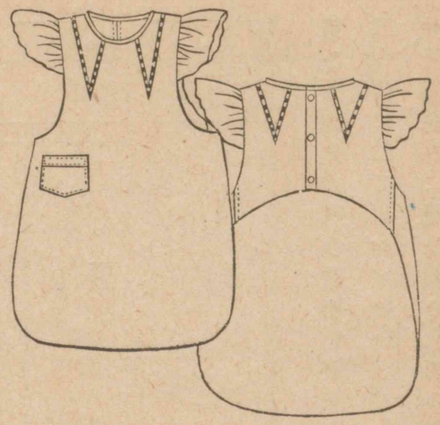
レース並びに飾テープ各二尺五寸

但し五六歳の子供用



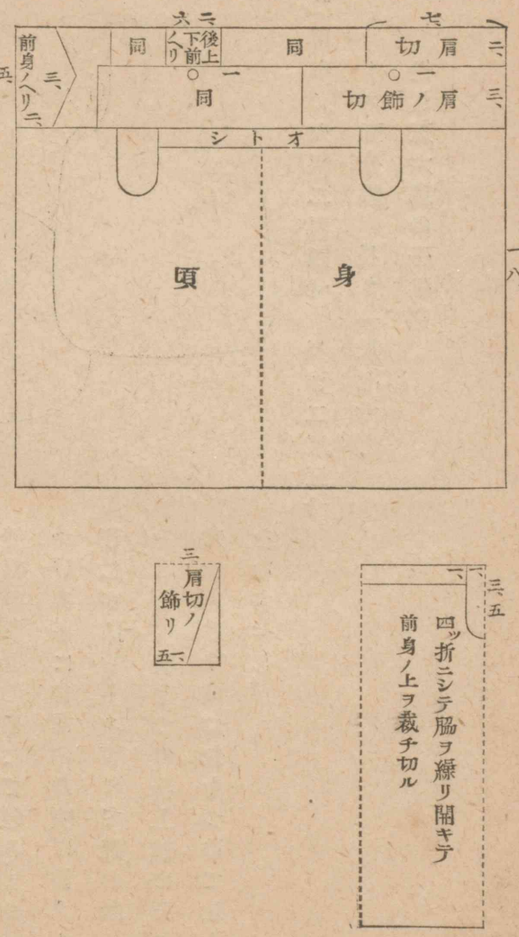


縫ひ方は先づ丸く裁ちたる袖切にレースをつけてミシンをかけ、他の眞直なる袖切を六寸ほどの長さに縫ひ縮めおき、それより後身の見返しを折りてミシンをかけ、下部も細く三つ折にしてまたミシンをかくべし。次ぎに前身の裾を切込の處より三つ折にしてミシンをかけ、後布と前布

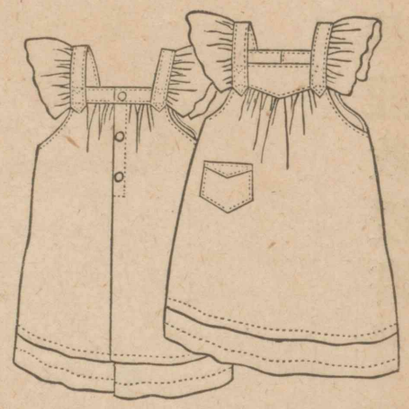


との肩及び脇を縫ひ合せ、何れも後身の方に返してミシンをかく、次ぎに左右の袖をつけ、袖下及び袖附の縫目を見返し切にて包みミシンをかけ、次ぎに後前の身頃に飾テープ若しくはレース等にて圖の如く飾をなして衿をつけ、後、上前に三つ釦穴をあけ、下前に釦をつけて仕上げをなすべし。

二、用布　大幅二尺四寸）長さ二尺三寸
　レース五分幅　長さ一尺七寸
　但し五六歳の子供用



縫ひ方は先づ肩の飾切を取り、其の眞直なる方を殘して他の三方を細く三つ折にしてミシンをかくるか又はレースをつけおき、眞直なる方を五寸程の長さに縫ひ縮め、肩切の幅を二つに折りて其の先を⌂の如くに



裁ち切り、今縫ひ縮めたる飾切を挾みて、其の周圍に表よりミシンをかくべし。

次ぎに裾口を一寸裏に返し、二分中に折り込みてミシンをかけ、下より一寸五分程上りて二三分幅のタック一本若しくは二本を取り、後身の上下前に裏の方へ見返しをつけて表よりミシンをかけ、後、袖くりを細く三つ折になすか或は見返しをつけてミシンをかくべし。

それより前身の上端を前の縁の長さに合せて縫ひ縮め、裏より縁をつけ、表及び兩端を折りて鞐をかけ、表よりミシンをかく。

次ぎに後身も上前下前共に縁切の長さに合せて縮めおき、前身の時と同じ仕方にて縁をつくべし。

それより肩切の先を身頃の縁の上に重ね、後前とも鞐にて留め、圖の如く

ミシンをかけて留めおき、ポケットを附け、後上前の緣及び見返しに横に一つづつ釦穴をあけ、穴かがりをなし、下前に釦を附けて仕上げをなすべし。

高等小學 裁縫教授書 終

大正五年一月二十二日印刷
大正五年一月二十五日發行

（高等小學裁縫教授書第一、第二學年用）
定價金拾六錢

著作者　文部省
發行者　東京市日本橋區新右衞門町拾六番地　株式會社國定教科書共同販賣所
代表者　大橋新太郎
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
發行所　東京市日本橋區新右衞門町拾六番地　株式會社國定教科書共同販賣所

著作權所有
文部省

広島大学図書
2000026534